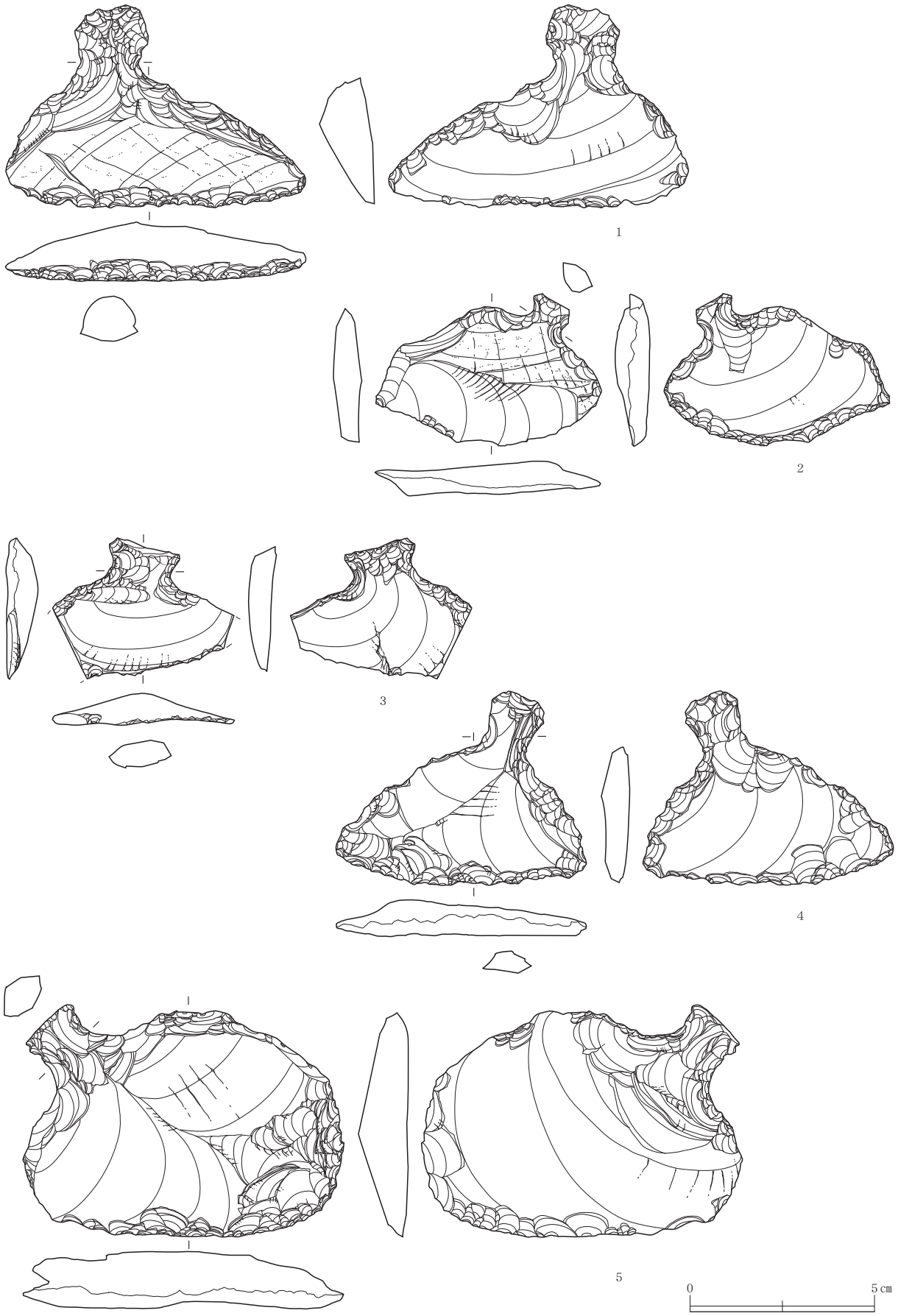
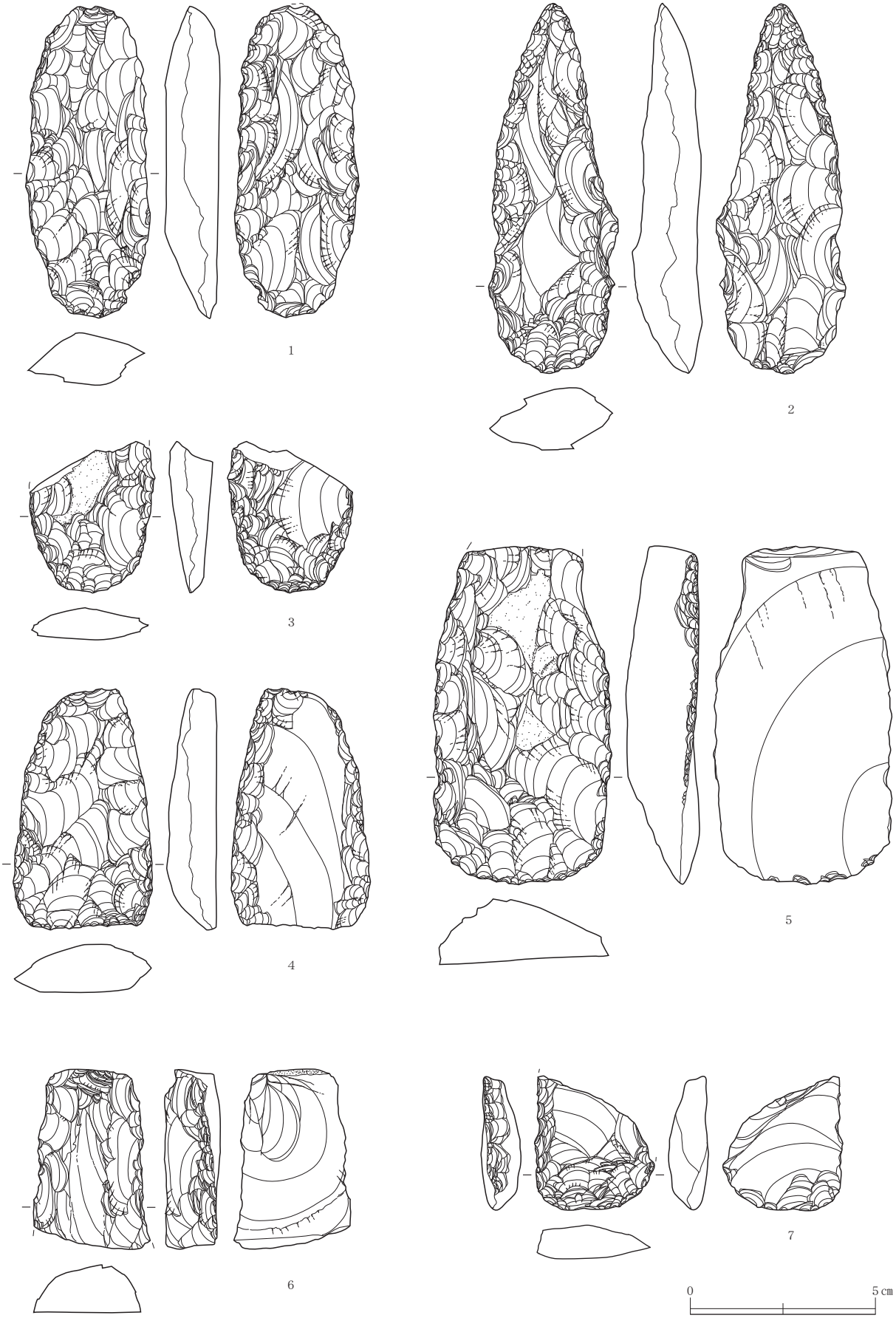
第102図　遺構外出土石器類（４）

第103図　遺構外出土石器類（５）

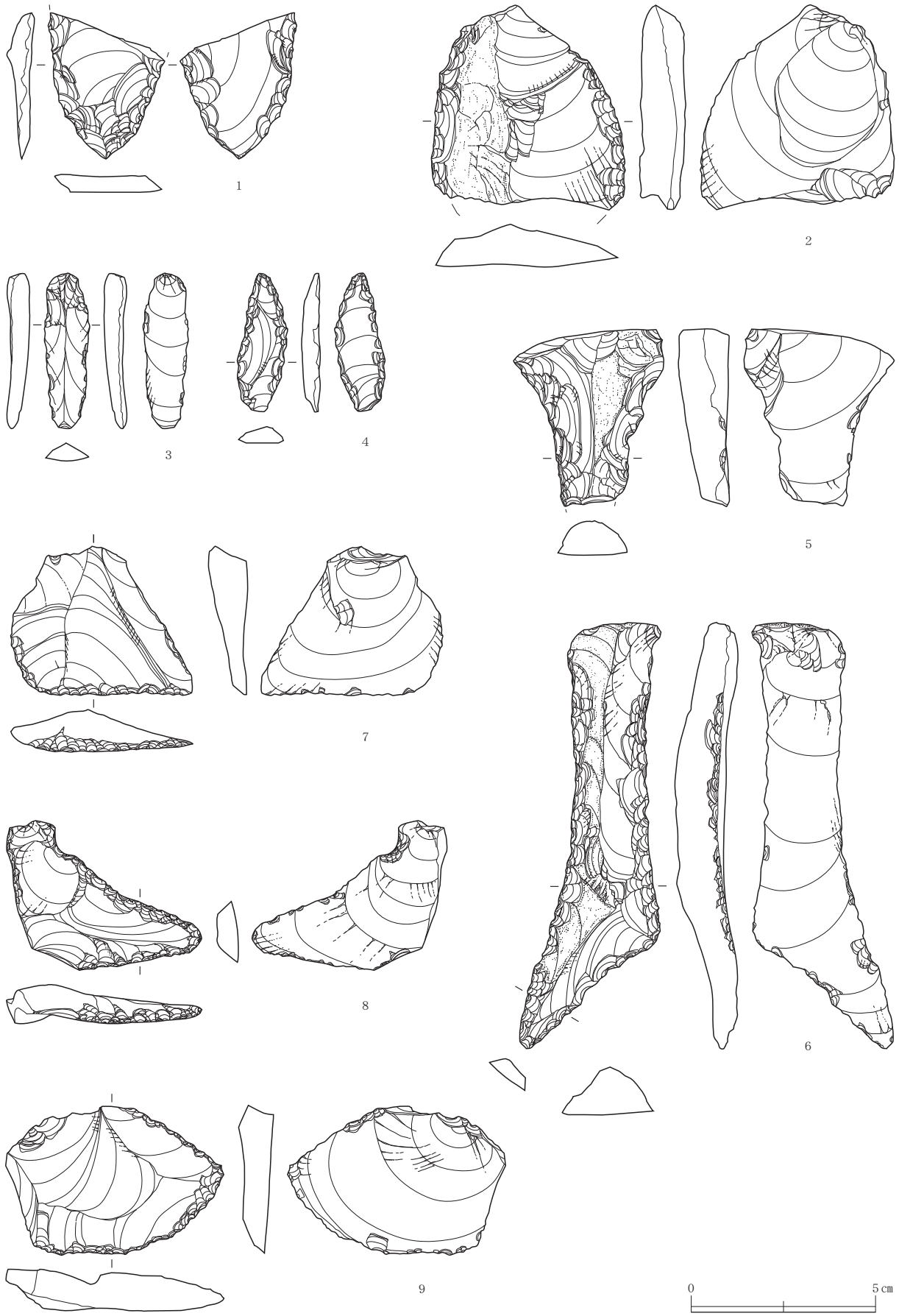


第104図　遺構外出土石器類（６）



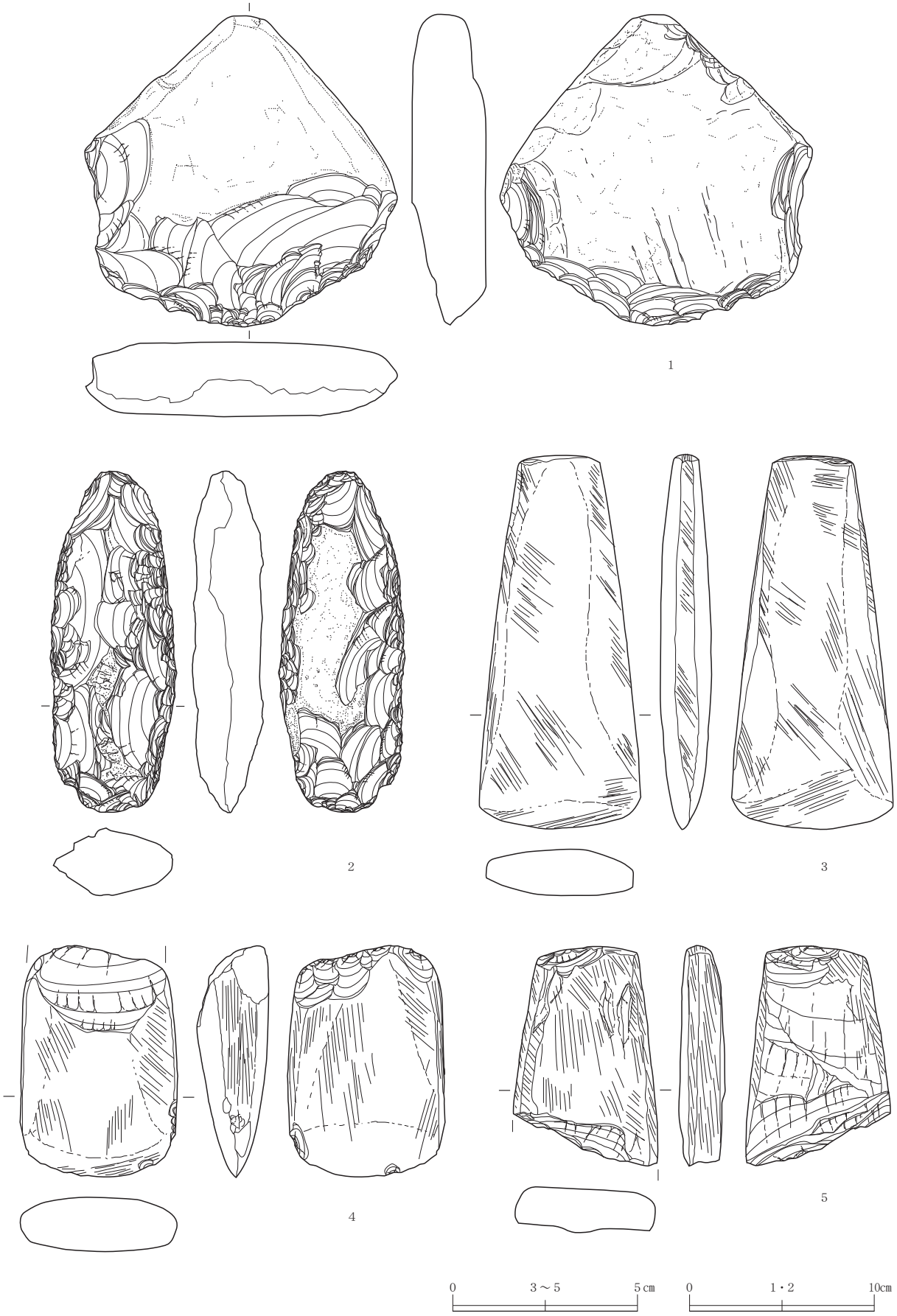
第105図　遺構外出土石器類（７）

第106図　遺構外出土石器類（８）

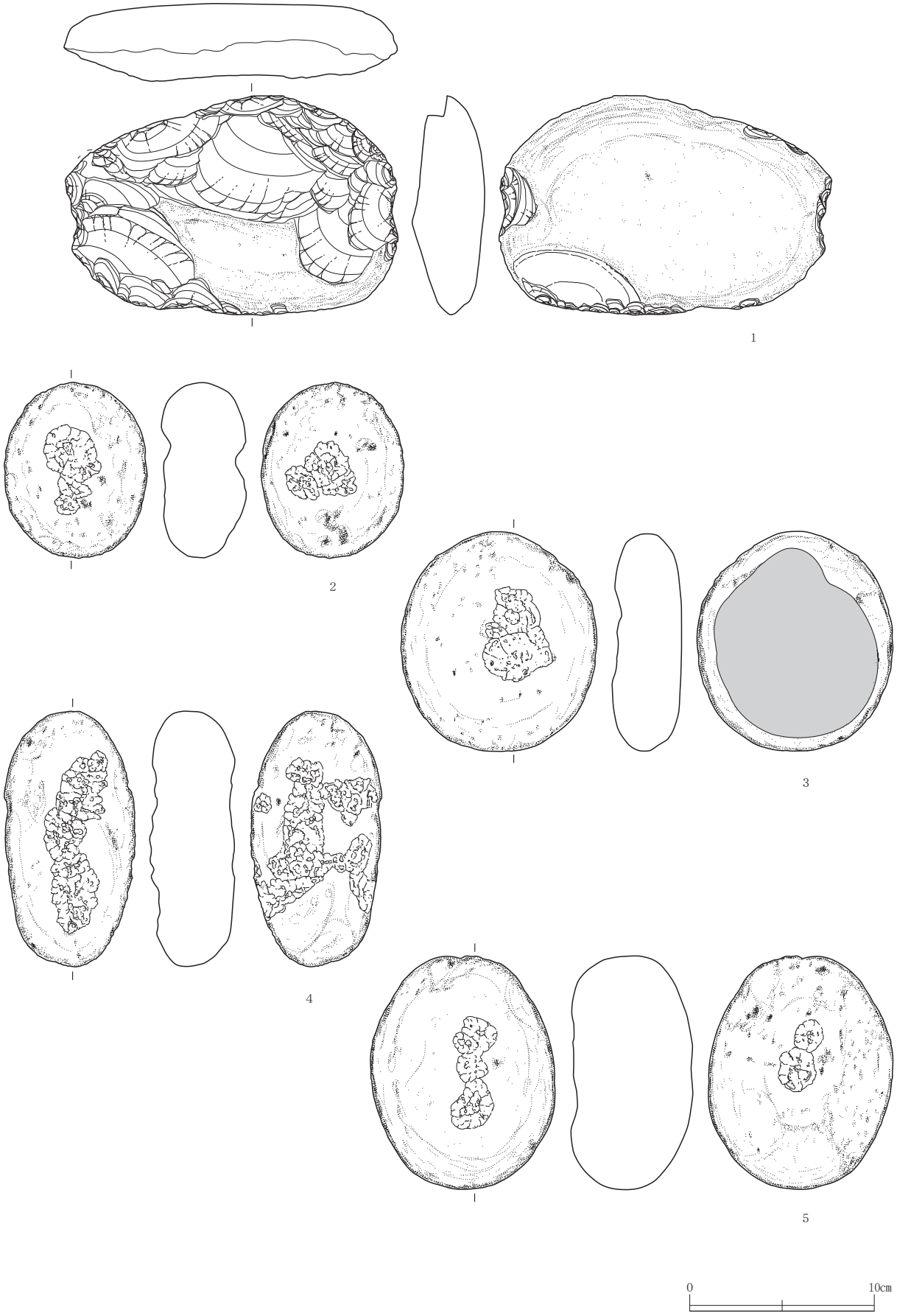


第107図　遺構外出土石器類（９）

第108図　遺構外出土石器類（10）



第109図　遺構外出土石器類（11）



第110図　遺構外出土石器類（12）

第８表　土器・土製品観察表（１）

図番号	遺物番号	器形	出土地点(層) 取り上げ番号	口径(㎜)	底径(㎜)	器高(㎜)	口縁形態	文様等の特徴	内面	分類
52	1	深鉢	SI5001 RP242・279、SI5001内SK14RP2・4・5	202	－	(170)	平	口頸：結束第1種菱形羽状縄文(0段多条、横)、頸：RL縄圧痕(横1条)・LR縄圧痕(横2条)、胴：結束第1種菱形羽状縄文(0段多条、付加条、横)、胎土：繊維混入	ﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
52	2	深鉢	SI5001 RP101・174・177・178・240・273・311・330・335・460 SI5003同一個体あり	168	－	(221)	平	口頸：結束第1種LR/RL縄圧痕(横1条)・LR縄文(横)、頸：結束第1種LR/RL縄圧痕(横3条)、胴：結束第1種菱形羽状縄文(単節/0段多条、横)とRR縄文(縦)を交互に施文、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
52	3	深鉢	SI5001 RP453	－	－	(67)	平	口頸：結束第1種菱形羽状縄文(単節、横)、頸：LR縄圧痕(横3条)、胴：RL縄文(横)、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
52	4	深鉢	SI5001 RP173	－	－	(97)	平	口頸：結束第1種羽状縄文(単節、横)、頸：貼付隆帯(横1条、結束第1種LR/RL縄圧痕(横2条))、胴：LR縄文(横)、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
52	5	深鉢	SI5001 RP258・P9、SK5063 RP3	－	－	(116)	－	口頸：結束第1種菱形羽状縄文(単節、横)?、頸：単軸絡条体圧痕(L、横1条)・貼付隆帯(横1条、刺突列(横2条)・結束第1種LR/RL縄(0段多条)圧痕(横1条))、胴：結束第1種菱形羽状縄文(0段多条、横)、胎土：繊維混入	ﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
52	6	深鉢	SI5001 RP413	－	－	(28)	平	口頸：貼付隆線(隆線両脇L縄圧痕)、胴：RL縄文(縦)、胎土：繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ3
52	7	深鉢	SI5001 RP39・421・426・433	－	－	(102)	平	口頸：L縄圧痕(横2条)、胴：L縄文(横)、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
52	8	深鉢	SI5001 BP9内 RP2	－	－	(69)	平	口頸：結束第1種菱形羽状縄文(単節、横)、胎土：繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ3
52	9	深鉢	SI5001 RP272・396	－	－	(50)	平	口頸：R/L縄文(横)、胴：結束第１種LR縄文(横)、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
52	10	深鉢	SI5001 RP214・278	－	－	(80)	平	口頸：羽状縄文(単節、横)、胎土：繊維混入	ﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
52	11	深鉢	SI5001 RP237・347	－	－	(34)	平	口頸：結束第1種菱形羽状縄文(無節、横)、頸：L縄圧痕、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
52	12	深鉢	SI5001 RP98-1	－	－	(41)	平	口頸：R縄文(横)、胎土：繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ3
52	13	深鉢	SI5001 RP31	－	－	(58)	－	胴：L縄文(縦)、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
52	14	深鉢	SI5001 RP16・332	112	－	(55)	平	無文、胎土：繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ3
53	1	深鉢	SI5001 RP28・111・112・121・122・165・378、MS49(BⅠ)	－	－	(150)	波状(波頂部平坦)	口縁上端：貼付隆帯による肥厚、(刻目状L縄圧痕列・一部鋸歯状貼付隆線(刻目状L縄圧痕列))、口頸：貼付隆線(刻目状L縄圧痕)・四角状刺突列、口縁内側：沈線	ﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ	ⅡA4
53	2	深鉢	SI5001 RP328・329	－	－	(66)	波状	口縁上端：貼付隆帯による肥厚(刻目状L縄圧痕)、口頸：貼付隆線(刻目状L縄圧痕、C字状刺突列)・I字状刺突列	ﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ	ⅡA4
53	3	深鉢	SI5001 RP65・156・159	－	－	(38)	波状(波頂部M字状)	口頸：貼付隆線(刻目状L縄圧痕)・円状刺突列・小孔	ﾐｶﾞｷ	ⅡA4
53	4	深鉢	SI5001 RP50	－	－	(95)	波状	口頸：貼付隆線(刻目状L縄圧痕)・円状刺突列、胴：LR縄文(横、縄端部他の条で結束)	ﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ	ⅡA4
53	5	深鉢	SI5001 RP95・175・234	140	－	(66)	平	口頸：鋸歯状貼付隆線(C字状刺突列)、貼付隆線(C字状刺突列・L縄圧痕)・C字状刺突列	ﾐｶﾞｷ	ⅡA4
53	6	深鉢	SI5001 RP102・110・118	－	－	(60)	波状	口頸：鋸歯状貼付隆線・貼付隆線・四角状刺突列	ﾅﾃﾞ	ⅡA4
53	7	深鉢	SI5001 RP35・111	－	－	(27)	平	口縁上端：貼付隆帯による肥厚(隆帯上LR縄文(横)・隆帯上鋸歯状貼付隆線(隆線上刻目状R縄圧痕))、口頸：貼付隆線・四角状刺突列	ﾐｶﾞｷ	ⅡA4
53	8	深鉢	SI5001 RP97-1・220	－	－	(66)	平	口頸：貼付隆線・C字状刺突列、胴：LR縄文(横)	ﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ	ⅡA4
53	9	深鉢	SI5001 RP399～402	－	120	(85)	－	胴：RL縄文(横)	ﾅﾃﾞ	ⅡA4
53	10	深鉢	SI5001 RP106	111	－	(72)	小突起	口頸：地文LR縄文(横)・沈線、胴：LR縄文(横)、結節回転文(横)	ﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ	ⅡB
53	11	深鉢	SI5001 RP25	－	－	(61)	平	口頸～胴：RL縄文(縦)・結節回転文(縦)	ﾅﾃﾞ	ⅡB
53	12	深鉢	SI5001 RP21・26・30・127・381、SK5063 RP6	－	－	(102)	－	胴：RL縄文(縦)・結節回転文(縦)	ﾅﾃﾞ	ⅡB
53	13	深鉢	SI5001 RP81	－	－	(49)	－	胴：微隆線・充塡RL縄文	ﾅﾃﾞ	Ⅲ2
53	14	深鉢	SI5001 RP391	－	－	(61)	－	胴：沈線・充塡LR縄文	ﾅﾃﾞ	Ⅲ2
53	15	深鉢	SI5001 RP126・129	－	－	(56)	－	胴：沈線・充塡LR縄文	ﾅﾃﾞ	Ⅲ2
53	16	深鉢	SI5001 RP13・410～413・415・417	－	－	(120)	－	胴上部：無文、胴下部：LR縄文(縦)	ﾅﾃﾞ	Ⅲ2
54	1	深鉢	SI5003 RP49・51・60～62・79-1	180	－	(306)	平	口頸：結束第1種羽状縄文(単節、横)、頸：RL縄圧痕(横2条)、胴：結束第1種羽状縄文(単節、縦)、胎土：繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ3
54	2	深鉢	SI5003 RP68・69	－	－	(63)	平	口頸：地文RL縄文(横)、LR縄側面圧痕(横2条)、頸：LR縄圧痕(横3条)、胎土：繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ3
54	3	深鉢	SI5003 RP56	－	－	(55)	－	口頸～胴：LR縄文(横)、頸：貼付隆帯(RL縄圧痕(横3条))、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
54	4	深鉢	SI5003 RP23	－	－	(48)	－	口頸：L縄圧痕、頸：L縄圧痕(1条)、胴：LRL縄文(横)、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
54	5	深鉢	SI5003 RP88・92・104	－	－	(61)	－	頸：沈線(横2条、沈線間縦位R縄圧痕列充塡、LR縄圧痕(横1条))、胴：結束第1種羽状縄文(単節、横)、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
54	6	深鉢	SI5003 RP16・64・80-1・80-2・81-3・82-4	－	77	(193)	－	口頸：結束第1種菱形羽状縄文(単節、横)、頸：RL縄圧痕(横2条、条間縦位R縄圧痕列充塡)、胴：単軸絡条体第1類(R、縦)、胎土：繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ3
54	7	深鉢	SI5003 RP58	200	－	(110)	平	口頸：結束第1種菱形羽状縄文(単節、横)、頸：貼付隆帯(L縄圧痕(横3条))、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
54	8	深鉢	SI5003 RP79-1	－	－	(77)	平	口頸：結束第1種羽状縄文(単節、横)、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
54	9	深鉢	SI5003 RP3・92・95・105、SI5004 RP108～112	－	－	(141)	－	胴上半：RL縄文(横)、胴下半：組縄縄文(横)、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
54	10	深鉢	SI5003 RP79-1・82-4	－	120	(130)	－	胴上半：単軸絡条体第1類(L、斜)、胴下半：単軸絡条体第1類(L、縦)、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
55	1	深鉢	SI5005 RP1・23・85・112-1～15・112-17・112-18・112-20・112	140	97	260	平	口頸～胴：結束第1種菱形羽状縄文(単節、横)、頸：結束第1種LR/RL縄圧痕(横2条)、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3

第８表　土器・土製品観察表（２）

図番号	遺物番号	器形	出土地点(層) 取り上げ番号	口径(㎜)	底径(㎜)	器高(㎜)	口縁形態	文様等の特徴	内面	分類
55	2	深鉢	SI5005 RP89・96・98	150	－	(88)	平	口頸：結束第1種菱形羽状縄文(単節、横)、頸：RL縄圧痕(横3条)、胎土：繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ3
55	3	深鉢	SI5005 RP11・28・45～48・67-2・73・75・82～84・97	263	－	(255)	平	口頸：結束第1種菱形羽状縄文(単節、横)、頸：単軸絡条体圧痕(横2条)・結束第1種LR/RL縄圧痕(横2条)、胴：多軸絡条体(L、縦)、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
55	4	深鉢	SI5005 RP2・10・24・74・76～81・84・90	225	－	(275)	平	口頸：羽状RL縄文(縦・横)、胴：単軸絡条体第1類(R、縦)、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
55	5	深鉢	SI5005 RP8・76・87・107	140	－	(224)	平	口縁：単軸絡条体圧痕(L、横1条)、頸：単軸絡条体圧痕(L、横3条)、口頸～胴：結束第1種羽状縄文(単節、横)、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
56	1	深鉢	SI5005 RP60・92	－	－	(63)	平	口唇：刻目状縄側面圧痕(L)、口頸：L縄圧痕(2条1組、横2条)、頸：貼付隆帯(横1条、刻目状L縄圧痕)、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
56	2	深鉢	SI5005 RP91	－	－	(43)	平	口頸：RL縄圧痕・LR縄文(横)、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
56	3	深鉢	SI5005 RP18	－	－	(52)	－	胴：RRL縄文(横)、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
56	4	深鉢	SI5005 RP31・72	－	85	(74)	－	胴：櫛目状文、胎土：繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ3
56	5	深鉢	SI5005 RP6	－	－	(39)	平	口頸：RL縄文(横)・LR縄圧痕、胎土：繊維混入	ﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
56	6	深鉢	SI5005炉 RP116	－	－	(62)	－	胴：結束第1種羽状縄文(単節、付加条、横)、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
56	7	深鉢	SI5004 RP14、SI5005 RP94・112-19	－	－	(82)	－	胴：単軸絡条体第1類(R、縦)、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
56	8	深鉢	SI5012 RP23・24	－	－	(35)	－	頸：結束第1種LR/RL縄圧痕(横3条)、胴：菱形羽状縄文(単節、横)?、胎土：繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
56	9	深鉢	SI2001 RP32～40・55、ML72(GⅣ①～⑥)	239	－	(219)	波状(単位3)	口頸：無文、胴：RL縄文(縦、上端のみ横)	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
56	10	鉢	SI2001 RP2・9・21、ML71(GⅣ①～⑥)	192	60	143	平	無文(ミガキ)	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
56	11	深鉢	SI2001 RP1・6	－	－	(93)	－	胴：LR縄文(縦)	ﾅﾃﾞ	Ⅲ2
56	12	小型土器	SI2001 RP13	－	36	(15)	－	無文	ﾅﾃﾞ	Ⅲ2
56	13	小型土器	SI2001 RP16	－	40	(25)	－	無文	ﾅﾃﾞ	Ⅲ2
56	14	深鉢	SI2001 RP15、SK2015、SK2019 RP24・30、ML72(GⅣ①～⑥)、ML69(GⅤ)、ML70倒木痕	229	－	(232)	平	LR縄文(縄端他の条で結節、縦)	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
56	15	三角状土製品	SI2001 RP12	長さ 25	厚さ 10	－		無文	ﾅﾃﾞ	－
56	16	深鉢	SI2004 RP13	－	－	(39)	平	RL縄文(横)	ﾅﾃﾞ	Ⅳ
56	17	深鉢	SI2004P1 RP1	－	－	(53)	－	RL縄文(横)	ﾅﾃﾞ	Ⅲ？
56	18	深鉢	SI2004 RP5・6・8	－	70	(62)	－	ミガキ	ﾅﾃﾞ	Ⅳ
57	1	深鉢	SI5013 RP49・50	－	－	(105)	平	口頸：無文、胴：LR縄文(縄端他の条で結節・縄端閉じ、縦)	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
57	2	深鉢	SI5013 RP2・4・13・15・18～24・28・29・37～39・41・42・44・55	252	－	(186)	平	口頸～胴：LR縄文(縦)、結節回転文(縦)	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
57	3	深鉢	SI5013 RP26・27・30～32・34～36	－	－	(137)	－	胴：RL縄文(縦)、結節回転文(縦)	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
57	4	深鉢	SI5013 RP9・56	－	42	(30)	－	胴：L縄文(縦)	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
57	5	深鉢	SI5010 RP1	－	－	(67)	－	胴：LR縄文(縦)	ﾅﾃﾞ	Ⅲ2
57	6	深鉢	SI5010 RP3・4・18	－	－	(88)	－	上部：LR縄文(縦)、下部：無文	ﾅﾃﾞ	Ⅳ
57	7	深鉢	SI3266 SR01	199	－	(90)	小波状	口頸：入組状沈線文・磨消LR縄文(横)・沈線(横1条)、胴：LR縄文(横)	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
57	8	鉢	SI3266 RP2	－	－	(28)	小突起	口頸：入組三叉文	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
57	9	注口？	SI3266 RP37	－	－	(34)	小突起	口頸：玉抱三叉文・沈線(横3条)・列点文(横1条)	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
57	10	鉢	SI3266 RP22	－	－	(72)	小突起	口頸：入組三叉文？・沈線(横2条)	ﾅﾃﾞ	Ⅴ
57	11	深鉢	SI3266 RP39・48	－	－	(87)	平	口頸～胴：無文	ﾅﾃﾞ	Ⅴ
57	12	壷	SI3266 RP24・36	67	－	(118)	平	口頸～胴：無文	ﾅﾃﾞ	Ⅴ
58	1	深鉢	SK2012 RP3・4	－	－	(96)	－	胴：地文LR縄文(縦)・沈線(2条1組、縦)	ﾅﾃﾞ	Ⅲ2
58	2	深鉢	SK2015	－	－	(68)	平	口頸：無文	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
58	3	深鉢	SK2015、ML72(GⅣ①～⑥)	－	－	(159)	－	口頸～胴：LR縄文(縦)、結節回転文(縦)	ﾅﾃﾞ	Ⅲ2
58	4	深鉢	SK2015、SK2019 RP52・53・65、ML72(GⅣ①～⑥)	221	－	(201)	平	口頸：無文、胴：LR縄文(縦)	ﾅﾃﾞ	Ⅲ2
58	5	深鉢	SK2015、ML72(GⅣ①～⑥) SK2019 RP7・8・11・44	－	－	(72)	－	胴：RL縄文(縦)	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
58	6	深鉢	SK2015、SK2019 RP1・34・35、ML72(GⅣ①～⑥)、ML・MM69・MN68(GⅤ)	215	－	(288)	波状(単位2)	口頸：無文、胴：LR縄文(縦)	ﾅﾃﾞ	Ⅲ2
58	7	鉢	SK2015、SD2007	－	40	(17)	－	胴：無文、内面漆付着	不明	Ⅲ2
58	8	小型土器	SK2019 RP42	46	－	(32)	平	口頸～胴：無文	ﾅﾃﾞ	Ⅲ2
58	9	深鉢	SK2019 RP3・14・26・67	－	92	(92)	－	胴：LR縄文(縦)、底：笹痕	ﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
59	1	深鉢	SK2019 RP19・37～40・43、SD2007	288	－	(223)	平	口頸～胴：LR縄文(縦)	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
59	2	深鉢	SK2019 RP21、SD2007、MK69、MK70(GⅤ)・RP5(GⅣ①～⑥)、ML72(GⅣ①～⑥)、ML70倒木痕	238	－	(312)	波状	口頸～胴上半：横位S字状沈線文(充塡RL縄文)、胴下半：RL縄文(縦)	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2

第８表　土器・土製品観察表（３）

図番号	遺物番号	器形	出土地点(層)取り上げ番号	口径(㎜)	底径(㎜)	器高(㎜)	口縁形態	文様等の特徴	内面	分類
60	1	深鉢	SK3101 RP34	－	－	(62)	－	胴:LR縄文(縦・横・斜)	ﾅﾃﾞ	Ⅳ
60	2	深鉢	SK3101 RP1・18・28	－	－	(76)	－	胴:LR縄文(横)	ﾅﾃﾞ	Ⅳ？
60	3	深鉢	SK3263 RP07・08	－	－	(106)	－	胴:LR縄文(横)	ﾅﾃﾞ	Ⅴ？
60	4	台付鉢	SK3263 RP11	－	(70)	(21)	－	無文	ﾅﾃﾞ	Ⅴ
60	5	不明	SK3262 RP11	－	100	(24)	－	無文	ﾅﾃﾞ	Ⅳ～Ⅴ
60	6	深鉢	SK3281 RP8	－	83	(59)	－	無文	ﾅﾃﾞ	Ⅳ～Ⅴ
60	7	深鉢	SK3281 RP10～12・14	－	79	(30)	－	無文	ﾅﾃﾞ	Ⅳ～Ⅴ
60	8	壷	SK3267 RP9	－	－	(24)	－	頸:隆線・瘤状突起・列点文、内外面:赤彩	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
60	9	壷	SK3267 RP13	－	92	(49)	－	赤彩	ﾅﾃﾞ	Ⅴ
60	10	壷	SK3267 RP16・22・23・46	－	－	(77)	－	赤彩	ﾅﾃﾞ	Ⅴ
60	11	鉢？	SK3267 RP27	－	60	(15)	－	無文	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
60	12	鉢？	SK3267 RP43・44・47・53	－	75	(57)	－	胴:LR縄文(横)	ﾅﾃﾞ	Ⅴ
60	13	深鉢	SK3267 RP3・31・38・45・49	－	93	(64)	－	胴:L縄文(横)	ﾅﾃﾞ	Ⅳ～Ⅴ
60	14	鉢	SK3290 RP6、LC56(EⅣ)	－	－	(35)	小波状	口頸:玉抱三叉文・沈線(横2条)、胴:LR縄文(横)	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
60	15	注口	SK3290 RP17	－	－	(29)	－	胴:羊歯状文、赤彩	ﾅﾃﾞ	Ⅴ
60	16	鉢	SK3290 RP20、LD56(EⅡ)	－	－	(91)	－	口頸:沈線(三叉状入組文?)・LR縄文(横)・沈線(横2条)、胴:LR縄文(横)	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
60	17	台付鉢	SK3290 RP2、LD56(EⅡ)	－	－	(101)	－	口頸:玉抱三叉文?、胴:LR縄文(横)	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
60	18	深鉢	SK3291 RP11	－	－	(44)	平	無文	ﾅﾃﾞ	Ⅳ～Ⅴ
60	19	深鉢	SK3291 RP12	－	100	(50)	－	無文	ﾅﾃﾞ	Ⅳ～Ⅴ
60	20	台付鉢	SK3291 RP3	－	140	(31)	－	底:透かし・LR縄文(横)・沈線(横1条)	ﾅﾃﾞ	Ⅳ～Ⅴ
60	21	深鉢	SK3291 RP10	－	107	(30)	－	無文	ﾅﾃﾞ	Ⅳ～Ⅴ
60	22	台付鉢	SK3291 RP2	－	(83)	(47)	－	胴～底:無文	ﾅﾃﾞ	Ⅳ？
61	1	鉢	SK3282 RP50	－	－	(113)	小波状	口頸:地文LR縄文(横)・沈線、胴:LR縄文(横)	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
61	2	深鉢	SK3282 RP29	－	－	(80)	小波状	口頸～胴:LR縄文(横)	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
61	3	深鉢	SK3282 RP11・31・32・37	－	－	(100)	平	口頸～胴:R縄文(横)	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
61	4	深鉢	SK3282 RP31・36・64	－	－	(85)	平	口頸～胴:LR縄文(横)	ﾅﾃﾞ	Ⅳ～Ⅴ
61	5	深鉢	SK3282 RP25・59	－	－	(65)	－	胴:LR縄文(横)	ﾅﾃﾞ	Ⅴ
61	6	壷	SK3282 RP9・28	－	－	(112)	－	胴:LR縄文(縦・横)	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
61	7	台付鉢	SK3282 RP48	－	(62)	(29)	－	胴:LR縄文(横)	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
61	8	台付鉢	SK3282 RP48	－	－	(25)	－	沈線(横1条)	ﾅﾃﾞ	Ⅴ？
61	9	鉢	SK3294 RP4、LC56～57(EⅢ・Ⅳ)	158	－	(68)	小波状	口頸:無文	ﾅﾃﾞ	Ⅴ
61	10	鉢	SK3292 RP4	－	60	(138)	－	胴:LR縄文(横)	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
61	11	深鉢	SK5007 RP4	－	－	(33)	－	口頸:四角状刺突列・貼付隆線(L縄圧痕)	ﾐｶﾞｷ	ⅡA4
61	12	深鉢	SK5018 RP1	－	－	(36)	－	頸:L縄圧痕(横3条)・刺突列(竹管)、胴:LR縄文(横)、胎土:繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ3
61	13	深鉢	SK5024 RP1	－	－	(63)	－	口頸:LR・RL縄文(横)、頸:結束第1種LR/RL縄圧痕(横3条)、胴:LR・RL縄文(横)、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ3
62	1	深鉢	SD2007、MK70・MN69・MO68(GⅤ)、MN68(GⅤ)RP4	215	70	390	平	口縁:横位刺突列、口頸～胴:J字状沈線文、RL縄文(横)	ﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
62	2	深鉢	SD2007、MK69・ML68・69・MM・MN68(GⅤ)	－	－	(364)	－	胴:RL縄文	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
75	1	深鉢	LO73(FⅣ)	233	85	417	平	口頸～胴:LR縄文(縦)、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ1
75	2	深鉢	LJ71(FⅣ)、LK70(FⅣ・Ⅴ)	－	85	(252)	－	胴:単軸絡条体第1類(R、縦)、胎土:繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ1
75	3	深鉢	LO73(FⅤ)	208	－	(265)	平	口頸～胴:単軸絡条体第1類(r、縦)、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ1
75	4	深鉢	LK70(FⅡ・Ⅳ・Ⅴ)	－	124	(291)	－	胴上部:単軸絡条体第1類(R、縦)、胴中部:単軸絡条体第1類(L、縦)、胴下部:単軸絡条体第1類(R、縦)、胎土:繊維混入、胴上部に補修孔あり	ﾅﾃﾞ	Ⅰ1
76	1	深鉢	LM72(FⅣ)	160	116	236	平	口頸:単軸絡条体第1類(R、横)、胴:単軸絡条体第1類(R、縦)、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ1
76	2	深鉢	LK70(FⅤ)、LK71(FⅤ・Ⅵ)	160	－	(295)	平	口頸:結節回転文(横)、胴:単軸絡条体第1類(R、縦)、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ1
76	3	深鉢	LR74(FⅣ)	180	－	(221)	平	口頸:結節回転文(R、横)、胴:単軸絡条体第1類(L、縦)、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ1
76	4	深鉢	LK70(FⅤ)、LK70(FⅡ・Ⅳ)	－	105	(205)	－	口頸:結節回転文(R、横)、胴中部:単軸絡条体第1類(L、縦)、胴下部:結節回転文(R、横)、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ1
77	1	深鉢	LN・LM73 (FⅣ⑤)	157	－	(190)	波状(単位4)	口頸:LR縄文(横)、頸:LR縄圧痕(横1条)・貼付隆帯(横1条、刺突列(横1条))、胴:LR縄文(横)、結節回転文(R、横3条)、胎土:繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ2
77	2	深鉢	LK70・LM72(FⅤ)、LL72(FⅢ・Ⅳ・Ⅴ)、LM71	315	－	(246)	平	口頸:結節回転文(R、横)、頸:貼付隆帯(横1条、指頭圧痕列(横1条))、胴:組縄縄文(縦)、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ2
77	3	深鉢	LS75盛土	176	－	(301)	平	口唇:単軸絡条体第1類(L、横)、口縁:単軸絡条体第1類(L、横)、口頸:LR縄文(横)、頸:貼付隆帯(横1条、単軸絡条体第1類(L、横))、胴:単軸絡条体第1類(L、縦)、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ2
77	4	深鉢	LK・LL71(FⅤ)	156	－	(204)	平	口頸:結節回転文(横)、頸:貼付隆帯(横1条、刺突列(横1条))、胴:LLR縄文(斜)、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ2

第８表　土器・土製品観察表（４）

図番号	遺物番号	器形	出土地点(層)取り上げ番号	口径(㎜)	底径(㎜)	器高(㎜)	口縁形態	文様等の特徴	内面	分類
77	5	深鉢	LQ・LR74(FⅣ・V)、LR75(FⅣ)	191	－	(196)	平	口頸:結節回転文(R、横)、頸:貼付隆帯(横1条、爪形刺突列(横3条)、胴:単軸絡条体第1類(L、縦)、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ2
78	1	深鉢	LR74(FⅣ・V)、LS74盛土	133	66	253	平	口頸:結節回転文(R、横)、頸:貼付隆帯(横1条、結節回転文)、胴:単軸絡条体第1類(R、縦)、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ2
78	2	深鉢	LP74(FⅣ)、LR74	170	－	(292)	平	口頸:LR縄文(横)、頸:貼付隆帯(横1条、LR縄文(横))、胴上部:無文、胴下部:単軸絡条体第1類(R、縦)、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ2
78	3	深鉢	LO73(FⅣ・V)	118	－	(150)	平	口頸:結束第1種LR縄文(横)、頸:貼付隆帯(横1条、爪形刺突列(横3条))、胴:単軸絡条体第1類(R、縦)、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ2
78	4	深鉢	LJ70、LO70(FⅣ)	110	－	(155)	平	口頸:LR縄文(横)、頸:貼付隆帯(横1条、単軸絡条体第1類(R、横))・爪形刺突列(横2条))、胴:単軸絡条体第1類(R、縦)、胎土:繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ2
78	5	深鉢	LJ70(FV)、LK70(FⅣ・V)	－	－	(254)	－	口頸:LR縄文(横)、頸:爪形刺突列、胴:単軸絡条体第1類(R、縦)、胎土:繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ2
78	6	深鉢	LN72 (FⅣ④)、LN73(FⅣ)、LM・LN72・73(FV②)	146	－	(224)	平	口頸:LR縄文(横)、頸:貼付隆帯(横1条、LR縄文(横))、胴:単軸絡条体第1類(R、縦)、胎土:繊維混入	ﾐｶﾞｷ	Ⅰ2
79	1	深鉢	LL71(FⅣ)、LL72(FⅣ・V)	279	－	(146)	平	口頸:結束第1種菱形羽状縄文(単節、横)、頸:貼付隆帯(横1条、刺突列(横2条))、胴:単軸絡条体第1類(R、縦)、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ	Ⅰ2
79	2	深鉢	LO73(FⅣ・V)	212	－	(362)	平	口頸:結束第1種菱形羽状縄文(LR/R、横)、頸:貼付隆帯(横1条、単軸絡条体第1類(L、横))、胴:結束第1種菱形羽状縄文(LR/R、縄端他の条で結節、横)と単軸絡条体第1類(L、縦)を交互に施文、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ2
79	3	深鉢	LO73(FⅣ)	163	－	(240)	平	口頸:LR縄文(横)、頸:貼付隆帯(横2条、爪形刺突列(横3条))、胴:単軸絡条体第1類(L、縦)、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ2
79	4	深鉢	LK70(FⅣ)、LK71(FV)	225	119	349	平	口頸:LR縄文(横)、頸:貼付隆帯(横2条、爪形刺突列(横3条))、胴:単軸絡条体第1類(R、縦)、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ2
80	1	深鉢	LK70・71(FV)	157	－	(324)	平	口頸:LR縄文(横)、頸:貼付隆帯(横2条、爪形刺突列(横5条))、胴:単軸絡条体第1類(R、縦)、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ	Ⅰ2
80	2	深鉢	LN73(Ⅱ・Ⅳ・V)	255	112	470	平	口頸:結束第1種菱形羽状縄文(単節、横)、頸:貼付隆帯(横2条、爪形刺突列(横5条))、胴:単軸絡条体第1類(LR、縦)、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ2
80	3	深鉢	LK71(FV)	144	－	(229)	平	口頸:結束第1種菱形羽状縄文(0段多条、横)、頸:貼付隆帯(横2条、爪形刺突列(横5条))、胴上半:単軸絡条体第1類(R、縦)、胴下半:結束第1種菱形羽状縄文(0段多条、横)?、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ2
80	4	深鉢	LM72(FⅣ)	271	－	(188)	平	口頸:LR縄文(横)、頸:沈線(横2条)・貼付隆帯(横2条、爪形刺突列(横5条))・沈線(横1条)、胴上半:原体不明瞭、胴下半:単軸絡条体第1類(R、縦)、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ2
81	1	深鉢	LM72 (FⅣ④)、LM73(FⅣ②・Ⅳ⑤・Ⅳ)、LM75盛土、LN72(FⅣ・V)、LN73(FⅣ)	372	157	(670)	平	口頸:結束第1種菱形羽状縄文(単節、横)、頸:沈線(横2条)・貼付隆帯(横2条、爪形刺突列(横5条))・沈線(横2条)、胴上半:単軸絡条体第1類(R、縦)、胴中部:結束第1種菱形羽状縄文(単節、横)、胴下半:単軸絡条体第1類(R、縦)、胎土:繊維混入	ﾅﾃﾞ	Ⅰ2
82	1	深鉢	MR65・MS64・65・MT64(GⅥ)	256	－	(347)	平	口唇:刻目状L縄圧痕列、口頸:単軸絡条体側面圧痕(ℓ、横5条)・瘤状突起(単軸絡条体側面圧痕列(ℓ、縦))、頸:粘土接合部を突出させて隆帯作出(横1条、隆線上R縄圧痕)、胴:LR縄文(横)、胎土:繊維混入	ﾐｶﾞｷ	ⅡA1
82	2	深鉢	MS64(GⅥ)	－	－	(69)	平	口唇:刻目状縄圧痕(原体不明)、口頸:単軸絡条体側面圧痕(ℓ、横4条)・瘤状突起(単軸絡条体側面圧痕列(ℓ、縦))、頸:粘土接合部を突出させて隆帯作出(横1条、刻目状RL縄圧痕)、胴:RL縄文(横)	ﾅﾃﾞ	ⅡA1
82	3	深鉢	MT64(GⅥ)	150	－	(96)	平	口縁上端:貼付隆帯による肥厚(刻目状LR縄圧痕)、口頸:LR縄圧痕、貼付隆線(刻目状LR縄圧痕)、胴:L縄文(横)	ﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ	ⅡA2
82	4	深鉢	MS64・65・MT64(GⅥ)	－	－	(231)	波状	口頸:刻目状LR縄圧痕・LR縄圧痕・貼付隆線(縦、LR縄圧痕縦2条)、貼付隆線(横1条、刻目状LR縄圧痕列)、胴:LR縄文(横)、口頸に穿孔(2か所、そのうち1か所は未貫通)	ﾐｶﾞｷ	ⅡA2
82	5	深鉢	MS64(GV)、MS64・65・MT64(GⅥ)	204	－	(287)	平	口頸:刻目状R縄圧痕、頸:R縄圧痕(横2条)、胴:結束第1種羽状縄文(付加条、縄端他の条で結節、横)	ﾐｶﾞｷ	ⅡA2
83	1	深鉢	MT63(GⅣ⑫)、MS64(GⅥ)、MS・MT64(GⅥ)	118	－	146	口縁小突起(頂部刻目2以上、単位4)	口頸:L縄圧痕、胴:L縄文(横)・L縄圧痕(縦2条1組、単位8)、胎土:軟質	ﾐｶﾞｷ	ⅡA2
83	2	深鉢	MT63・MT64(GⅣ⑫)、MS・MT64(GⅥ)	110	75	129	平	口頸:刻目状L縄圧痕、頸:L縄圧痕(横2条)、胴:Ｌ縄文(横)、胎土:軟質	ﾐｶﾞｷ	ⅡA2
83	3	深鉢	MT64(GⅣ⑫)	129	－	(93)	波状(波頂部M字状、単位4)	口唇:刻目状R縄圧痕、口頸～胴:RL縄文(縦)	ﾐｶﾞｷ	ⅡA2
83	4	深鉢	MR65(GⅥ)	－	－	(54)	平	口唇:刻目状L/R縄圧痕、口頸:貼付隆線、胴:L縄圧痕(横1条)・R縄圧痕(横1条)、胎土:軟質	ﾐｶﾞｷ	ⅡA2
83	5	深鉢	MS65(GⅥ)	192	－	(160)	平	口縁上端:貼付隆帯による肥厚(鋸歯状貼付隆線(刻目状L縄圧痕))、口頸:貼付隆線(刻目状L縄圧痕)・L縄圧痕(3条1組)・C字状縄圧痕列、胴:羽状縄文(単節、縄端他の条で結節、横)、胎土:繊維若干混入	ﾅﾃﾞ	ⅡA3
83	6	深鉢	MS・MT64(GⅥ)	243	－	(214)	波状(波頂部M字状、単位4)	口縁上端:貼付隆帯による肥厚(刻目状L縄圧痕)、口頸:貼付隆線(刻目状LR縄圧痕)・L縄圧痕(3条1組)・C字状縄圧痕列・貼付隆線(横1条、刻目状L縄圧痕)、胴:LR縄文(横)	ﾅﾃﾞ	ⅡA3
83	7	深鉢	MS65(GⅥ)	－	－	(76)	平	口縁上端:貼付隆帯による肥厚(鋸歯状貼付隆線(刻目状L縄圧痕))、口頸:貼付隆線(隆線上L縄圧痕)・L縄圧痕(3条1組)・C字状縄圧痕列	ﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ	ⅡA3
83	8	深鉢	MS64(GV)、MS・MT64(GⅥ)	－	－	(70)	波状(波頂部M字状)	口縁上端:一部貼付隆帯による肥厚(鋸歯状貼付隆線(刻目状L縄圧痕))、口頸:貼付隆線(隆線上L縄圧痕)・C字状縄圧痕列・L縄圧痕(3条1組)・小孔	ﾅﾃﾞ	ⅡA3
83	9	深鉢	MS64(GⅥ)	201	－	(180)	波状(波頂部平坦、単位4)	口縁上端:一部貼付隆帯による肥厚(L縄圧痕)、口頸:L縄圧痕(3条1組)・貼付隆線(隆線上L縄圧痕)・小孔・C字状刺突列、胴:RL縄文(縄端他の条で結節、横)・結節第1種羽状縄文(単節、縄端他の条で結節、横)	ﾅﾃﾞ	ⅡA3
84	1	深鉢	MS・MT64(GⅥ)他	330	－	(245)	波状(波頂部M字状、単位4)	口縁上端:貼付隆帯による肥厚(刻目状R縄圧痕)、口頸:貼付隆線(刻目状L縄圧痕)・C字状縄圧痕、胴:結束第1種羽状縄文(単節、横)	ﾅﾃﾞ	ⅡA3
84	2	深鉢	MS64(GV・Ⅵ)、MT64(GⅥ)	175	－	(133)	平	口縁上端:貼付隆帯による肥厚(鋸歯状貼付隆線(刻目状R縄圧痕))、口頸:貼付隆線(刻目状R縄圧痕)・C字状縄圧痕列・L/R縄圧痕(3条1組)、胴:結束第1種羽状縄文(単節、縄端他の条で結節、横)	ﾐｶﾞｷ	ⅡA3

第８表　土器・土製品観察表（５）

図番号	遺物番号	器形	出土地点(層)取り上げ番号	口径(㎜)	底径(㎜)	器高(㎜)	口縁形態	文様等の特徴	内面	分類
84	3	深鉢	MS64・MT65(GⅥ)	181	－	(111)	波状(波頂部平坦、単位4)	口縁上端:貼付隆帯による肥厚(鋸歯状貼付隆線・L縄圧痕)、口頸:橋状把手・貼付隆線(刻目状L縄圧痕)・L縄圧痕(3条1組)・四角状刺突列・小孔、胴:RL縄文(縄端他の条で結節、横)	ﾐｶﾞｷ	ⅡA3
84	4	深鉢	MT64(GⅥ)	184	－	(203)	波状(波頂部平坦、単位4)	口縁上端:貼付隆帯による肥厚(刻目状L縄圧痕)、口頸:貼付隆線(刻目状L縄圧痕)・四角状刺突列、胴:結束第1種菱形羽状縄文(単節、縄端他の条で結節、横)	ﾐｶﾞｷ	ⅡA3
84	5	深鉢	MS64(GⅥ)	125	－	(103)	波状(波頂部M字状、単位3)	口頸:貼付隆線、胴:無文、胎土:軟質	ﾐｶﾞｷ	ⅡA3
84	6	深鉢	MS64(GⅤ・Ⅵ)、MT64(GⅥ)	165	－	(170)	波状(波頂部M字状、単位4)	口頸:結節圧痕列・L縄圧痕、胴:L縄文(縦・横)・結節回転文(縦)、胎土:軟質	ﾐｶﾞｷ	ⅡA3
85	1	深鉢	MQ66 RP1(GⅥ)	235	－	(244)	波状(単位4)	口頸:鋸歯状貼付隆線(刻目状L縄圧痕)・L縄圧痕・結節回転文、胴:結束第1種RLL複節縄文(縄端他の条で結節、横)	ﾐｶﾞｷ	ⅡA3
85	2	深鉢	MT64・65(GⅥ)	212	－	(118)	平	口縁上端:貼付隆帯による肥厚(刻目状L縄圧痕・鋸歯状貼付隆線(刻目状L縄圧痕))、口頸:L縄圧痕・貼付隆線(刻目状L縄圧痕)・C字状縄圧痕列・瘤状突起(突起上渦状L縄圧痕)・C字状刺突列、胴:RL縄文(縄端他の条で結節、横)、胎土:繊維若干混入	ﾅﾃﾞ	ⅡA4
85	3	深鉢	MS65(GⅥ)	245	－	(121)	平	口縁上端:貼付隆帯による肥厚(刻目状R縄圧痕)、口頸:貼付隆線(刻目状R縄圧痕)・C字状縄圧痕、胴:結束第1種羽状縄文(単節、横)	ﾐｶﾞｷ	ⅡA4
85	4	深鉢	MT65(GⅥ)	340	－	(245)	平	口縁上端:貼付隆帯による肥厚(鋸歯状貼付隆線、刻目状L縄圧痕)、口頸:貼付隆線(刻目状L縄圧痕)・L/R縄圧痕(3条1組)・C字状縄圧痕列、胴:結束第1種羽状縄文(0段多条・縄端他の条で結節、横)	ﾐｶﾞｷ	ⅡA4
86	1	深鉢	MR・MS65(GⅥ)	310	15	346	平	口縁上端:貼付隆帯による肥厚(鋸歯状貼付隆線(刻目状L縄圧痕))、口頸:貼付隆線(刻目状L縄圧痕)・C字状縄圧痕列、胴:結束第1種羽状縄文(0段多条/単節、縄端他の条で結節、横)	ﾅﾃﾞ	ⅡA4
86	2	深鉢	MR64(GⅣ①～⑥)、MS65・MT64(GⅥ)	162	－	(182)	平	口縁上端:貼付隆帯による肥厚(鋸歯状貼付隆線(刻目状L縄圧痕))、口頸:地文結束第1種羽状縄文(0段多条、横)・貼付隆線(刻目状L縄圧痕)・C字状刺突列、胴:結束第1種羽状縄文(0段多条、横)	ﾐｶﾞｷ	ⅡA4
86	3	深鉢	MS64(GⅤ)、MS65(GⅥ)	200	－	(228)	平	口縁上端:貼付隆帯による肥厚(鋸歯状貼付隆線(刻目状L縄圧痕))、口頸:貼付隆線(刻目状L縄圧痕)・C字状刺突列、胴:結束第1種菱形羽状縄文(0段多条/単節、縄端他の条で結節、横)	ﾐｶﾞｷ	ⅡA4
86	4	深鉢	MS65(GⅥ)	180	75	222	波状(波頂部M字状、単位4)	口縁上端:一部貼付隆帯による肥厚(刻目状L縄圧痕)、口頸:貼付隆線(刻目状L縄圧痕)・C字状刺突列・L縄圧痕、胴:L/R縄文(横)、胎土:軟質	ﾐｶﾞｷ	ⅡA4
87	1	深鉢	MT64(GⅥ)	275	－	(255)	波状(波頂部M字状)	口縁上端:貼付隆帯による肥厚(鋸歯状貼付隆線(L縄圧痕))、口頸:貼付隆線(刻目状L縄圧痕)・C字状刺突列・小孔・瘤状突起・L縄圧痕(3条1組)、胴:結束第1種菱形羽状縄文(単節、縄端他の条で結節、横)	ﾅﾃﾞ	ⅡA4
87	2	深鉢	MT64(GⅥ)	215	90	225	平	口縁上端:貼付隆帯による肥厚(貼付隆線(刻目状L縄圧痕))、口頸:貼付隆線(刻目状L縄圧痕)・四角状刺突列、胴:結束第1種縄文(単節、縄端他の条で結節、横)	ﾐｶﾞｷ	ⅡA4
87	3	深鉢	MS64(GⅣ⑫)	183	－	(129)	波状(波頂部平坦、単位4)	口縁上端:一部鋸歯状貼付隆線、口頸:貼付隆線(刻目状L縄圧痕)・四角状刺突列・瘤状突起(突起上R縄圧痕)、胴:結束第1種羽状縄文(単節、横)	ﾅﾃﾞ	ⅡA4
87	4	深鉢	MR65(GⅤ)、MS65(GⅥ)	202	－	(101)	波状(波頂部平坦、単位4)	口縁上端:一部鋸歯状貼付隆線、口頸:貼付隆線(刻目状刺突列、刻目状R縄圧痕)・瘤状突起・四角状刺突列、胴:RL縄文(横)	ﾅﾃﾞ	ⅡA4
88	1	深鉢	MR64・65・MS65(GⅥ)、MR64(GⅤ)	279	130	(433)	波状(波頂部肥厚・突起、単位1以上)	口頸:R縄圧痕(横6条)・貼付隆線(R縄圧痕)・刺突列、胴:LR縄文(縦・横・斜)、底:ミガキ	ﾐｶﾞｷ	ⅡB1
88	2	深鉢	MT63(GⅣ⑫)、MS64(GⅤ)	118	－	(218)	平	口頸:LR縄圧痕・貼付隆線、胴:LR縄文(横)	ﾐｶﾞｷ	ⅡB2
88	3	深鉢	MT64(GⅣ⑫・Ⅵ)、MS64・65・MT65(GⅥ)	145	－	(145)	平	口頸:貼付隆線(刻目状L縄圧痕)・L縄圧痕、胴:L縄文(横)、胎土:軟質	ﾐｶﾞｷ	ⅡB2
88	4	深鉢	MT64(GⅤ)、MS65(GⅥ)	－	－	(120)	平、内側肥厚	口頸:LR縄圧痕、胴:羽状LR縄文(縦、横)	ﾐｶﾞｷ	ⅡB2
89	1	深鉢	MT64・MS65(GⅥ)	204	115	362	波状(単位2)	口頸:LR縄圧痕・貼付隆線(両脇LR縄圧痕)、胴:LR縄文(横)・結節回転文(縦9条)	ﾐｶﾞｷ	ⅡB2
89	2	深鉢	MS・MT64(GⅤ)、MS65(GⅥ)	154	－	(64)	平、内側肥厚	口頸:地文LR縄文(横)・LR縄圧痕・貼付隆線、胴:LR縄文(横)	ﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ	ⅡB2
89	3	深鉢	MS64(GⅤ・Ⅵ)	232	－	(127)	平	口頸:地文LR縄文(横)・貼付隆線・LR縄圧痕・瘤状突起・沈線(下端横1条)、胴:結束第1種羽状縄文(単節、縦)	ﾐｶﾞｷ	ⅡB2
89	4	深鉢	MS64・65・MT65(GⅥ)	234	－	(178)	平	口頸:地文LR縄文(0段多条、横)・貼付隆線・LR縄圧痕(0段多条、上端横2条・下端横1条)、胴:LR縄文(0段多条、縦)	ﾐｶﾞｷ	ⅡB2
89	5	深鉢	MT64・65(GⅤ)、MT64(GⅥ)	230	－	(129)	平、内側肥厚	口頸:地文LR縄文(横)・LR縄圧痕(上端横2条)・貼付隆線(C字状縄圧痕列)・結節圧痕列(下端横1条)、胴:結束第1種羽状縄文(単節/無節、縦)	ﾐｶﾞｷ	ⅡB2
89	6	深鉢	MS65(GⅥ)	97	70	137	平	口頸:L縄圧痕、胴:結節回転文(縦)、胎土:軟質	ﾅﾃﾞ	ⅡB2
90	1	鉢	MR65(GⅥ)	140	80	75	平	口頸～胴:LR縄文(横)、胎土:軟質	ﾐｶﾞｷ	ⅡB2
90	2	鉢	MS64・65(GⅥ)	177	70	102	平	無文	ﾐｶﾞｷ	ⅡB2
90	3	鉢	MT64(GⅤ・Ⅵ)	240	90	152	平、内側肥厚	口頸:貼付隆線・LR縄圧痕、胴:LR縄文(横)	ﾐｶﾞｷ	ⅡB2
90	4	鉢	MR65・MS64(GⅤ)、MS65(GⅥ)	295	100	167	平、内側肥厚	口頸:貼付隆線・LR縄圧痕、胴:LR縄文(縦)	ﾐｶﾞｷ	ⅡB2
91	1	深鉢	MK70(GⅤ)	－	－	(64)	平	口頸:貼付隆線(縦位楕円文)	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ1
91	2	深鉢	LM72(FⅡ・Ⅳ・Ⅴ)	204	－	(168)	平	口頸～胴:地文RL縄文(縦)、沈線	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ1
91	3	深鉢	LM73 (FⅣ①・②)、LN72盛土	－	103	(254)	－	胴:地文LR縄文(縦)、沈線	ﾅﾃﾞ	Ⅲ1
91	4	深鉢	ML69(GⅤ)	145	70	177	波状(単位3)	口頸～胴:J字状沈線文・充塡LR縄文(縦)	ﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
91	5	深鉢	ML69(GⅤ)	－	－	(117)	波状(単位不明)	口縁:玉抱状沈線文(RLR複節縄文充塡)・刺突列、RLR複節縄文(縦)	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
92	1	深鉢	MN68(GⅤ)	169	－	(227)	波状(単位4)	口縁～胴:横位S字状沈線文(充塡LR縄文)・波状沈線文、LR縄文(縦)	ﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
92	2	深鉢	MK70(GⅤ)	190	－	(57)	平、内側肥厚	口縁:無文、胴:RLR縄文(縦)	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
92	3	深鉢	ML69(GⅤ)	－	－	(78)	平	口縁～胴:沈線(アルファベット文)・充塡LR縄文	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
92	4	深鉢	MK70(GⅣ①～⑥)	－	－	(54)	平	口縁～胴:沈線(アルファベット文)・充塡RL縄文	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2

第８表　土器・土製品観察表（６）

図番号	遺物番号	器形	出土地点(層)取り上げ番号	口径(㎜)	底径(㎜)	器高(㎜)	口縁形態	文様等の特徴	内面	分類
92	5	深鉢	LC56～57(EⅢ)・(EⅣ)	－	－	(55)	－	口頸～胴:沈線・充塡LR縄文	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
92	6	深鉢	LC55～56(EⅣ)	－	－	(61)	－	胴:沈線・RLR縄文(縦)	ﾅﾃﾞ	Ⅲ2
92	7	深鉢	LE～LH56～59(EⅡ)	－	－	(75)	平	胴:微隆線・充塡RLR縄文	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
92	8	深鉢	LC55(EⅣ)	－	－	(154)	－	胴:沈線・充塡RL縄文	ﾅﾃﾞ	Ⅲ2
92	9	深鉢	MK69・70・ML69(GⅤ)	248	－	(210)	平	口頸～胴:LR縄文(縦)	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
93	1	深鉢	ML69(GⅤ)	240	－	(249)	平	口頸～胴:RL縄文(縦)	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
93	2	鉢	LN73(FⅢ・Ⅳ)、LN74・LO73(FⅣ)	175	－	(137)	波状	口頸～胴:LR縄文(縦)	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
93	3	深鉢	LT74	－	－	(273)	－	胴:LR縄文(縦)	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
94	1	深鉢	LB55(EⅣ・Ⅴ)	234	120	(320)	平	口頸～胴:LR縄文(0段多条、縦)	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
94	2	深鉢	LT61RP1・2・4・11～16・19、LS・LT61(EⅣ)	－	92	(215)	－	胴:RL縄文(縦)、底:笹痕	ﾐｶﾞｷ	Ⅲ2
95	1	深鉢	排土	－	－	(67)	波状	口頸:ボタン状貼付(刺突)・貼付隆線(刺突列)、胴:沈線	ﾐｶﾞｷ	Ⅳ
95	2	深鉢	LA55～56(EⅣ)	－	－	(36)	－	胴:貼付隆線	ﾅﾃﾞ	Ⅳ
95	3	深鉢	LB56(EⅣ)	－	－	(71)	－	胴:地文単軸絡条体第1類(R、縦)・連鎖状文	ﾐｶﾞｷ	Ⅳ
95	4	深鉢	LE～LH56～59(EⅡ)	－	－	(56)	－	胴:地文LR縄文(縦)、貼付隆線(刺突列)	ﾐｶﾞｷ	Ⅳ
95	5	深鉢	LB55(EⅣ)	－	－	(49)	－	胴:貼付隆線(刺突列)	ﾅﾃﾞ	Ⅳ
95	6	深鉢	LA55(EⅣ)	159	－	(57)	平	口頸:L縄圧痕	ﾐｶﾞｷ	Ⅳ
95	7	深鉢	LI～LJ57～59(EⅣ)	－	－	(44)	波状	口頸:L縄圧痕、胴:RL縄文(縦)	ﾐｶﾞｷ	Ⅳ
95	8	深鉢	排土	－	－	(50)	波状	口頸:地文LR縄文(縦)・沈線	ﾐｶﾞｷ	Ⅳ
95	9	深鉢	LA56(EⅣ)	－	－	(45)	波状	口頸:地文LR縄文(横)・沈線	ﾐｶﾞｷ	Ⅳ
95	10	深鉢	LC56(EⅢ・Ⅳ)	－	－	(61)	－	胴:沈線文	ﾅﾃﾞ	Ⅳ
95	11	深鉢	LI～LJ57～59(EⅣ・Ⅴ)	250	－	(223)	平	口頸:RL縄文(横)・沈線、胴上半:RL縄文(横)、胴下半:無文	ﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ	Ⅳ
95	12	深鉢	LD56～57(EⅢ)	－	－	(70)	平	口頸:無文	ﾐｶﾞｷ	Ⅳ
95	13	深鉢	KT56(EⅣ)	－	－	(103)	波状	口頸:無文	ﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ	Ⅳ
95	14	深鉢	LD56～57(EⅢ・Ⅳ・Ⅴ)・LE～LH56～59(EⅡ・Ⅳ・Ⅴ)	248	－	(228)	波状(単位4)	口頸～胴:LR縄文(横)、胴下半:無文	ﾐｶﾞｷ	Ⅳ
96	1	深鉢	LD56～57(EⅡ・Ⅲ・Ⅳ)	341	－	(220)	平	口頸～胴:LR縄文(横)	ﾅﾃﾞ	Ⅳ
96	2	深鉢	LE～LH56～59(EⅡ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ)、排土	－	114	(277)	－	胴:L縄文(縦)、底:木葉痕	ﾐｶﾞｷ	Ⅳ
96	3	深鉢	LD56～57(EⅣ)・LE55水路	－	87	(40)	－	胴:無文、底:網代痕	ﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ	Ⅳ
96	4	深鉢	LA55(EⅣ)	－	－	(79)	－	胴:単軸絡条体第5類(R、縦)	ﾐｶﾞｷ	Ⅳ
96	5	深鉢	LD56～57(EⅣ)	－	－	(56)	－	胴:単軸絡条体第5類(r、縦)	ﾐｶﾞｷ	Ⅳ
96	6	鉢	SD2007、ML69RP1・(GⅤ)、ML69	182	－	(117)	平	口頸～胴:無文	ﾐｶﾞｷ	Ⅳ
96	7	小型土器	LA55～56(EⅣ)	－	26	(21)	－	胴～底:無文	ﾅﾃﾞ	Ⅳ
97	1	壷	MN70 RP4(GⅣ①～⑥)	60	25	85	平	口頸～胴:無文	ﾅﾃﾞ	Ⅳ
97	2	壷	LJ78(GⅣ①)	－	－	(27)	－	胴:沈線、充塡RL縄文	ﾅﾃﾞ	Ⅳ
97	3	壷	LC55～56(EⅣ)	－	－	(29)	－	胴:沈線・磨消RL縄文・刺突・赤彩	ﾅﾃﾞ	Ⅳ
97	4	台付鉢?	LC56(EⅢ)	－	88	(102)	－	胴～台:無文	ﾅﾃﾞ	Ⅳ
97	5	台付鉢?	LB55(EⅣ)	－	－	(47)	－	台:LR縄文(横)	ﾅﾃﾞ	Ⅳ
97	6	台付鉢?	LC55～56(EⅣ)	－	90	(46)	－	台:無文	ﾅﾃﾞ	Ⅳ
97	7	鉢？	LC55～56(EⅣ)	－	－	(59)	－	口頸:沈線・磨消縄文、胴:無文	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
97	8	鉢	LD56～57(EⅡ)	100	－	(66)	小波状、小突起	口頸:入組三叉文・沈線、胴:LR縄文(横)	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
97	9	鉢	LC55～57(EⅣ)	129	－	(55)	小突起?	口頸:LR縄文(横)・入組三叉文・沈線、胴:LR縄文(横)	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
97	10	鉢	LC55～56(EⅣ)・排土	－	－	(63)	－	口頸:沈線、胴:LR縄文(横)	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
97	11	鉢	LD56～57(EⅣ)	－	－	(49)	－	胴:LR縄文(横)、沈線	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
97	12	深鉢	LB56(EⅣ)	220	－	(126)	小波状	口頸:沈線、胴:LR縄文(横)	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
97	13	浅鉢	LE～LH56～59(EⅡ)	－	－	(40)	平	口頸:列点文、胴:雲形文、磨消LR縄文(横)	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
97	14	浅鉢	LI55RP03	－	120	(8)	－	底:雲形文・磨消LR縄文	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
97	15	浅鉢	LB55～56・LC56～57(EⅣ)・排土	226	60	68	小波状	口唇:三叉文、口頸～胴:沈線・雲形文・磨消LR縄文(横)	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
98	1	鉢	LC56～57(EⅣ)	132	59	116	平	口頸～胴:RL縄文(縦)	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
98	2	鉢	LB55(EⅢ・Ⅳ)	139	－	(74)	小波状	口頸～胴:無文	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
98	3	深鉢	LI79	254	－	(231)	平、貼付隆帯	口頸～胴:LR縄文(0段多条、縦・横)	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
98	4	深鉢	KQ45(AⅡ)、LC56～57(EⅢ・Ⅳ)、LC～LD55～57(EⅣ)	－	120	(140)	－	胴:LR縄文(縦・横)	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
98	5	深鉢	LC55～56(EⅣ)	－	107	(115)	－	胴:L縄文(横)	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
98	6	深鉢	KS44(AⅡ)	－	－	(73)	－	胴:条痕文	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ
98	7	台付鉢	LD56～57(EⅡ)	－	52	(28)	－	胴:LR縄文(横)、台部:無文	ﾐｶﾞｷ	Ⅴ

第９表　石器観察表（１）

挿図番号	遺物番号	種別	石材	出土地点	層位	取上番号	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	備考
63	1	石鏃	ガラス質流紋岩	SI5001	5	RQ313	30.5	16.0	8.1	2.7	有茎(凸基)　両面二次加工　基部･刃部折損　基部アスファルト付着
63	2	石鏃	ガラス質安山岩	SI5001	7	RQ372	46.8	16.4	4.2	2.9	木の葉形　主要剥離面残る　背面自然面残る　基部折損
63	3	石匙	ガラス質流紋岩	SI5001	床面直上	RQ304	32.1	38.7	7.1	8.0	縦型？　縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　素材上端に両面からつまみ作出　背面左側縁に刃部作出　身部折損
63	4	石匙	ガラス質流紋岩	SI5001	5	RQ315	45.0	32.0	8.5	11.3	縦型　縦長剥片素材　主要剥離面残る　素材上端に両面からつまみ作出　背面左側縁に刃部作出　身部折損
63	5	石篦	ガラス質流紋岩	SI5001	7	RQ285	71.7	31.3	15.7	32.7	縦長剥片素材？　両面全面二次加工
63	6	石篦	ガラス質流紋岩	SI5001	6	RQ475	32.1	29.8	12.9	12.9	両面全面二次加工　身部折損
63	7	石篦	ガラス質流紋岩	SI5001	床面直上	RQ298	52.2	27.9	12.4	18.6	縦長剥片素材　背面両側縁および腹面末端縁二次加工　基部折損
63	8	石篦	ガラス質流紋岩	SI5001	5	RQ235	101.8	40.7	20.5	88.1	両面全面二次加工
63	9	スクレイパー	ガラス質流紋岩	SI5001	6	RQ461	19.7	20.9	7.6	2.7	縦長剥片素材　背面自然面残る　背面片側側縁および末端縁に急角度の刃部作出　身部折損
64	1	スクレイパー	ガラス質流紋岩	SI5001	6	RQ471	31.1	21.7	9.3	5.4	素材形状不明　背面片側側縁に細かい調整により刃部作出　身部折損
64	2	スクレイパー	ガラス質流紋岩	SI5001	8	RQ257	50.9	43.8	17.3	37.4	縦長剥片素材(打点残存)　背面片側側縁および末端縁に急角度の刃部作出
64	3	二次加工のある剥片	ガラス質安山岩	SI5001	6	RQ179	53.1	39.5	24.4	48.5	縦長剥片素材　両面二次加工　身部折損　石篦未製品か
64	4	スクレイパー	ガラス質流紋岩	SI5001	4	RQ484	52.0	24.2	8.1	4.9	縦長剥片素材　背面自然面残る　背面両側縁に細かい調整により刃部作出
64	5	石錐	ガラス質流紋岩	SI5001	6	RQ276	64.8	43.7	23.5	43.7	両面素材剥離面残る　背面錐部周縁に二次加工
64	6	石錐	ガラス質流紋岩	SI5001	5	RQ269	63.3	54.7	16.6	42.0	両面素材剥離面残る　背面錐部周縁に二次加工
64	7	石錐	ガラス質流紋岩	SI5001	7	RQ226	49.6	53.7	22.4	44.6	両面素材剥離面残る　背面錐部周縁に二次加工　錐部折損
64	8	スクレイパー	ガラス質安山岩	SI5001	床面直上	RQ297	42.5	44.1	10.3	15.9	横長剥片素材　背面片側側縁に細かい調整により刃部作出
65	1	スクレイパー	ガラス質流紋岩	SI5001	6	RQ227	78.4	53.7	14.8	58.3	縦長剥片素材(打点残存)　背面両側縁に急角度の刃部作出　身部折損
65	2	スクレイパー	ガラス質流紋岩	SI5001			27.7	25.1	10.3	6.2	素材形状不明　背面片側側縁に急角度の刃部作出　身部折損
65	3	スクレイパー	ガラス質流紋岩	SI5001	床面直上	RQ300	33.8	22.8	8.0	4.1	素材形状不明　背面側縁に急角度の刃部作出　身部折損
65	4	スクレイパー	ガラス質流紋岩	SI5001	6	RQ275	97.4	40.5	21.7	83.0	縦長剥片素材　背面両側縁に急角度の刃部作出
65	5	二次加工のある剥片	溶結凝灰岩	SI5001	床面直上	RQ251	65.3	23.9	12.4	14.4	両面二次加工　先端部欠損　石鏃未製品か
65	6	半円状扁平打製石器	細粒凝灰岩	SI5001	7	RQ185	61.1	88.3	18.7	99.2	扁平角礫素材　隅丸長方形か　両長辺に両側から二次加工　身部折損
65	7	半円状扁平打製石器	安山岩	SI5001	2	RQ98	104.5	129.9	20.3	423.3	扁平円礫素材　半円形　周縁に両側から二次加工
66	1	礫器	安山岩	SI5001	5	RQ135	162.0	78.5	50.2	817.9	扁平円礫素材　一辺両側から刃部作出
66	2	磨石	輝石安山岩	SI5001	2	RQ97	122.4	90.4	37.6	500.4	扁平円礫素材　磨痕２面　敲打痕１箇所
66	3	磨石	ひん岩	SI5001	2	RQ457	56.1	55.3	35.0	163.7	円礫素材　磨痕２面
66	4	凹石	輝石安山岩	SI5001	2	RQ184	124.6	98.1	76.1	1229.2	円礫素材　敲打痕１箇所
66	5	磨石	輝石安山岩	SI5001	5	RQ145	124.9	96.6	47.7	880.8	扁平円礫素材　磨痕１面
66	6	磨石	流紋岩	SI5001	2	RQ89	89.8	85.8	60.5	546.0	円礫素材　磨痕１面
66	7	凹石	流紋岩	SI1015		RQ21	116.6	84.6	58.9	650.5	円礫素材　敲打痕２箇所
67	1	石鏃	ガラス質流紋岩	SI5003	12	RQ103	45.8	15.4	1.8	3.4	木の葉形　両面二次加工　先端部折損
67	2	石槍	流紋岩	SI5003	13	RQ119	52.8	17.3	4.2	3.7	両面二次加工　先端部欠損
67	3	スクレイパー	ガラス質安山岩	SI5003	10	RQ82	31.0	28.2	15.2	14.7	素材形状不明　背面に急角度の刃部作出　身部折損
67	4	スクレイパー	ガラス質流紋岩	SI5003	12	RQ40	35.6	25.5	9.6	7.8	縦長素材剥片　背面両側縁に急角度の刃部作出　身部折損
67	5	スクレイパー	ガラス質流紋岩	SI5003	11	RQ41	42.8	35.3	16.8	23.3	素材形状不明(打点残存)　背面片側側縁に細かい調整により刃部作出
67	6	スクレイパー	ガラス質安山岩	SI5003	11	RQ86	49.6	37.9	8.6	9.1	縦長剥片素材　背面片側側縁に細かい調整により刃部作出　身部欠損
67	7	凹石	細粒～中粒砂岩	SI5003	P3内	RQ79	58.1	42.7	23.1	53.7	円礫素材　敲打痕１箇所
67	8	石鏃	ガラス質流紋岩	SI5004	1	RQ9	45.4	15.9	3.9	2.3	有茎(凸基)　両面二次加工　基部アスファルト付着
67	9	石匙	ガラス質流紋岩	SI5004	P4内	RQ32	22.1	24.3	5.2	2.1	縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　素材上端に両面からつまみ作出　身部折損
67	10	スクレイパー	ガラス質流紋岩	SI5004	7	RQ27	74.5	23.0	7.0	6.8	縦長剥片素材　背面片側側縁に細かい調整により刃部作出
67	11	スクレイパー	ガラス質安山岩	SI5004	7	RQ12	51.2	21.8	6.0	3.9	縦長剥片素材　背面片側側縁に細かい調整により刃部作出
67	12	凹石	流紋岩	SI5004	7	RQ31	105.6	88.6	69.7	718.1	円礫素材　敲打痕１箇所
68	1	石匙	ガラス質流紋岩	SI5005	4	RQ109	37.9	58.0	9.7	14.6	横型　縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　素材上端に両面からつまみ作出　背面両側縁に刃部作出　身部欠損　アスファルト付着
68	2	スクレイパー	ガラス質流紋岩	SI5005	4	RQ20	41.5	61.4	13.3	19.6	縦長剥片素材　背面周縁細かい調整により刃部作出
68	3	スクレイパー	細粒安山岩	SI5005			28.0	32.0	8.4	6.8	縦長剥片素材　背面両側縁に細かい調整により刃部作出　身部折損
68	4	スクレイパー	ガラス質流紋岩	SI5005	床面直上	RQ104	73.1	36.6	13.4	29.6	縦長剥片素材　背面両側縁に細かい調整により刃部作出
68	5	スクレイパー	ガラス質流紋岩	SI5005	床面直上	RQ100	61.7	31.7	13.3	15.3	縦長剥片素材　背面自然面残る　背面片側側縁に細かい調整により刃部作出

第９表　石器観察表（２）

挿図番号	遺物番号	種別	石材	出土地点	層位	取上番号	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	備考
68	6	スクレイパー	玉髄	SI5005	4	RQ106	47.3	33.7	15.9	30.7	素材形状不明　素材上下面自然面残る　両面二次加工　石篦未製品か
68	7	礫器	流紋岩	SI5005	4	RQ110	164.8	66.3	22.8	334.4	扁平円礫素材　素材両面自然面残る　両面二次加工　半円状扁平打製石器か
69	1	スクレイパー	ガラス質安山岩	SI5012	2	RQ7	71.7	47.7	10.3	28.9	縦長剥片素材　背面両側縁に急角度の刃部作出
69	2	スクレイパー	ガラス質流紋岩	SI5012	4	RQ4	24.7	39.9	10.1	7.5	縦長剥片素材　背面片側側縁二次加工および末端縁に急角度の刃部作出　身部折損
69	3	スクレイパー	ガラス質流紋岩	SI5012	2	RQ3	46.8	34.3	10.5	14.2	縦長剥片素材(打点残存)　背面両側縁二次加工および末端縁に急角度の刃部作出
69	4	スクレイパー	ガラス質流紋岩	SI5012	3	RQ2	94.9	27.4	13.0	20.6	縦長剥片素材　背面両側縁および末端縁に細かい調整により刃部作出
69	5	礫器	流紋岩	SI5012	3	RQ28	166.0	77.5	45.2	704.7	円礫素材　片面二次加工　打製石斧未製品か
69	6	半円状扁平打製石器	流紋岩	SI5012	床面直上	RQ27	125.5	100.6	18.6	215.8	扁平角礫素材　半円形　弧辺両面から二次加工　身部折損
69	7	半円状扁平打製石器	流紋岩	SI5012	3	RQ18	73.5	56.5	19.2	83.7	扁平角礫素材　半円形　周縁両面から二次加工　身部折損
70	1	半円状扁平打製石器	流紋岩	SI5012	床面直上	RQ31	77.1	169.7	10.4	213.3	扁平角礫素材　隅丸長方形　両長辺に両面から二次加工
70	2	半円状扁平打製石器	ひん岩	SI5012	P3内	RQ3	68.8	174.1	30.0	613.7	扁平円礫素材　隅丸長方形　周縁両面から二次加工　側面磨痕あり
70	3	半円状扁平打製石器	ガラス質流紋岩	SI5012	床面直上		103.2	89.1	20.3	183.0	扁平円礫素材　半円形　周縁両面から二次加工
70	4	凹石	細粒流紋岩	SI5012	4	RQ20	93.9	71.2	39.9	358.2	扁平円礫素材　敲打痕１箇所
70	5	磨石	細粒玄武岩	SI5012	4	RQ19	83.0	82.9	68.1	662.9	円礫素材　磨痕１面
70	6	スクレイパー	ガラス質流紋岩	SI2001	P２内	RQ22	70.9	21.3	14.0	14.7	縦長剥片素材(打点残存)　背面片側側縁および末端縁に刃部作出
70	7	スクレイパー	ガラス質流紋岩	SI5013	1	RQ14	25.2	13.5	3.9	1.1	縦長剥片素材　背面両側縁細かい調整により刃部作出　アスファルト付着
70	8	スクレイパー	ガラス質流紋岩	SI5013	炉脇床直	RQ45	25.8	35.4	5.8	5.0	横長剥片素材(打点残存)　腹面両側縁および末端縁に細かい調整により刃部作出
71	1	スクレイパー	ガラス質安山岩	SI2004			54.6	41.5	16.0	29.2	横長剥片素材　背面自然面残存　背面片側側縁に細かい調整により刃部作出
71	2	磨石	流紋岩	SI2004	1		100.4	79.5	55.0	508.1	円礫素材　磨痕２面
71	3	凹石	輝石安山岩	SI5010	3	RQ10	94.0	82.6	55.4	571.4	円礫素材　敲打痕２箇所
71	4	磨石	かんらん石玄武岩	SI3266	4	RQ45	96.7	73.3	54.3	654.7	円礫素材　磨痕１面
71	5	凹石(磨石)	流紋岩	SI3266	4	RQ40	90.8	65.1	43.2	308.6	円礫素材　敲打痕２箇所　磨痕１面
71	6	凹石	角閃石安山岩	SI3266	4	RQ44	99.5	76.5	56.1	574.8	円礫素材　敲打痕３箇所
71	7	凹石(磨石)	角閃石安山岩	SI3266	4	RQ41	89.5	62.6	56.1	402.9	円礫素材　敲打痕３箇所　磨痕２面
71	8	スクレイパー	ガラス質流紋岩	SK2022	2	RQ3	63.5	47.9	10.0	16.8	縦長剥片素材　背面片側側縁および末端縁に細かい調整により刃部作出
72	1	磨石	輝石安山岩	SK2019		RQ28	123.1	94.5	85.2	1400.1	円礫素材　磨痕１面
72	2	凹石	輝石安山岩	SK2019			108.0	103.3	55.0	635.0	円礫素材　敲打痕１箇所
72	3	石鏃	ガラス質流紋岩	SK3263	4	RQ1	59.3	20.0	8.8	7.1	有茎(凸基)　主要剥離面残る
72	4	石匙	ガラス質流紋岩	SK3304	2	RQ1	59.0	32.9	12.8	16.4	縦型　縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　素材上端に両面からつまみ作出(打点残存)　背面片側側縁および末端縁に刃部作出
72	5	凹石(磨石)	輝石安山岩	SK3282	1	RQ56	118.6	88.5	53.1	891.1	扁平円礫素材　敲打痕３箇所　磨痕２面
72	6	磨石	ひん岩	SK3282	1	RQ65	131.4	69.3	45.0	720.3	扁平円礫素材　磨痕２面
72	7	礫器	細粒玄武岩	SK3282			157.8	95.7	38.3	622.2	円礫素材　両面二次加工　打製石斧未製品か
73	1	凹石(磨石)	細粒砂岩	SK3289	1	RQ3	99.9	92.0	64.8	801.4	扁平円礫素材　敲打痕３箇所　磨痕１面
73	2	凹石	中粒砂岩	SK3290	3	RQ9	124.5	87.7	71.3	1029.9	扁平円礫素材　敲打痕３箇所
73	3	凹石(磨石)	輝石安山岩	SK3292	2	RQ6	86.3	85.3	46.9	509.7	扁平円礫素材　敲打痕２箇所　磨痕１面
73	4	磨石	輝石安山岩	SK3292	1	RQ7	84.5	72.2	69.5	568.9	円礫素材　磨痕１面
73	5	磨石	流紋岩	SQ5025			81.4	73.5	60.6	521.1	円礫素材　磨痕１面
73	6	凹石	角閃石安山岩	SQ5025			86.5	63.0	46.5	328.1	円礫素材　敲打痕２箇所
73	7	凹石	緑色凝灰岩	SQ5025			128.4	62.8	67.5	612.5	円礫素材　敲打痕１箇所
74	1	凹石	角閃石安山岩	SK5024	1	RQ3	89.7	84.1	59.1	634.1	円礫素材　敲打痕２箇所
74	2	石皿	軽石	SK5067	1	RQ1	98.6	84.5	35.1	156.1	角礫素材　表面くぼんだ磨面
74	3	凹石(磨石)	輝石安山岩	SD2007		RQ2	102.9	90.6	56.9	643.4	円礫素材　敲打痕２箇所　磨痕２面
74	4	凹石(磨石)	輝石安山岩	SD2007			114.5	100.8	68.9	1067.6	円礫素材　敲打痕３箇所　磨痕２面
74	5	石皿	細粒砂岩	SN3303		RQ1	237.2	210.7	46.0	2650.2	扁平円礫素材　磨痕１面
99	1	石鏃	ガラス質流紋岩	LA46	AⅡ		28.7	18.2	3.1	0.9	無茎(凹基)　両面二次加工
99	2	石鏃	玉髄	LB55	EⅠ		24.4	16.6	3.7	0.7	無茎(凹基)　両面二次加工
99	3	石鏃	ガラス質流紋岩	LJ70	FⅣ		30.7	18.3	6.0	2.5	無茎(凹基)　両面二次加工
99	4	石鏃	ガラス質流紋岩	LN72		RQ27	25.3	14.1	3.8	1.3	無茎(平基)　主要剥離面残る　先端部折損
99	5	石鏃	ガラス質流紋岩	MM72	GⅣ		23.0	13.9	4.1	1.0	有茎(凹基)　全面二次加工　基部折損　基部アスファルト付着
99	6	石鏃	ガラス質流紋岩	LT54	CⅡ		27.4	14.4	3.6	0.8	有茎(凸基)　両面二次加工　先端部折損
99	7	石鏃	ガラス質流紋岩	NA48	BⅢ		35.1	15.6	6.7	3.8	有茎(凸基)　主要剥離面残る　先端部・基部折損

第９表　石器観察表（３）

挿図番号	遺物番号	種別	石材	出土地点	層位	取上番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
99	8	石鏃	ガラス質流紋岩	MS62	CⅤ		36.1	12.2	5.5	2.1	有茎(凸基)　両面二次加工
99	9	石鏃	ガラス質流紋岩	MS64	GⅤ		33.7	11.7	4.2	1.6	有茎(凸基)　素材剥離面残る　基部折損　基部アスファルト付着
99	10	石鏃	ガラス質流紋岩	排土			33.8	13.9	4.9	1.8	有茎(凸基)　衝撃剥離あり　主要剥離面残る　先端部･基部折損
99	11	石鏃	ガラス質安山岩	NA52	攪乱		35.0	13.9	4.6	1.9	有茎(凸基)　主要剥離面残る
99	12	石鏃	ガラス質安山岩	ML63	CⅠ		37.3	15.6	6.3	3.7	有茎(凸基)　衝撃剥離あり　基部折損
99	13	石鏃	細粒流紋岩	MR65	GⅤ		51.7	13.7	6.8	3.7	有茎(凸基)　両面二次加工　先端部折損
99	14	石鏃	ガラス質流紋岩	MG64			62.2	15.7	7.7	5.6	有茎(凸基)　両面二次加工　基部アスファルト付着
99	15	石鏃	ガラス質安山岩	MT64	GⅥ		47.4	13.7	8.2	4.4	有茎(凸基)　両面二次加工　基部アスファルト付着
99	16	石鏃	細粒流紋岩	MS61	CⅤ		48.4	11.9	6.6	3.2	尖基　両面二次加工
99	17	石鏃	ガラス質流紋岩	LJ71	FⅣ		37.9	12.1	6.7	2.7	尖基　両面素材剥離面残る　先端部折損　基部アスファルト付着
99	18	石鏃	ガラス質流紋岩	MS64	GⅤ		32.0	13.5	5.1	1.9	有茎(尖基)　素材剥離面残る　未製品か
99	19	石鏃	ガラス質流紋岩	LD53	倒木痕		30.9	10.2	6.8	1.7	尖基　主要剥離面残る　基部アスファルト付着　先端部折損
99	20	石鏃	ガラス質流紋岩	LC56	EⅢ		31.7	10.3	5.0	1.6	尖基　両面二次加工　基部折損
99	21	石鏃	ガラス質流紋岩	LQ75	FⅤ		25.9	9.5	4.7	1.0	円基　両面二次加工
99	22	石鏃	ガラス質流紋岩	NC51	BⅢ		21.7	12.3	3.5	0.9	円基　両面二次加工　基部折損
99	23	石鏃	ガラス質流紋岩	LT74		RQ21	42.6	9.5	3.3	1.5	柳葉形　両面二次加工　先端部欠損
99	24	石鏃	ガラス質流紋岩	LD55	EⅢ	RQ2	39.1	10.0	4.4	1.8	柳葉形　両面二次加工
100	1	石槍	ガラス質流紋岩	LK53	CⅡ		55.6	16.8	6.2	4.7	木葉形　両面二次加工
100	2	石槍	ガラス質流紋岩	KO43	AⅡ		113.5	29.3	8.2	23.0	木葉形　両面二次加工
100	3	石錐	ガラス質流紋岩	LC56	EⅢ		36.9	18.0	10.9	4.2	主要剥離面残る　全面二次加工
100	4	石錐	ガラス質流紋岩	LM72	FⅣ		36.6	33.2	11.2	8.9	両面素材剥離面残る　錐部両面二次加工　錐部折損
100	5	石錐	細粒流紋岩	LL71	FⅤ		49.5	39.4	22.3	27.9	両面素材剥離面残る　背面錐部周縁のみ二次加工
100	6	石錐	玉髄	LT74		RQ25	63.2	46.1	13.9	31.7	縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　腹面錐部のみ二次加工　基部片側側縁スクレイパー状に二次加工
100	7	石錐	細粒安山岩	MO66	GⅥ		80.8	51.9	20.6	44.4	縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　背面周縁二次加工
101	1	石匙	細粒流紋岩	MJ71	GⅠ		63.8	36.5	12.8	17.4	縦型　縦長剥片素材　主要剥離面残る　素材上端に両面からつまみ作出　背面周縁二次加工
101	2	石匙	玉髄	LN72	FⅤ		70.9	47.2	13.2	33.9	縦型　縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　素材上端に両面からつまみ作出(打点残存)　背面周縁二次加工
101	3	石匙	細粒安山岩	NA54	BⅡ		61.9	25.1	11.8	9.8	縦型　縦長剥片素材　主要素材剥離面残る　素材上端に両面からつまみ作出　背面両側縁二次加工　腹面左側縁微細剥離あり
101	4	石匙	ガラス質流紋岩	排土			84.7	21.4	11.9	14.9	縦型　縦長剥片素材　主要剥離面残る　素材上端に両面からつまみ作出　背面全面二次加工　腹面右側縁微細剥離あり
101	5	石匙	ガラス質流紋岩	LQ74	FⅣ		92.7	27.7	10.6	21.8	縦型　縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　素材上端に両面からつまみ作出(打点残存)　背面周縁二次加工　素材末端縁微細剥離あり
101	6	石匙	ガラス質流紋岩	MN70	GⅣ	RQ2	74.4	32.6	9.8	17.4	縦型　縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　素材上端に両面からつまみ作出　背面両側縁二次加工　腹面左側縁微細剥離あり　アスファルト付着
101	7	石匙	細粒安山岩	LM72	FⅤ		51.6	33.5	8.5	12.3	縦型　縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　素材上端に両面からつまみ作出　背面末端縁と腹面末端縁および右側縁二次加工　腹面左側縁微細剥離あり
102	1	石匙	ガラス質流紋岩	LL71	FⅤ		70.0	28.9	12.0	17.0	縦型　縦長剥片素材　主要剥離面残る　素材上端に両面からつまみ作出　背面周縁二次加工　腹面右側縁微細剥離あり
102	2	石匙	細粒安山岩	LM72	FⅤ		68.2	34.6	10.6	21.0	縦型　縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　素材上端に両面からつまみ作出　背面周縁二次加工
102	3	石匙	ガラス質流紋岩	LJ70		RQ2	76.1	27.3	10.1	13.0	縦型　縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　素材上端に両面からつまみ作出(打点残存)　背面周縁二次加工　腹面右側縁微細剥離あり
102	4	石匙	ガラス質流紋岩	MN69	GⅣ	RQ1	79.0	34.0	11.9	24.1	縦型　縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　素材上端に両面からつまみ作出(打点残存)　背面右側縁と腹面右側縁二次加工
102	5	石匙	ガラス質流紋岩	排土			101.5	26.7	11.3	25.7	縦型　縦長剥片素材　主要剥離面残る　素材上端に両面からつまみ作出　背面全面と腹面右側縁二次加工
102	6	石匙	ガラス質流紋岩	LN73	FⅣ		102.1	43.2	16.1	45.8	縦型　縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　素材上端に両面からつまみ作出(打点残存)　背面周縁二次加工
103	1	石匙	ガラス質流紋岩	MS65	GⅥ		109.6	67.2	20.1	61.6	縦型　縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　素材上端に両面からつまみ作出(打点残存)　腹面周縁に刃部作出　背面左側縁微細剥離あり
103	2	石匙	ガラス質流紋岩	LN73	FⅣ		34.4	31.8	8.6	8.1	縦型　縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　素材上端に両面からつまみ作出(打点残存)　背面両側縁二次加工　腹面右側縁微細剥離あり　身部折損
103	3	石匙	ガラス質流紋岩	MP66	GⅥ		42.0	35.7	8.9	10.1	縦型　縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　素材上端に背面からつまみ作出(打点残存)　身部折損
103	4	石匙	細粒流紋岩	MT64	GⅥ		52.7	59.3	8.7	16.5	横型　縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　素材側縁に両面からつまみ作出　刃部未加工　素材末端縁微細剥離あり　身部折損
103	5	石匙	ガラス質流紋岩	MS64	GⅤ		45.7	58.4	10.4	18.8	横型　縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　素材側縁に両面からつまみ作出　刃部未加工　素材末端縁微細剥離あり　未製品か

第９表　石器観察表（４）

挿図番号	遺物番号	種別	石材	出土地点	層位	取上番号	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	備考
104	1	石匙	ガラス質流紋岩	LB55	EⅣ		55.1	81.2	16.1	42.2	横型　横長剥片素材　主要剥離面残る　背面自然面残る　素材上端に両面からつまみ作出　腹面両側縁と背面末端縁二次加工　末端縁微細剥離あり
104	2	石匙	ガラス質流紋岩	排土			41.3	61.0	9.7	20.0	横型　横長剥片素材　主要剥離面残る　背面自然面残る　素材上端に両面からつまみ作出(打点残存)　腹面周縁二次加工　末端縁微細剥離あり
104	3	石匙	ガラス質流紋岩	MM48	BⅡ		38.2	49.2	8.8	12.1	横型　横長剥片素材　両面素材剥離面残る　素材上端に両面からつまみ作出(打点残存)　刃部未加工　身部折損　未製品か
104	4	石匙	細粒流紋岩	MS49	BⅠ		52.6	67.8	9.9	18.5	横型　縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　素材側縁に両面からつまみ作出　両面周縁二次加工
104	5	石匙	細粒流紋岩	LQ67	DⅡ		63.4	85.8	15.6	84.5	横型　縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　素材上端に両面からつまみ作出(打点残存)　両面末端縁二次加工
105	1	石篦	細粒安山岩	MN64	CⅤ		84.1	33.7	15.1	44.6	両面二次加工
105	2	石篦	ガラス質流紋岩	LK72	FⅠ		99.7	35.0	18.9	55.3	両面ほぼ全面二次加工
105	3	石篦	ガラス質流紋岩	LJ70	FⅠ		40.9	33.9	12.0	14.2	両面ほぼ全面二次加工　自然面残る　身部折損
105	4	石篦	細粒玄武岩	MA66	DⅡ		65.0	37.5	13.7	36.6	横長剥片素材　背面ほぼ全面二次加工　両側縁両面から整形
105	5	石篦	細粒玄武岩	KQ48	AⅡ		91.3	48.1	19.9	93.4	横長剥片素材　背面自然面残る　背面ほぼ全面二次加工　背面側縁に刃部作出　身部折損
105	6	石篦	流紋岩	LL60	EⅣ	RQ15	48.7	31.5	15.3	29.0	横長剥片素材(打点残存)　主要剥離面残る　背面両側縁二次加工　身部折損
105	7	石篦	ガラス質流紋岩	LN71	FⅡ		41.5	31.8	11.2	13.1	縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　背面側縁二次加工　素材先端縁に両面から刃部作出　身部折損
106	1	石篦	ガラス質流紋岩	LN73	FⅢ		59.7	17.0	12.2	11.9	縦長剥片素材　両面素材剥離面残る　背面両側縁二次加工　素材末端縁に両面から刃部作出
106	2	スクレイパー	ガラス質流紋岩	排土			65.6	48.6	21.0	46.1	縦長剥片素材　背面周縁二次加工　末端縁に急角度の刃部作出
106	3	スクレイパー	ガラス質流紋岩	LJ52	倒木	RQ1	36.4	31.2	14.4	13.9	縦長剥片素材　背面片側側縁および末端縁に急角度の刃部作出　身部折損
106	4	スクレイパー	細粒安山岩	LS61	CⅣ		28.4	37.2	7.6	8.8	縦長剥片素材　背面両側縁および末端縁に刃部作出　身部折損
106	5	スクレイパー	ガラス質流紋岩	LO66	FⅤ		68.3	41.0	17.8	31.0	縦長剥片素材(両極技法)　背面上端および片側側縁に急角度の刃部作出
106	6	スクレイパー	ガラス質流紋岩	LI70	FⅤ		78.2	33.6	18.9	35.0	縦長剥片素材　背面両側縁および末端縁に細かい調整により刃部作出
106	7	スクレイパー	ガラス質流紋岩	LO73	FⅤ		37.5	23.2	7.9	7.0	縦長剥片素材　背面両側縁および末端縁に細かい調整により刃部作出　身部折損
106	8	スクレイパー	ガラス質安山岩	MG57	CⅤ		46.5	43.4	9.5	19.3	縦長剥片素材　背面両側縁に細かい調整により刃部作出　身部折損
107	1	スクレイパー	細粒安山岩	MS64	GⅤ		39.6	31.7	7.5	6.1	横長剥片素材　素材側縁および末端縁に両面からの細かい調整により刃部作出　身部折損
107	2	スクレイパー	ガラス質流紋岩	KM45	AⅠ		55.4	52.7	12.6	34.3	縦長剥片素材(打点残存)　背面自然面残る　背面両側縁に細かい調整により刃部作出　身部折損
107	3	スクレイパー	ガラス質安山岩	LO57	CⅡ		42.2	12.4	6.4	2.9	縦長剥片素材　背面上端部に急角度の刃部作出
107	4	スクレイパー	ガラス質流紋岩	LI70	FⅢ		37.6	13.7	5.0	2.6	縦長剥片素材　素材両側縁に両面からの細かい調整により刃部作出　石鏃未製品か
107	5	スクレイパー	細粒安山岩	LL71	FⅤ	RQ327	48.1	40.9	13.9	23.8	縦長剥片素材　背面自然面残る　背面周縁二次加工　末端折損
107	6	スクレイパー	ガラス質流紋岩	MJ70	攪乱		115.3	38.2	17.2	38.6	縦長剥片素材　背面自然面残る　背面両側縁二次加工および末端縁に刃部作出
107	7	スクレイパー	ガラス質安山岩	LH53	AⅡ	RQ1	40.4	49.4	11.5	16.2	横長剥片素材(打点残存)　背面片側側縁および末端縁に細かい調整により刃部作出
107	8	スクレイパー	ガラス質安山岩	LE55	攪乱		40.6	53.0	10.8	11.3	横長剥片素材　背面片側側縁および末端縁に細かい調整により刃部作出
107	9	スクレイパー	ガラス質安山岩	排土			40.5	59.2	11.5	21.5	横長剥片素材　背面片側側縁および末端縁に細かい調整により刃部作出
108	1	スクレイパー	ガラス質安山岩	NA50	BⅢ		78.0	55.9	12.0	40.5	縦長剥片素材(打点残存)　背面両側縁に細かい調整により刃部作出　末端折損
108	2	スクレイパー	ガラス質流紋岩	LM73	FⅣ		63.4	28.9	8.7	11.3	縦長剥片素材　背面片側側縁に細かい調整により刃部作出
108	3	スクレイパー	ガラス質流紋岩	MJ64	攪乱		62.1	39.8	11.6	21.5	縦長剥片素材(打点残存)　背面片側側縁および腹面片側側縁に細かい調整により刃部作出　身部折損
108	4	スクレイパー	ガラス質安山岩	LC55	EⅡ		79.0	47.4	14.5	33.6	縦長剥片素材　背面自然面残る　背面片側側縁に細かい調整により刃部作出
108	5	スクレイパー	ガラス質流紋岩	MJ71	FⅤ		45.2	30.2	7.0	7.4	縦長剥片素材　背面自然面残る　背面片側側縁に細かい調整により刃部作出
108	6	スクレイパー	ガラス質安山岩	MS65	GⅥ		63.9	46.8	12.6	28.4	縦長剥片素材　背面末端縁に急角度の刃部作出
108	7	スクレイパー	ガラス質安山岩	LN73	FⅢ		36.7	11.0	9.0	3.7	素材形状不明　側縁二次加工　石錐未製品か
109	1	礫器	細粒玄武岩	LM60		RQ2	166.8	168.3	40.0	1399.7	扁平円礫素材　一辺両側から二次加工
109	2	礫器	細粒玄武岩	MS65	GⅥ		183.4	67.9	38.1	584.8	円礫素材　両面二次加工　打製石斧未製品か
109	3	磨製石斧	極細粒凝灰岩	LR58	CⅣ		100.6	43.6	14.1	93.6	円刃両刃
109	4	磨製石斧	石英斑岩	LC55	EⅡ		62.4	42.3	19.5	82.1	円刃両刃　基部折損
109	5	磨製石斧	泥質片岩	排土			59.2	39.2	12.9	49.9	刃部折損
110	1	石錘	石英斑岩	排土			118.1	178.9	42.1	1121.6	扁平円礫素材　片面ほぼ全面二次加工
110	2	凹石	安山岩	NB49	BⅡ		94.6	76.6	47.0	384.7	円礫素材　敲打痕２箇所
110	3	凹石(磨石)	安山岩	LR75		RQ3	118.1	105.4	38.0	503.2	円礫素材　敲打痕１箇所　磨痕１面
110	4	凹石	安山岩	LK71	FⅤ	RQ462	137.2	70.5	48.9	550.7	円礫素材　敲打痕２箇所
110	5	凹石	安山岩	LM72		RQ1	125.4	99.4	68.7	1074.1	円礫素材　敲打痕２箇所

３　古代以降

（１）遺構と遺構内出土遺物

①掘立柱建物跡

ＳＢ3259掘立柱建物跡（遺構第111図）

《位置・確認状況》高位面ＬＤ・ＬＥ52～54区、地山漸移層（ＣⅥ層）上面で確認した。先に検出したＰ３・Ｐ５・Ｐ６より柱筋を検討し、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４を検出した。

《重複》ＳＫ3181土坑、ＳＫＰ3145より新しい。

《規模》桁行２間×梁行１間で、主軸方向はＮ－26°－Ｗ、柱間は６～９尺（約1.8m～2.7m）である。

《柱穴・覆土》Ｐ１～Ｐ６の６基の柱穴からなる。いずれも平面円形で、径は0.2～0.4m、確認面からの深さは0.10m～0.25mである。覆土は黒褐色土の単一層で柱痕は確認できなかった。

《出土遺物》遺物は出土していない。

《時期》詳細な時期は不明である。

ＳＢ3260掘立柱建物跡（遺構第111図）

《位置・確認状況》高位面ＬＢ53区、地山漸移層（ＣⅥ層）上面で確認した。先に検出したＰ１・Ｐ４より柱筋を検討し、Ｐ２・Ｐ３を検出した。

《重複》ＳＫ3213土坑、ＳＫＰ3239より新しい。

《規模》桁行１間×梁行１間の小規模な掘立柱建物跡で、主軸方向はＮ－14°－Ｅである。柱間は６～７尺（約1.8m～2.1m）である。

《柱穴・覆土》Ｐ１～Ｐ４の４基の柱穴からなる。いずれも平面不整円形で、長軸は0.28m～0.35m、確認面からの深さは0.13m～0.20mである。覆土は黒褐色土の単一層で、柱痕は確認できなかった。

《出土遺物》遺物は出土していない。

《時期》詳細な時期は不明である。

②竪穴状遺構

ＳＫＩ5064竪穴状遺構（遺構第112図）

《位置・確認状況》高位面ＭＲ50区、地山漸移層（ＢⅢ層）上面で確認した。

《重複》ＳＩ5010竪穴住居跡、ＳＫＰ5066より新しい。

《形状・規模》平面形は一辺約1.8mのほぼ正方形で、四隅にピットが位置する。削平を受けているため、確認面からの深さは0.1m以下と浅く、壁の状況は不明である。床面は平坦で固く締まる。床面標高は187.0m前後である。また、Ｐ２とＰ４間の壁際には床面からの深さ２㎝ほどの浅い溝を確認した。壁溝と推測する。

《柱穴・付属施設》柱穴を４基確認した。平面形はいずれも不整楕円形で、長軸は0.3m前後、短軸は0.2m前後である。床面からの深さは0.15m～0.20mである。覆土は暗褐色土の単一層で、地山土塊が多く含まれる。柱痕は確認できなかった。

《覆土》不明である。

《出土遺物》遺物は出土していない。

《時期・性格》竪穴の平面形が方形であることから古代以降と推定する。

③土坑

ＳＫ1019土坑（遺構第112図）

《位置・確認状況》低位面ＬＮ73区に位置する。低位段丘面に設定した土層観察用の断面で確認した。遺構上部は削平を受けており、確認面は耕作土直下のＦⅡ層である。

《重複》重複する遺構はない。

《形状・規模》調査時に大きく削平したため、詳細な形状は不明であるが、径1.0m前後の平面円形と推定する。確認面からの深さは最大で0.46mである。壁はやや開いて立ち上がる。底面は西側に低く傾斜する。

《覆土》２層に分層した。どちらにも地山土塊が混入することから、人為堆積と判断する。

《出土遺物》遺物は出土していない。

《時期・性格》遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、遺構検出面より古代以降の可能性が高い。性格は特定しがたい。

ＳＫ2028土坑（遺構第112図）

《位置・確認状況》氾濫原上位面ＮＤ68区に位置する。旧水田耕作土直下、ＧⅡ層上面で角礫を検出し、周辺を精査したところ、掘り込みを確認した。

《重複》重複する遺構はない。

《形状・規模》掘り込みは長軸約0.7m、短軸約0.5mの平面不整形で、確認面からの深さは最大で約0.1mである。壁はなだらかに立ち上がり、底面は凹凸がある。上面には５㎝～30㎝の角礫が10点程度露出する。最も大きい東側の礫は、扁平面を水平にして据えられている。

《覆土》覆土は暗褐色土の単一層である。礫の間に充塡されたものと推定する。

《出土遺物》５㎝～30㎝の角礫が10個程度出土した。接合状況は不明であるが、すべて同一岩と考えられる。後世の攪乱により、破損し散乱したと推定する。

《時期・性格》礫の出土状況より、金床石の据え付けピットの可能性がある。しかし礫に使用痕は認められず、特定しがたい。時期は、ＳＱＮ2025石組炉に近接して位置することから、同時期とすれば中世～近世に比定できようか。

ＳＫ2033土坑（遺構第113図）

《位置・確認状況》氾濫原上位面ＮＥ67区に位置する。ＧⅡ層上面で確認した。

《重複》ＳＱＮ2025石組炉より旧い。

《形状・規模》径約0.8mの平面不整円形である。確認面からの深さは最大で約0.2mである。壁は開いて立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

《覆土》暗褐色土の単一層である。ＧⅡ層由来と判断する。

《出土遺物》遺物は出土していない。

《時期・性格》検出面から中世～近世の可能性が考えられようか。性格は不明である。

ＳＫ3299土坑（遺構第113図）

《位置・確認状況》中位面ＬＪ58・59区で確認した。ＥⅢ層上面から掘り込まれる。

《重複》なし。

《形状・規模》東側は地山上面まで掘り下げていたため平面形は明瞭でない。残存部の長軸は約1.5m

である。壁はなだらかに開いて立ち上がる。底面は丸みを帯び、確認面からの深さは約0.4mである。

《覆土》ＥⅣ層由来の黒褐色土単一層である。しまりが弱い。

《出土遺物》底面より円礫が４個検出された。周辺に礫は存在せず、自然に礫が混入する状況ではないことから、人為的に入れられたものと判断する。

《時期・性格》縄文時代の遺構と比較して、覆土のしまりが弱いことから、新しい時期と推測する。

ＳＫ5020土坑（遺構第113図）

《位置・確認状況》高位面ＭＯ・ＭＰ50区、地山漸移層（ＢⅢ層）上面で確認した。

《重複》重複する遺構はない。

《形状・規模》平面不整楕円形で、長軸約1.0m、短軸約0.8mである。壁は開いて立ち上がる。底面は平坦で確認面から底面までの深さは約0.4mである。

《覆土》地山土が多く混入する黒褐色土である。人為堆積と判断する。

《出土遺物》遺物は出土していない。

《時期・性格》遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、覆土の様相から、近代以降の可能性もある。性格は不明である。

④炉跡

ＳＮ1025炉跡（遺構第113図）

《位置・確認状況》中位面ＭＣ66区に位置する。地山層（ＤＶ層）上面で焼土塊と炭化物の広がりを確認し、半截した結果、断面で掘り込みを確認した。

《重複》重複する遺構はない。

《形状・規模》掘り込みは、径約35cmの平面不整円形と推定する。確認面からの深さは約５cmである。焼土は掘り込み内のやや北東よりに位置する。平面形は長軸約25cm、短軸約20cmの楕円形で西側が碗状に低く傾斜する。西側は焼土の上位に、炭化物を多く含む黒褐色土（１層）が平面楕円形に堆積する。

《覆土》４層に分層した。１層は炭化物を多く含む黒褐色土で、２層は粘土が被熱した焼土層である。３・４層は暗褐～黒褐色の粘質土である。

《出土遺物》遺物は出土していない。

《時期・性格》焼土が碗状に形成され、窪みに炭化した燃料材が堆積することから、その形状より、鍛冶炉と想定する。おそらく、碗形の掘り込みに粘土で炉床を構築して操業したものであろう。１層に多く混入する炭化物は、燃料材が埋没した結果と考えられる。時期は不明である。

ＳＮ3216炉跡（遺構第113図）

《位置・確認状況》高位面ＬＨ53・54区に位置する。地山上面で焼土面を確認した。

《重複》なし。

《形状・規模》掘り込みは長軸約1.8m、短軸約0.9mの隅丸長方形で、確認面からの深さは24cmである。焼土は掘り込み内の北西付近約0.3mの範囲に塊状に堆積する。掘り込み底面は根による攪乱が著しく、凹凸が激しい。掘り込みの北側と東側には、礫が抜けたと思われる痕跡を認めた。

《覆土》４層に分層した。１層は礫の抜け痕に堆積した土である。２層は焼土の堆積層である。３・４層は下部構造と推定する。

《出土遺物》なし。

《時期・性格》隅丸長方形の掘り込みに礫が伴うと想定すると、ＳＱＳ12石棺様組石と同種の遺構とも考えられるが、確認時すでに上位を削平されており、詳細は不明である。

ＳＮ3293炉跡（遺構第114図）

《位置・確認状況》中位面ＬＬ59区に位置する。ＥⅡ層上面で外径50cm、内径30cmの環状に広がる焼土を確認した。土層観察用のベルトを設定し周囲を掘り下げたところ、碗形の焼土面を確認した。さらに掘り進めたところ東側に新たな焼土面を検出し、土層断面より新旧２期の炉と判断した。

《重複》重複する遺構はない。

《形状・規模》新炉は長軸55cm、短軸45cmの平面不整円形である。確認面からの深さは15cmで底面は碗形である。焼土面は確認面からの深さ５cm～10cmの範囲で碗形に形成されている。

旧炉も、基本的な構造は新炉と同様である。長軸約85cm、短軸約50cmの平面楕円形で、確認面からの深さは約20cm、底面は南側に低く傾斜している。焼土面は、確認面からの深さ10cm～15cmの範囲で碗形に形成される。

《覆土》新炉は３層（１～３層）に分層した。１層は焼土塊が混入する黒色土である。２層は強く被熱した焼土層である。３層は炭化物が混入する黒色土である。２層と３層の境界は明瞭で、２層は粘土、３層は砂が混入した粘質土である。２層は炉床とするために粘土を貼ったものと推定される。３層は炉の下部構造として防湿のための炭化物と考えられる。

旧炉は９層（４～12層）に分層した。４～９層は焼土面の上に堆積した層で、新炉構築の際に若干の攪乱を受けている可能性が考えられる。10層は強く被熱した焼土層である。11～12層は炭化物が混入する黒褐色土である。新炉と同様に、10層は炉床面、11～12層は炉の下部構造と判断する。

《出土遺物》遺物は出土していない。

《時期・性格》焼土が碗状に形成され、窪みに炭化した燃料材が堆積することから、その形状より鍛冶炉と想定する。おそらく、碗形の掘り込みに防湿のための炭化材を充塡し、粘土で炉床を構築して操業したものであろう。１層に多く混入する炭化物は、燃料材が埋没した結果と考えられる。なお、関連する柱穴痕などの施設は確認できなかった。また鍛冶炉の可能性が考えられたため土の洗浄を行ったが、鉄滓や鍛造剥片など鍛冶に関連する遺物は出土しなかった。おそらく上位が削平され、当時の機能面が消失したためと推測する。

旧炉の炉床面（10層）より出土した燃料材の放射性炭素年代測定の結果では、較正年代calAD690～900（２σ）の値が得られており、古代の可能性が高い。

⑤石組炉

ＳＱＮ2025石組炉（遺構第115図）

《位置・確認状況》氾濫原上位面ＮＥ67区に位置する。重機による表土層以下を掘削中に、ＧⅡ層上面で長軸1.2m、短軸0.9m前後の不整楕円形に広がる焼土層および焼土塊・炭化物粒を多量に含む落ち込みを確認した。確認面には被熱した角礫が点在し、中には掘り込み壁沿いに立てたと判断できる例もあった。さらに当該落ち込み北端に接して、径0.9m前後の不整円形の落ち込みも存在していた。これらのことから、土坑を伴う石組炉状の遺構の可能性を想定して精査を行った。

《重複》ＳＫ2033土坑と重複し、本遺構がＳＫ2033土坑を掘り込んでいる。また、精査の結果、遺存状態は必ずしも良好ではなかったものの、上下２面の炉床面を確認し、本遺構は少なくとも二度の操業が行われた石組炉であったと判断した。以下では、それぞれ新期炉、旧期炉として報告する。

《形状・規模・覆土》**新期炉**　主軸方位が北北西方向を向く長方形もしくは長楕円形平面と推定できる。炉床は基盤の砂質土よりもシルト分に富むシルト質土を、厚さ２㎝前後に貼って構築している（６層）。炉床面はほぼ水平である。炉床直下には厚さ１㎝～２㎝の炭化物層（７層）が堆積する。炉床の防湿のための下部施設として炭化材を充塡したものと推定する。ただし、後述する旧期炉炉床（19層）直上に堆積することから、旧期炉操業時に炉内に遺存した燃料材を転用した可能性も想定し得る。炉壁は、遺存状態は不良であったが、一部壁際に炉石が残るほか、炉石の抜け痕（１～３層）が東西壁と南壁沿いに巡ることから、先のシルト質土を貼るとともに東西両壁と南壁には角礫を立て巡らして構築したものと推定できる。炉床・炉壁ともスサ等は混入していない。なお、炉北端側には炉壁および炉石抜け痕は確認できない。炉内は長軸約1.0m、短軸約0.5m、確認面から炉床面までの深さは約0.1mである。炉床直上には操業時の燃料材が遺存したと推定できる炭化材が厚さ３㎝～５㎝の薄層状に堆積する（５層）。その上位の炉内覆土（４層）は焼土塊を含むが、確認面より上位に立ち上がる炉壁と想定し得るような大形焼土塊は認められない。本炉は、現状の炉石上面が炉上端にほぼ相当し、炉の上面および南側は開放状態で操業した可能性が高いと推定する。

旧期炉　新期炉床の直下で、炉床の一部を確認した（19層）。炉床は主に土層断面で確認し、炉床の範囲など炉の詳細な形態は明瞭ではないが、現状から、炉床面はほぼ水平と判断できる。炉の掘り込み底面の北東半と西側および南側の一部に炉石の抜け痕の可能性のある窪みがあり、そのうちの北東側の窪みには炉石であった可能性のある角礫２点が埋められていることから、本炉も東西壁と南壁に炉石を巡らした石組炉であったと推定する。本炉は、新期炉と同様に北北西方向が主軸となり、掘り込み底面の窪みを炉石の抜け痕と想定すると、炉内は長軸約0.6m、短軸約0.4m前後と推定できる。なお、炉床下の掘り込み埋め戻し土（20～22層）は、一部焼土化している（21層）。旧期炉よりもさらに旧い炉床面、あるいは旧期炉炉床下を防湿のために空焚きした際の焼土面であった可能性があるが、特定できない。

《付属施設》旧期炉には北隣に南北約1.2m、東西約1.0mの不整円形平面で、確認面からの深さ約0.1mの浅い掘り込みが伴う。覆土中には焼土粒、炭化物粒を含み、旧期炉操業時に炉内に生成した炭化材等を掻き出して埋めたものと想定する。そのほか、周辺には本炉に伴う可能性のある柱穴等は未確認である。なお、ＳＫ2028土坑は本炉に伴う施設であった可能性がある。

《出土遺物》遺構内からの出土遺物はない。また、炉内および北隣掘り込み覆土は全て水洗選別を実施したが、廃滓・鍛造剥片等の炉操業に関わる可能性がある遺物は検出できなかった。

《時期・性格》新期炉操業時の燃料材と推定できる５層出土炭化材はブナ属と同定され、放射性炭素年代測定結果は、較正年代calAD1450～1650（２σ）である。本遺構は中世後半から近世前半に属する可能性が強いものと判断する。具体的な性格は不明である。

⑥柱穴様ピット

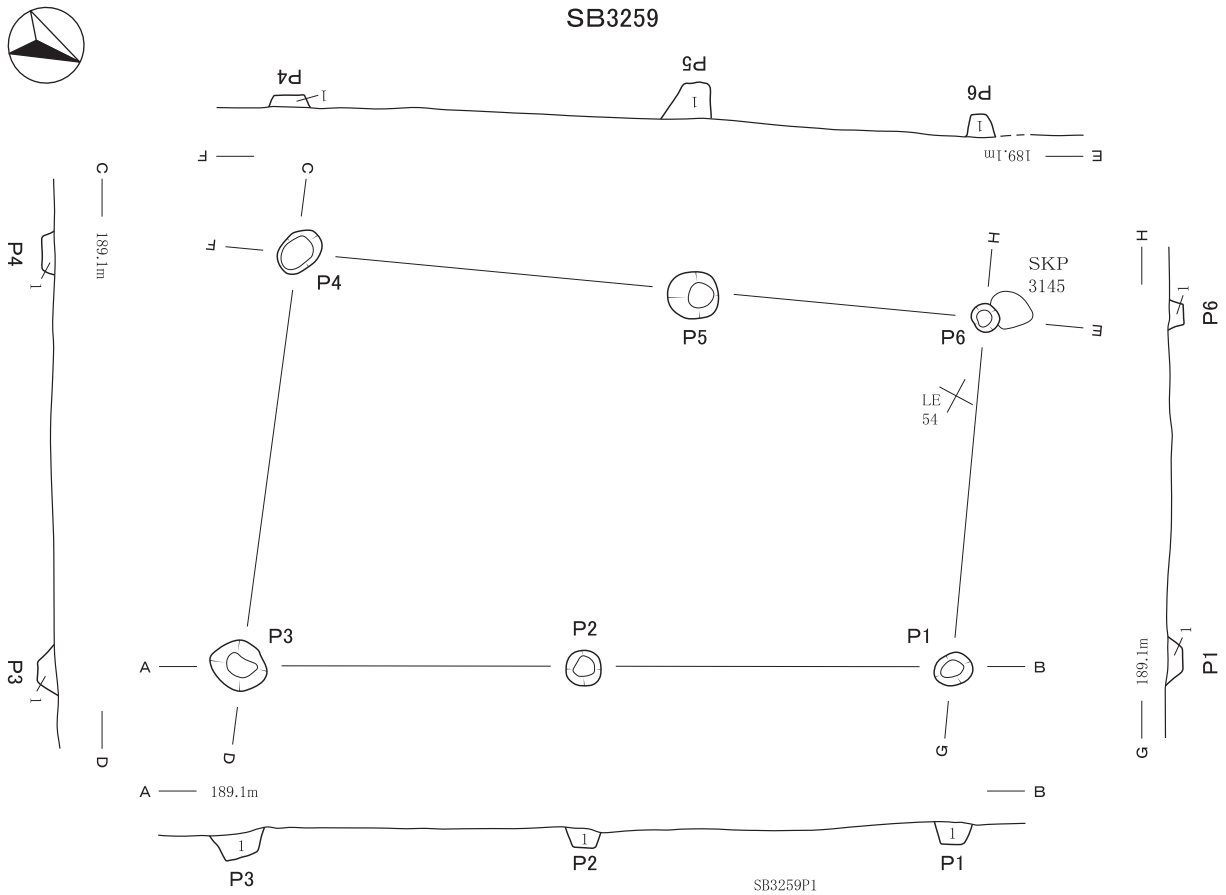
古代以降に属すると推定されるピットは125基を検出した。その多くが高位面北西部分に位置する。時期比定の根拠は「第４章 第２節 ２（１）⑥柱穴様ピット」に準拠する。一覧を第10表に記載した。

第10表　古代以降柱穴様ピット（１）

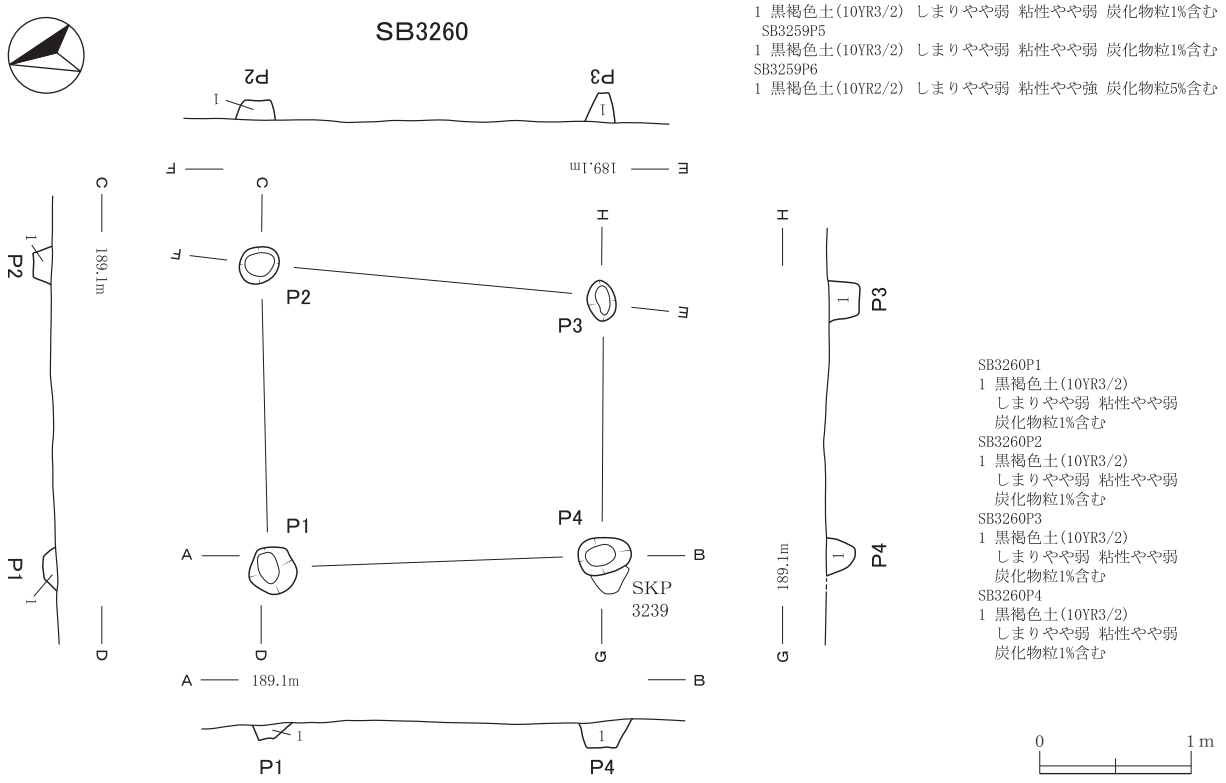
遺構番号	調査区	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	底面標高(m)	土色	重　複
SKP1021	LL72･73	楕円	0.38	0.24	0.19	184.01	10YR2/3	
SKP3104	LA･LB52	不整楕円	0.57	0.45	0.16	188.77	10YR2/3	
SKP3105	LA53	不整円	0.55	0.43	0.37	188.60	10YR3/1 ～ 3/3	SK3175より新しい
SKP3106	LA･LB53	不整	0.44	0.26	0.10	188.89	10YR2/3	SK3175より新しい
SKP3107	LA53	不整楕円	0.37	0.31	0.25	188.71	10YR2/3	
SKP3108	LB52	楕円	0.50	0.26	0.20	188.73	10YR2/3	
SKP3109	LB52･53	不整円	0.36	0.34	0.14	188.81	10YR2/3	
SKP3113	LD･LE53	楕円	0.39	0.25	0.08	188.74	10YR3/2	
SKP3124	LF55	不整楕円	0.52	0.40	0.10	188.88	10YR2/1 ～ 3/3	
SKP3127	LE52	楕円	0.26	0.22	0.17	188.63	7.5YR3/2	
SKP3130	LF54	不整楕円	0.39	0.34	0.17	188.82	10YR2/2	
SKP3131	LE53	不整楕円	0.25	0.22	0.19	188.62	10YR2/2	
SKP3133	LD･LE54	楕円	0.48	0.33	0.23	188.76	10YR2/2	
SKP3134	LD54	楕円	0.30	0.29	0.26	188.69	10YR2/2	
SKP3135	LD54	不整楕円	0.30	0.25	0.08	188.91	10YR2/2	
SKP3136	LD54	不整円	0.48	0.46	0.21	188.76	10YR2/2	
SKP3137	LD54	不整円	0.48	0.44	0.16	188.79	10YR2/2	
SKP3139	LD54	楕円	0.44	0.31	0.18	188.80	10YR2/2	
SKP3141	LE52	円	0.25	0.23	0.04	188.53	10YR2/3	
SKP3142	LD54	楕円	0.27	0.21	0.08	188.89	10YR2/2	
SKP3143	LD54	不整楕円	0.24	0.15	0.09	188.88	10YR2/2	
SKP3147	LE52･53	円	0.21	0.18	0.05	188.68	10YR2/2	
SKP3149	LC53	円	0.33	0.32	0.14	188.71	10YR2/2	
SKP3150	LC54	円	0.20	0.21	0.07	188.81	10YR2/2	
SKP3153	LE54	楕円	0.27	0.24	0.16	188.79	10YR2/2	
SKP3154	LD53	楕円	0.32	0.27	0.09	188.75	10YR2/2	SKP3155より新しい
SKP3156	LA53	円	0.17	0.16	0.05	188.87	10YR2/2	
SKP3160	LD54	円	0.20	0.20	0.08	188.88	—	
SKP3162	LF52･53	不整円	0.25	0.25	0.35	188.39	10YR2/2	
SKP3163	LG52	楕円	0.31	0.26	0.18	188.54	10YR2/2	SKP3164より新しい
SKP3164	LF･LG52	円	0.25	0.25	0.20	188.52	10YR2/2	SKP3163より旧い
SKP3165	LF52	楕円	0.29	0.21	0.16	188.59	10YR2/2	
SKP3166	LF52	不整楕円	0.27	0.21	0.11	188.58	10YR2/3	
SKP3167	LF52	円	0.28	0.26	0.15	188.53	10YR2/3	
SKP3169	LF53	楕円	0.28	0.26	0.16	188.74	10YR2/2	
SKP3170	LF52	不整円	0.22	0.20	0.20	188.54	10YR2/2	
SKP3177	LC53	円	0.31	0.29	0.13	188.74	10YR2/2	
SKP3178	LD52	楕円	0.35	0.27	0.16	188.81	10YR2/2	
SKP3180	LE52	楕円	0.29	0.23	0.24	188.57	10YR2/2	
SKP3184	LG54	不整	0.34	0.21	0.12	188.78	10YR2/2	
SKP3185	LG54	楕円	0.31	0.18	0.19	188.71	10YR2/2	
SKP3186	LG53	不整楕円	0.23	0.20	0.24	188.58	10YR2/2	
SKP3189	LG53	不整楕円	0.31	0.22	0.18	188.61	10YR2/2	
SKP3190	LG52	楕円	0.35	0.25	0.19	188.58	10YR2/2	
SKP3192	LG54	楕円	0.33	0.28	—	—	10YR2/3 ～ 3/4	
SKP3195	LG53	楕円	0.22	0.16	0.14	188.76	10YR2/2	
SKP3196	LG53	不整楕円	0.28	0.23	0.21	188.68	10YR2/2	
SKP3198	LG55	楕円	0.38	0.30	0.14	188.84	10YR2/2	
SKP3208	LF55	楕円	0.41	0.32	0.24	188.72	10YR2/2	
SKP3216	LH54･55	不整楕円	0.32	0.28	0.20	188.70	10YR2/2	SK3218より新しい
SKP3233	LG52	楕円	0.24	0.16	0.11	188.62	10YR2/2	
SKP3234	LG52	楕円	0.27	0.21	0.07	188.70	10YR2/2	
SKP3238	LB53	楕円	0.25	0.23	0.11	188.64	10YR2/2	
SKP3239	LB53	(円)	0.25	(0.25)	0.15	188.69	10YR2/2	SB3260P4より旧い
SKP3240	LC53	不整円	(0.54)	(0.50)	0.26	188.57	—	SKP3217より旧い
SKP3241	LC53	楕円	0.27	0.24	0.43	188.41	—	
SKP3243	LI53	楕円	0.28	0.19	0.09	188.66	10YR2/2	
SKP3244	LH53	楕円	0.26	0.22	0.12	188.61	10YR2/2	
SKP3245	LF52	円	(0.23)	0.20	0.20	188.50	10YR2/2	SKP3246より旧い
SKP3246	LF52	楕円	0.21	0.18	0.13	188.59	10YR2/2	SKP3245より新しい
SKP3247	LF53	円	0.42	0.42	0.10	188.75	—	
SKP3248	LE53	楕円	(0.24)	0.21	0.10	188.65	10YR2/3	SKP3249より旧い
SKP3249	LE53	楕円	0.33	0.25	0.10	188.66	10YR2/3	SKP3248より新しい
SKP3250	LH52	円	0.24	0.22	0.24	188.48	10YR2/3	
SKP3254	LD53	楕円	0.34	0.29	0.27	188.60	10YR3/2	
SKP3255	LC52	楕円	0.35	0.25	0.14	188.54	10YR3/2	
SKP3258	LD53	楕円	0.24	0.20	0.17	188.68	—	
SKP3276	LA53	楕円	0.39	0.35	0.25	188.60	10YR3/2	SK3101より新しい
SKP3279	LA54	不整楕円	0.29	0.27	0.44	188.41	10YR3/2	
SKP3280	LD55	円	0.26	0.26	0.12	188.52	10YR2/1	
SKP3283	LA56	不整	0.38	0.33	0.20	187.10	10YR3/2	
SKP3284	LB54	円	0.34	0.34	0.25	188.57	10YR3/2	

第10表　古代以降柱穴様ピット（２）

遺構番号	調査区	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	底面標高(m)	土色	重　複
SKP3300	LN60	不整	0.46	0.41	0.34	185.25	10YR2/1～4/6	
SKP3307	MC63	円	0.44	0.44	0.16	185.05	10YR2/2	
SKP3308	MC63	円	0.27	0.24	0.30	184.88	10YR2/2	
SKP4003	KP･KQ49	不整楕円	0.23	0.22	0.23	188.97	10YR3/3	
SKP4004	KQ48	楕円	0.26	0.24	0.18	189.01	10YR3/3	
SKP4006	KQ48	不整円	0.29	0.28	0.23	188.96	10YR2/3	
SKP4007	KQ48	不整	0.33	0.24	0.20	188.97	10YR3/3	
SKP4008	KQ･KR48	円	0.29	0.28	0.23	188.94	10YR2/3	
SKP4011	KR48	不整楕円	0.26	0.19	0.16	188.99	10YR2/3	
SKP4016	KR･KS48	不整円	0.24	0.24	0.17	189.01	10YR2/3	
SKP4021	KQ48	不整楕円	0.25	0.21	0.18	188.99	10YR2/3～3/3	
SKP4026	KS48	円	0.20	0.20	0.09	189.01	10YR2/3	
SKP4027	KS48	楕円	0.32	0.26	0.12	188.90	10YR3/3	
SKP4028	KS47･48	楕円	0.29	0.26	0.20	188.94	10YR3/4	
SKP4030	KO49	楕円	(0.22)	0.20	0.20	188.96	10YR2/2	SKP4031より新しい
SKP4031	KO49	円	0.22	0.21	0.18	188.96	10YR3/3	SKP4030より旧い
SKP4032	KO49	楕円	0.15	0.12	0.26	188.89	10YR3/3	
SKP4033	KN49	不整楕円	0.28	0.18	0.07	189.08	10YR3/3	
SKP4035	KM49	円	0.19	0.18	0.20	188.89	10YR3/4	
SKP4036	KS48	不整	0.19	0.14	0.10	188.90	10YR3/4	
SKP4038	KR47	楕円	0.18	0.10	0.12	189.04	10YR3/4	
SKP4039	KR48	不整楕円	0.28	0.20	0.19	188.94	10YR3/3	
SKP4040	KQ47	円	0.26	0.24	0.15	189.00	10YR4/4	
SKP4041	KQ48	円	0.17	0.17	0.11	189.08	10YR3/4	
SKP4042	KQ47	楕円	0.31	0.25	0.22	188.96	10YR3/2	
SKP4046	KS48	不整	0.34	0.25	0.19	188.92	10YR3/2	
SKP4047	KN49	楕円	0.29	0.24	0.07	189.05	10YR3/2	
SKP4051	KR47	楕円	0.16	0.13	0.09	189.07	10YR3/3	
SKP4055	KT48	楕円	0.17	0.14	0.09	188.73	10YR3/4	
SKP4057	KR47	不整楕円	0.30	0.26	0.13	189.03	10YR3/3	
SKP4058	KS47	不整	0.35	0.31	0.06	189.07	10YR3/4	
SKP4059	KQ48	不整	0.30	0.23	0.41	188.55	10YR3/2	
SKP4060	KS48	楕円	0.15	0.13	0.09	189.01	10YR3/3	
SKP4061	KS48	円	0.19	0.18	0.12	188.97	10YR3/4	
SKP4062	KS47	楕円	0.19	0.08	0.03	189.04	10YR4/4	
SKP5019	MR50･51	(円)	0.35	(0.35)	0.18	186.97	10YR2/1	SI5010より新しい
SKP5022	MR52	不整	0.65	0.65	0.69	186.51	7.5YR2/1	
SKP5023	MO50	楕円	0.27	0.25	0.37	187.21	7.5YR2/1	
SKP5026	MN52	不整楕円	0.24	0.23	0.08	187.17	7.5YR2/1	SI5013より新しい
SKP5027	MO52	円	0.32	0.30	0.19	187.28	7.5YR2/1	SI5013より新しい
SKP5028	MO51	円	0.32	0.30	0.43	187.16	7.5YR2/1	
SKP5031	MO50	円	0.35	0.34	0.31	187.21	7.5YR2/1	
SKP5034	MS50	不整円	0.33	0.32	0.06	187.09	7.5YR2/1	
SKP5042	MS51	円	0.26	0.25	0.08	187.00	10YR2/3	
SKP5043	MT52	楕円	0.25	0.23	0.08	187.00	10YR2/1～4/6	
SKP5044	MS52	円	0.25	0.25	0.07	186.77	10YR2/1～4/4	
SKP5045	MS52	円	0.30	0.29	0.12	187.02	10YR2/1～4/3	
SKP5047	MS51	楕円	0.31	0.26	0.16	186.93	10YR2/1～3/3	
SKP5048	MS･MT52	楕円	0.75	0.60	0.18	186.96	－	SI5005より新しい
SKP5049	MS51	楕円	0.37	0.32	0.08	187.00	10YR3/2	
SKP5051	MR･MS49	不整円	0.30	0.29	0.11	187.02	－	
SKP5065	MR50	楕円	0.18	0.16	0.27	186.72	10YR4/4	SI5010より新しい
SKP5066	MR50	楕円	0.20	0.17	0.28	186.69	10YR4/4	SKI5064より旧い
SB3259 P1	LD54	楕円	0.25	0.20	0.14	188.76	10YR3/2	旧SKP3257
SB3259 P2	LD53	円	0.25	0.24	0.15	188.72	10YR3/2	旧SKP3253
SB3259 P3	LD53	楕円	0.41	0.32	0.21	188.63	10YR2/2	旧SKP3179
SB3259 P4	LD52	楕円	0.31	0.24	0.09	188.70	10YR3/2	旧SKP3256
SB3259 P5	LD･LE53	円	0.32	0.30	0.25	188.61	10YR3/2	旧SKP3132
SB3259 P6	LE53･54	円	0.19	0.18	0.16	188.83	10YR2/2	旧SKP3144　SKP3145より新しい
SB3260 P1	LB53	不整円	0.33	0.31	0.12	188.71	10YR3/2	旧SKP3168
SB3260 P2	LB53	楕円	0.29	0.24	0.12	188.65	10YR3/2	旧SKP3252
SB3260 P3	LB53	楕円	0.26	0.18	0.19	188.60	10YR3/2	旧SKP3251
SB3260 P4	LB53	(不整楕円)	0.33	0.22	0.19	188.63	10YR3/2	旧SKP3110　SKP3239より新しい
SKI5064 P1	MR50	楕円	0.32	0.25	0.21	186.81	10YR3/3	旧SKP5059
SKI5064 P2	MR50	楕円	0.30	0.20	0.10	186.84	10YR3/3	旧SKP5060
SKI5064 P3	MR50	楕円	0.32	0.23	0.19	186.80	10YR3/3	旧SKP5061
SKI5064 P4	MR50	楕円	0.29	0.20	0.20	186.80	10YR3/3	旧SKP5062
SQS12 P1	LF51	円	(0.26)	(0.24)	0.15	188.53	10YR2/2	
SQS12 P2	LF51	楕円	0.28	0.25	0.43	188.41	10YR2/2	
SQS12 P3	LG51	円	(0.33)	0.30	0.28	188.39	10YR2/2	
SQS12 P4	LF51	楕円	0.30	0.24	0.27	188.35	10YR2/2	



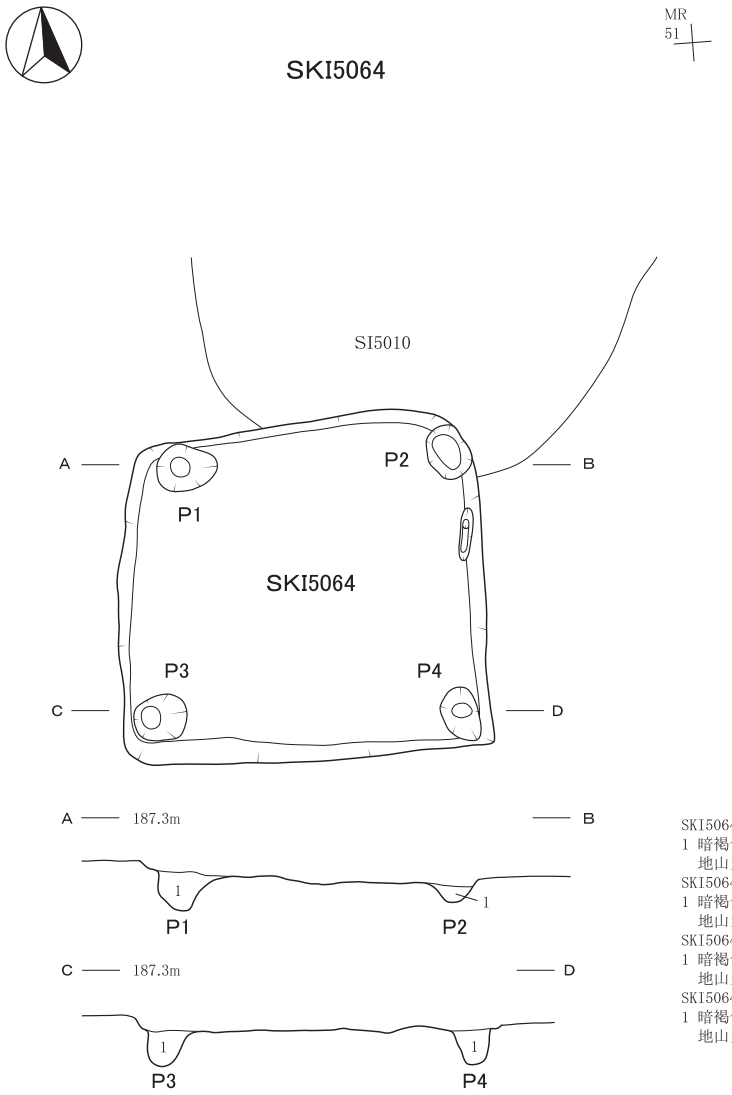
SB3259P1
1 黒褐色土(10YR3/2) しまりやや弱 粘性やや弱 炭化物粒1%含む
SB3259P2
1 黒褐色土(10YR3/2) しまりやや弱 粘性やや弱 炭化物粒1%含む
SB3259P3
1 黒褐色土(10YR2/2) しまりやや弱 粘性やや強 炭化物粒5%含む
SB3259P4
1 黒褐色土(10YR3/2) しまりやや弱 粘性やや弱 炭化物粒1%含む
SB3259P5
1 黒褐色土(10YR3/2) しまりやや弱 粘性やや弱 炭化物粒1%含む
SB3259P6
1 黒褐色土(10YR2/2) しまりやや弱 粘性やや強 炭化物粒5%含む



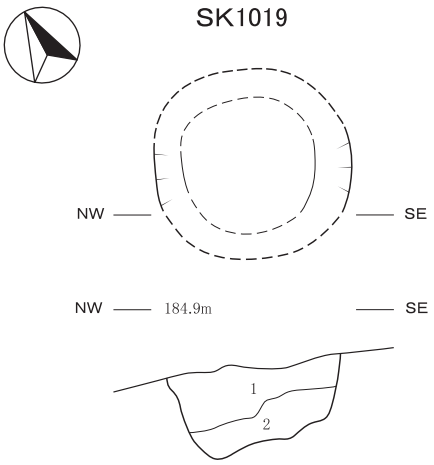
SB3260P1
1 黒褐色土(10YR3/2)
しまりやや弱 粘性やや弱
炭化物粒1%含む
SB3260P2
1 黒褐色土(10YR3/2)
しまりやや弱 粘性やや弱
炭化物粒1%含む
SB3260P3
1 黒褐色土(10YR3/2)
しまりやや弱 粘性やや弱
炭化物粒1%含む
SB3260P4
1 黒褐色土(10YR3/2)
しまりやや弱 粘性やや弱
炭化物粒1%含む

0　1m

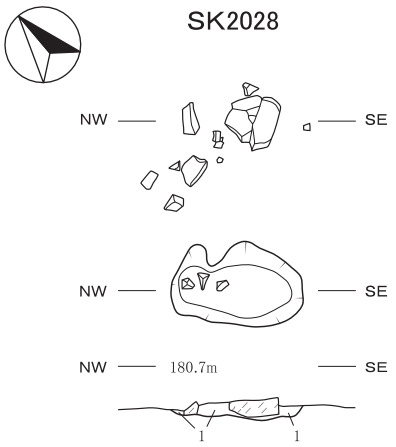
第111図　SB3259・3260堀立柱建物跡



SKI5064P1
1 暗褐色土(10YR3/3) しまりやや強 粘性やや弱
地山土塊φ15～50mm30%含む
SKI5064P2
1 暗褐色土(10YR3/3) しまりやや強 粘性やや弱
地山土塊φ15～50mm30%含む
SKI5064P3
1 暗褐色土(10YR3/3) しまりやや強 粘性やや弱
地山土塊φ15～50mm30%含む
SKI5064P4
1 暗褐色土(10YR3/3) しまりやや強 粘性やや弱
地山土塊φ15～50mm30%含む



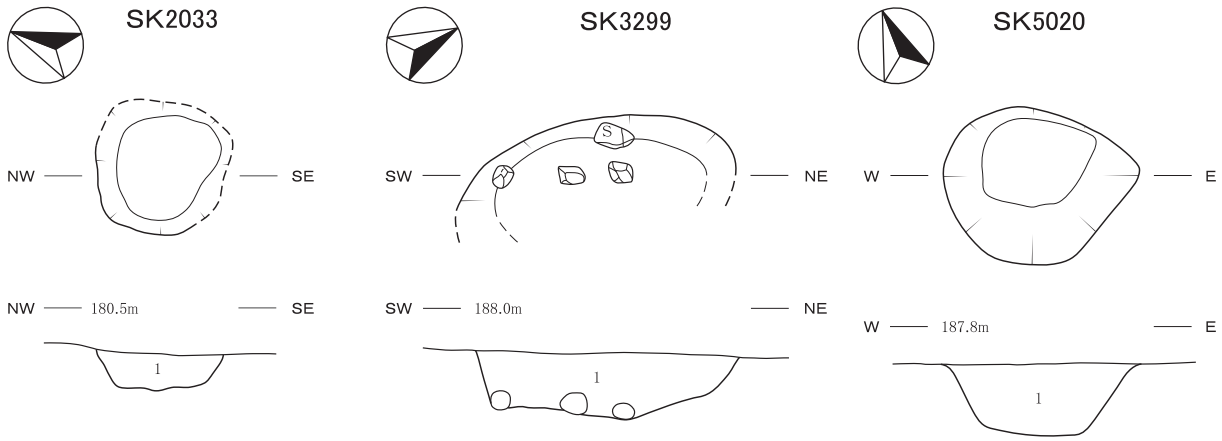
SK1019
1 褐色土(10YR4/4) しまりやや弱 粘性強
地山土塊φ10～20mm20%、地山土粒5%、炭化物粒微量含む
2 黒褐色土(10YR2/3) しまりやや強 粘性やや強
地山土塊φ400mm25%、地山土粒1%含む



SK2028
1 暗褐色砂質土(10YR3/4) しまり中 粘性弱 細砂
礫φ10mm2%含む

0　1m

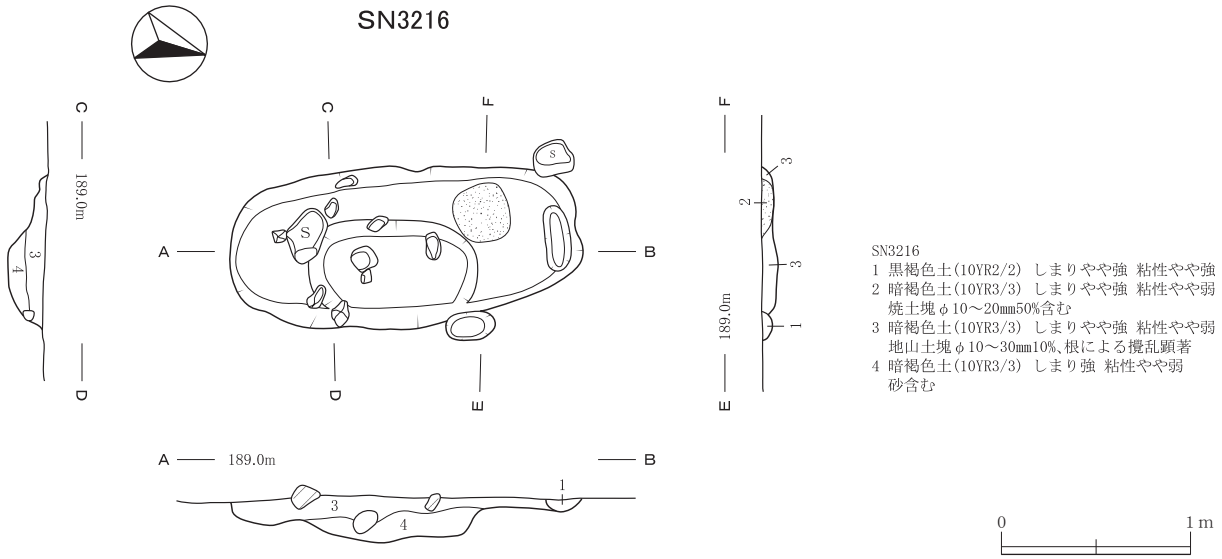
第112図　ＳＫＩ5064竪穴状遺構・ＳＫ1019・2028土坑



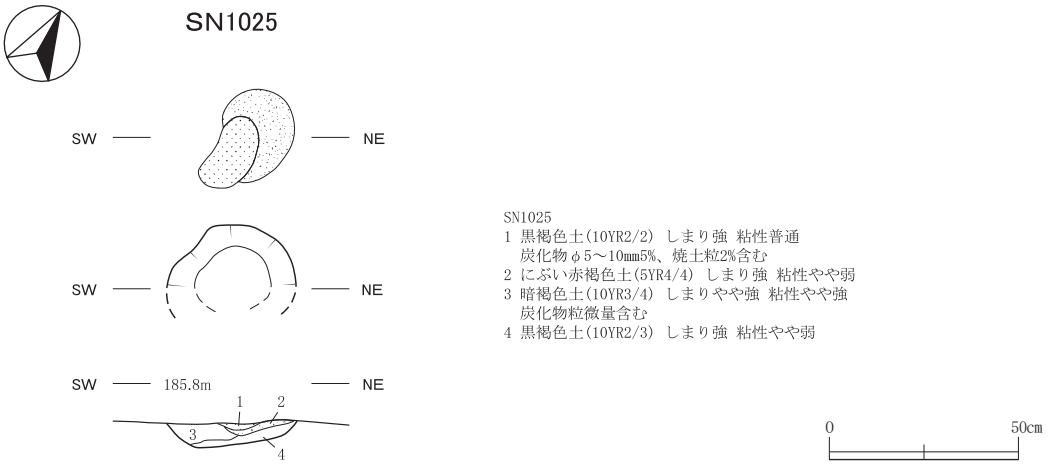
SK2033
1 暗褐色砂質土(10YR3/3)
しまり中 粘性弱 細砂
炭化物粒1%含む

SK3299
1 黒褐色土(10YR3/2)
しまりなし 粘性やや強 シルト
地山土粒1%、炭化物φ5～10mm1%、
小～中礫少量含む

SK5020
1 黒褐色土(7.5YR3/2) しまりやや弱 粘性やや強
地山土10%、地山砂質土5%、炭化物粒2%、
礫φ20～50mm5%含む



SN3216
1 黒褐色土(10YR2/2) しまりやや強 粘性やや強
2 暗褐色土(10YR3/3) しまりやや強 粘性やや弱
焼土塊φ10～20mm50%含む
3 暗褐色土(10YR3/3) しまりやや強 粘性やや弱
地山土塊φ10～30mm10%、根による攪乱顕著
4 暗褐色土(10YR3/3) しまり強 粘性やや弱
砂含む

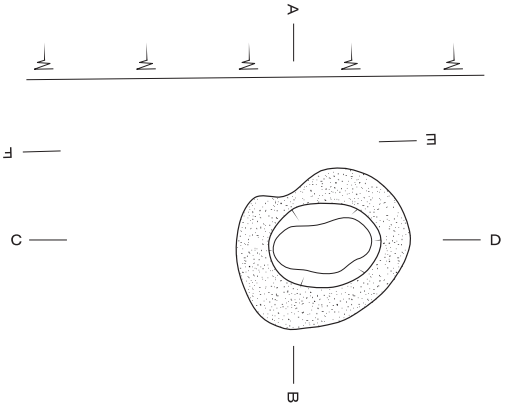


SN1025
1 黒褐色土(10YR2/2) しまり強 粘性普通
炭化物φ5～10mm5%、焼土粒2%含む
2 にぶい赤褐色土(5YR4/4) しまり強 粘性やや弱
3 暗褐色土(10YR3/4) しまりやや強 粘性やや強
炭化物粒微量含む
4 黒褐色土(10YR2/3) しまり強 粘性やや弱

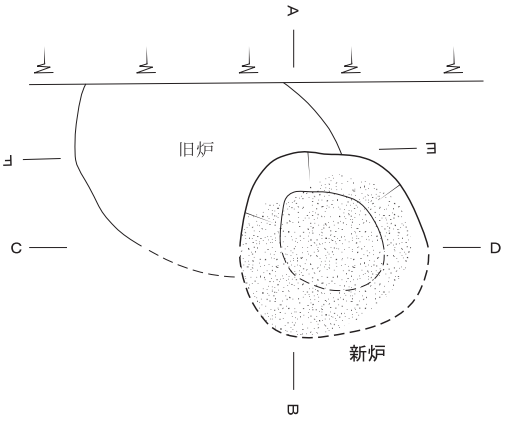
第113図　ＳＫ2033・3299・5020土坑・SN1025・3216炉跡

SN3293

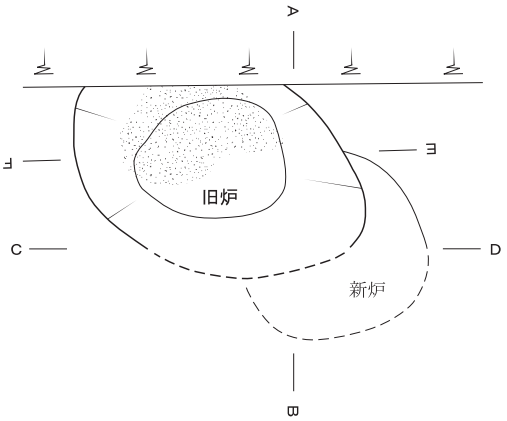
上 面

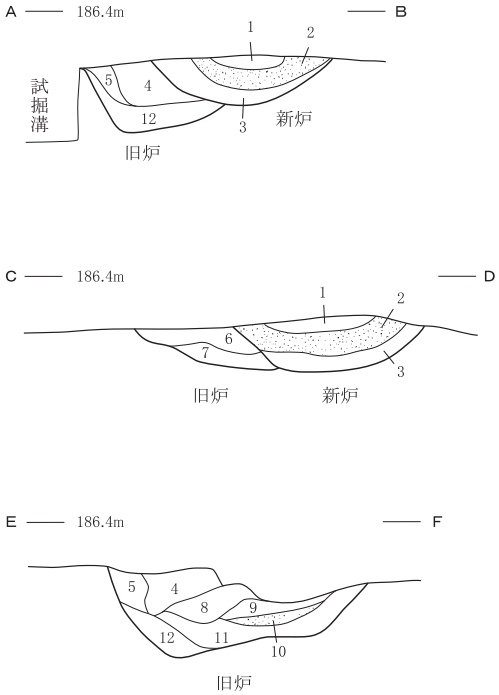


新 炉



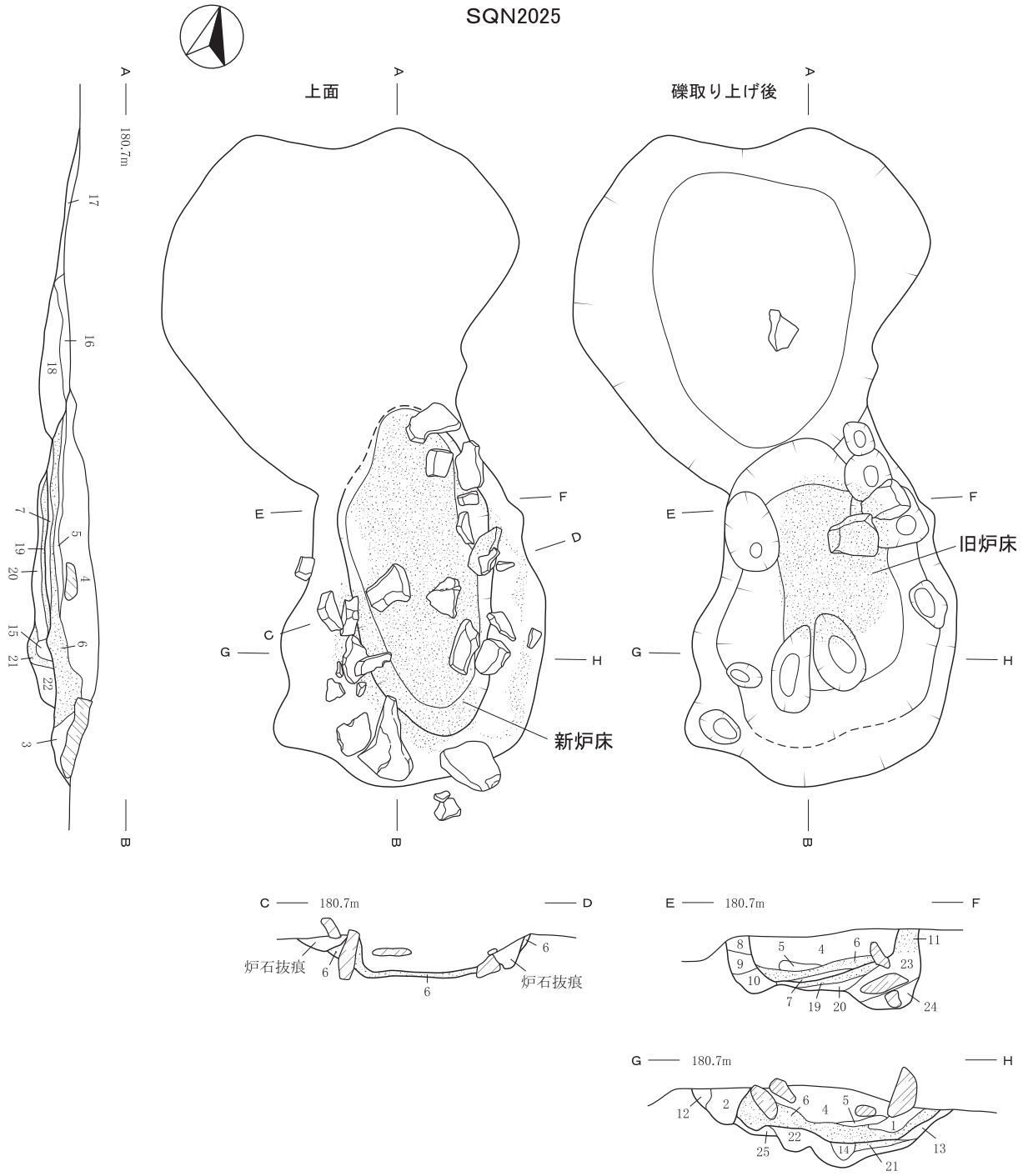
旧 炉





SN3293新炉
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり強　粘性弱
　焼土塊φ50mm10%、炭化物多く含む
2　赤褐色土(5YR4/6)　しまりやや強　粘性弱
　黒褐色土塊φ50～90mm10%、礫φ15mm3%含む　焼土
3　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性やや弱
　炭化物φ5～30mm10%、焼土塊φ12～24mm7%含む
SN3293旧炉
4　黒色土(10YR2/1)　しまりやや弱　粘性弱
　焼土粒1%、炭化物粒1%含む
5　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性弱
　テフラ40%含む
6　黒褐色土(10YR3/1)　しまりやや弱　粘性弱
　炭化物少量、焼土塊φ10mm3%、礫φ10mm含む
7　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性やや強
　炭化物粒10%含む
8　黒褐色土(10YR2/2)　しまりなし　粘性弱　細砂
　焼土粒20%含む
9　にぶい赤褐色土(5YR4/4)　しまりなし　粘性弱　細砂
　黒褐色土(7.5YR2/2)粒5%含む
10　焼土
11　黒色土(10YR1.7/1)　しまりやや弱　粘性中
　炭化物含む
12　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性やや弱
　炭化物粒1%含む

第114図　ＳＮ3293炉跡



SQN2025
1 暗褐色土(10YR3/3) しまり中 粘性中
炭化物粒少量含む ※新期炉炉石抜け痕
2 黒褐色砂質土(10YR2/2) しまり中 粘性弱
※新期炉炉石抜け痕
3 暗褐色砂質土(10YR3/3) しまり中 粘性弱
焼土粒少量含む ※新期炉炉石抜け痕
4 暗褐色砂質土(10YR3/4) しまり弱 粘性弱
焼土塊中量、炭化物粒中量含む
5 炭化物層 暗褐色砂質土(10YR3/4)
6 明赤褐色焼土(5YR5/8) しまり中 粘性弱
炭化物粒少量含む ※新期炉炉壁～炉床
7 炭化物層 暗褐色砂質土(10YR3/4)
8 暗褐色砂質土(10YR3/4) しまり強 粘性弱
焼土粒少量、炭化物粒少量含む
9 褐色砂質土(10YR4/4) しまり中 粘性弱
炭化物粒中量含む
10 暗褐色砂質土(10YR3/4) しまり中 粘性弱
焼土粒中量含む
11 褐色砂質土(7.5YR4/4) しまり強 粘性弱
※焼土化
12 暗褐色砂質土(10YR3/4) しまり中 粘性弱
13 暗褐色砂質土(10YR3/4) しまり中 粘性弱
14 暗褐色砂質土(10YR3/4) しまり中 粘性弱
炭化物粒少量含む ※旧期炉炉石抜け痕か
15 暗褐色砂質土(10YR3/4) しまり中 粘性弱
炭化物粒少量含む ※旧期炉炉石抜け痕か
16 黒褐色砂質土(10YR2/3) しまり中 粘性弱
黄褐色砂質土塊(10YR5/6)少量、炭化物粒少量含む
17 暗褐色砂質土(10YR3/4) しまり中 粘性弱
炭化物粒中量含む
18 暗褐色砂質土(10YR3/4) しまり中 粘性中
焼土粒多量、炭化物粒中量含む
19 明赤褐色焼土(5YR5/6) しまり中 粘性弱
炭化物粒少量含む ※旧期炉炉床
20 暗褐色砂質土(10YR3/3) しまり弱 粘性弱
炭化物粒中量含む
21 褐色砂質土(7.5YR4/4) しまり強 粘性弱
※焼土化
22 暗褐色砂質土(10YR3/3) しまり弱 粘性弱
23 暗褐色土(10YR3/4) しまり中 粘性中
24 暗褐色砂質土(10YR3/4) しまり中 粘性中
黄褐色砂質土(10YR5/6)少量含む
25 暗褐色砂質土(10YR3/4) しまり弱 粘性弱

0　50cm

第115図　ＳＱＮ2025石組炉

第３節　ＳＱＳ12石棺様組石の再調査について

（１）はじめに

ＳＱＳ12石棺様組石は、平成９年度に森吉山ダム工事用道路建設に伴って行われた発掘調査で検出された遺構である。縄文時代の石棺の可能性が指摘され、資料的価値が高いと判断されたことを受け、現地で保存されていた。石棺様組石のある場所はダムが湛水しても水面下にならないということで、1.5mの高さまで盛土をし、工事用道路が建設された。しかしその後、深渡遺跡を含む周辺一帯がダムの資材採取地と決まったことから石棺様組石の現地保存は不可能となり、今回再調査を行うこととなった。

前回の調査では遺構内からの遺物の出土はなく、周辺の遺構・遺物より縄文時代後期初頭と推定されていた。しかし放射性炭素年代測定ではAD1400年代の値が示されており、決定的な資料は得られていない。また、性格も大館市矢石館遺跡などの例より石棺様組石とされたが、炉とする考えも提示されており、不確定であった。(註１)そのため今回の再調査では本遺構の時期・性格を検証することを目的とした。

（２）調査の記録

今回の調査は工事用道路の一部分、ＳＱＳ12が位置する約４m四方を掘削し行った。前回の調査終了後、遺構の保存に際しては、遺構周囲南北4.0m×東西2.5mの範囲に土のうを0.6mの高さまで積み、内側に砂を充塡したのちに、全体をブルーシートで覆い、クラッシャーラン－80で工事用道路の高さまで埋め戻すという方法がとられていた。このため今回の調査に当たっては、工事用道路上面から砂上面までは重機で掘削し、砂は人力で掘り下げ、遺構を確認した。前回の調査では保存を目的としたため、蓋石を除き、遺構を形成する礫は取り上げていない。遺構の保存状態は良好で、土圧による変形、劣化などは見受けられなかった。

遺構は長軸1.70m、短軸0.82mの平面長方形の掘り込み壁面に沿って、長方形に礫が23個据えられる。底面は平坦だが、礫の下部は部分的に礫が沈み込んで窪みが形成されている。掘り込みの壁は開いて立ち上がる。石組内の底面法量は長軸1.54m、短軸0.37mである。両長軸には0.30m～0.63mの扁平な玄武岩をそれぞれ４個据え（Ｓ２～Ｓ５、Ｓ11～Ｓ14）、長軸北側には、礫の外側に接して小さめの礫（Ｓ15～Ｓ23）を配する。長軸の礫は壁に貼り付けるように据えられており、西側はほぼ直立し、東側は上方にやや開く。裏込土（１層）は濁りの強い暗褐色土である。両長軸を構成する８個の玄武岩には上面から内面にかけて強い被熱痕があり、劣化が著しい。また、Ｓ２～Ｓ４、Ｓ11～12には、上面から内面にかけてタール状の付着物が認められる。外側に接する小礫も、一部に被熱痕、タール状付着物が認められるものが多い。短軸に使用される礫は安山岩で北側に１個（Ｓ１）、南側に４個（Ｓ６～Ｓ９）である。北側の礫は上面にタール状の付着が認められる。南側はＳ６に若干の被熱痕を、Ｓ７にタール状の付着物を確認した。焼土面は底面２か所と掘り込み肩部１か所で確認した。底面の焼土はＳ２の下とＳ13北側に、掘り込み肩部の焼土はＳ17外側に位置する。いずれも被熱状態は弱く、厚さは２㎝程度である。また、南側短辺Ｓ６下面では炭化物の広がりを検出した。

ＳＱＳ12の長軸上南側には平成９年度調査の際に検出されたＳＫ16土坑が位置する。今回精査の結果、ＳＱＳ12とＳＫ16を繋ぐ形で新たに掘り込みを確認した。掘り込みは北側は溝状を呈し、南側は一段低く隅丸方形の土坑状を呈する。覆土が連続して堆積することから、これらは遺構の重複ではなく一

連のものと判断した。また、溝状の底面には５か所で白色粘土を確認した。おそらく底面に貼り付けられたものと判断する。壁際のみで検出したが、本来全面に貼り付けられていた可能性も否定できない。北側はＳＱＳ12の南側短辺に連続し、ＳＱＳ12南側短辺に位置する礫（Ｓ６～Ｓ９）は、この掘り込み底面に据えられていた。南側はＳＫ16へ連続する。ＳＱＳ12およびＳＫ16は前回調査で覆土が掘削されており、この掘り込みとの重複関係は明確ではないが、これらの遺構はＳＱＳ12の長軸上に直線的に位置することから、ＳＱＳ12からＳＫ16までが一連の遺構であった可能性が高いと推定する。

また今回、ＳＱＳ12を囲むように４基の柱穴を新たに検出した。１間×１間の掘立柱建物跡で、柱間は10尺×７尺（約3.3m×約2.1m）である。柱穴は0.3m前後の平面円～楕円形で、底面標高は188.5m前後、覆土は地山塊を多く含む黒褐色土である。今回は限られた範囲での調査であり、柱列は範囲外の南側へ延びる可能性があるが、前回の調査では対応する柱穴は確認されていない。しかしながら、今回確認した柱穴も前回調査では確認されなかったことから、未確認の柱穴が存在する可能性は否定できない。柱列が南側へ延びると仮定すると、主軸方向はＮ－13°－Ｅであり、ＳＱＳ12の主軸方向とほぼ同じであることからこの掘立柱建物跡はＳＱＳ12に伴う上屋である可能性が高いと考えられる。遺物は縄文土器の小片１点と剥片類が１点出土した。小片で摩滅していることから、混ざり込みと推定する。

（３）遺構の時期と性格

本遺構は前回調査で縄文時代後期初頭の石棺様組石の可能性が指摘されている。今回の調査では新たな知見が得られており、次の３点である。①ＳＱＳ12は南側に溝で繋がった土坑（ＳＫ16）を伴う形態で機能した可能性が高い。②ＳＱＳ12には掘立柱建物の上屋が伴う可能性が高い。③両短辺に据えられた礫は、被熱痕が一部にしか認められないこと、南側の礫の下面より炭化物層が検出されたことから、被熱時には短辺上に礫はなく、最終段階に据えられたと判断できる。これらの点を踏まえ、本遺構の時期と性格について再考察を行う。

まず時期について、今回も時期を決定づけるような遺物は出土せず、出土遺物による時期決定は不可能であった。また、遺構内から採取した５点の炭化物（第117図試料11～15）について、放射性炭素年代測定を行った。結果は第５章に詳しいが、試料により年代のばらつきが認められる。このうちもっとも信用度の高いのはAD1400年代を示した試料13である。この試料13を含む炭化物層は、南側短辺を構成するＳ６の直下、かつ底面直上に位置し、前述の知見③から、当遺構の機能時に形成されたと判断する。また、平成９年度調査の際に行った放射性炭素年代測定でも15世紀の値が示されており、矛盾しない。よって、今回の調査の結果、本遺構の機能時期を縄文時代後期初頭とするこれまでの考えを、十分否定できる資料は得られなかったものの、本遺構は15世紀代の所産である可能性が高いと判断する。

次に性格について、今回の調査においても骨片、副葬品など石棺墓としての性格を裏付ける資料は得られなかった。しかし、今回新しく得られた所見①・②から、石棺墓としての可能性は低く、炉の可能性が高いと推定する。炉と仮定すると、機能時には両短辺の礫は据えられておらず、南側短辺には炭化物層が広がることから焚口と想定でき、北側短辺は浅く掘り込まれていることから、煙道もしくは通気口と考えられる。南側に付随する土坑は焚口より溝で繋がることから、掻き出した灰などを一時的に溜めるなどの用途が考えられよう。上部構造については不明だが、長軸方向に据えられたＳ17の外側に焼土面を確認したことから、上部構造があると仮定すると、礫の外側を基部とし構築されていたと考えられる。しかし、その痕跡は確認していない。短辺側に据えられた安山岩は、炉廃絶時に閉塞石として置かれ

たものと推測する。また、平成９年度調査の際に確認された蓋石は、炉廃絶後の埋め戻し行為と連続して据えられていることから、炉廃絶に伴う儀礼的な意味合いがあった可能性が考えられる。

（４）他の調査事例

前回調査が行われた平成９年度以降、森吉山ダム関連遺跡群の調査が進み、ＳＱＳ12石棺様組石に類似する形態の遺構が、本遺跡の例も含めて４遺跡６基確認されている（第11表）。これらの遺構の共通点として、長方形の掘り込みの両長軸に扁平な角礫が貼り付けるように据えられていること、礫の内面と上面が強く被熱していることがあげられる。また、掘立柱建物の上屋構造が伴うものや、長軸方向に土坑を伴うものなどの例が認められる。これらの遺構はいずれも時期を決定づける遺物が出土していないが、４遺跡で行われた放射性炭素年代測定では13世紀末～ 16世紀の値が示されている。向様田Ｅ遺跡のＳＱＮ05は、古代の竪穴住居跡より新しい時期に構築されていることから、これらの遺構は放射性炭素年代測定の示すとおり中世の所産と判断する。また、性格については被熱痕が著しく、炉の可能性が指摘されている。ただし、鉄滓、著しい量の炭化物、骨片などその用途が特定できるような遺物は出土しておらず[（註２）]、用途は不明である。

（５）まとめ

今回の再調査で新しい所見が得られた結果、当遺構は縄文時代後期初頭の石棺墓的な性格を持つものではなく、中世の炉である可能性が高いと推定する。平成９年度以降、当該地域で発見された数々の類例もその根拠となろう。しかし、必ずしもこれまでの説を十分に否定しうるだけの資料が得られたわけではなく、中世の炉という説も可能性の提示にすぎない。今後さらなる類例の増加を待ちたい。

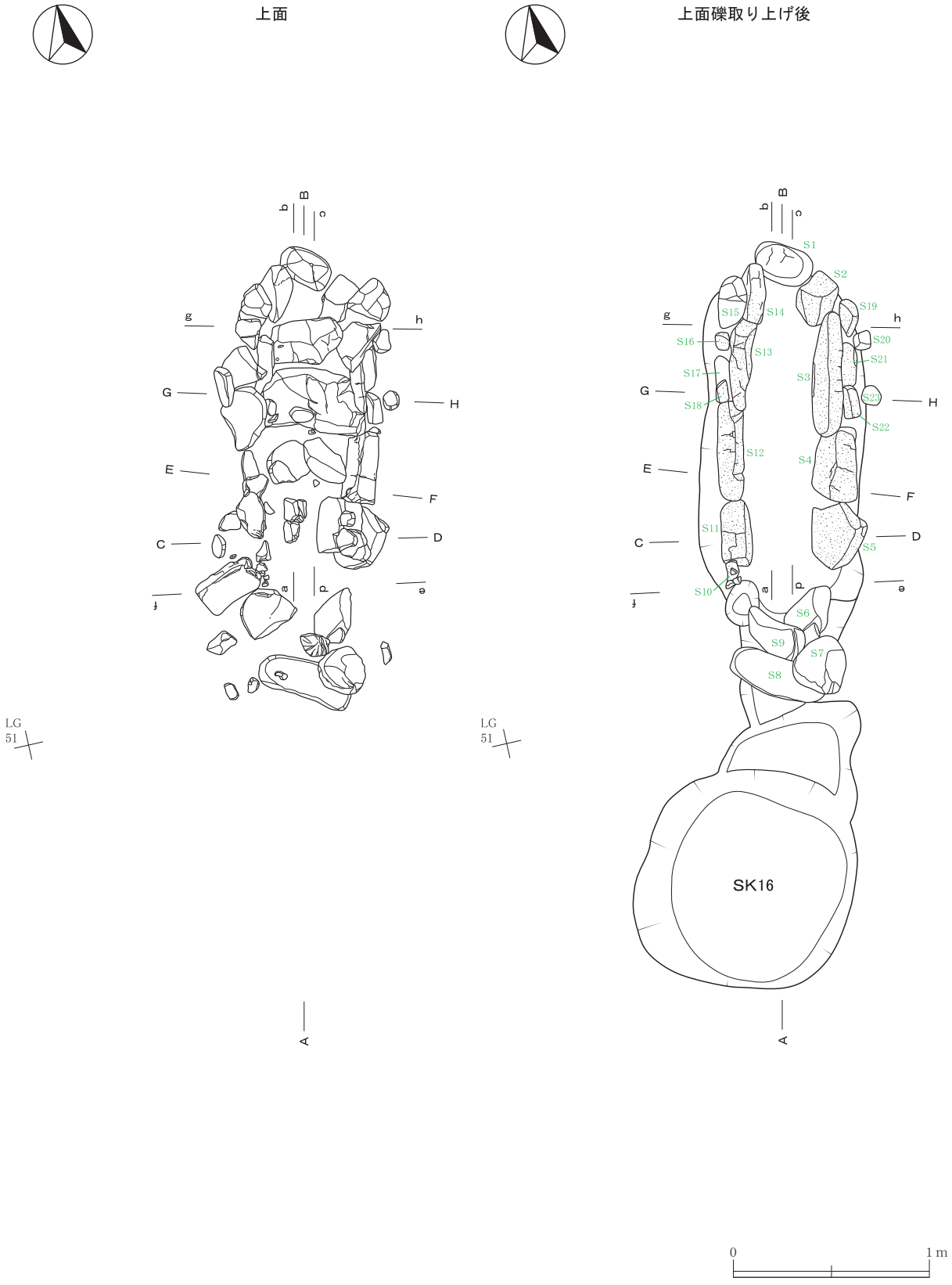
註１　秋田県教育委員会　『深渡遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ｉ－』「第６章　まとめ」
　　秋田県文化財調査報告書第286集　1999（平成11）年

註２　向様田Ｅ遺跡ＳＱＮ05では調査時に石組内の覆土の土壌洗浄を行っている。

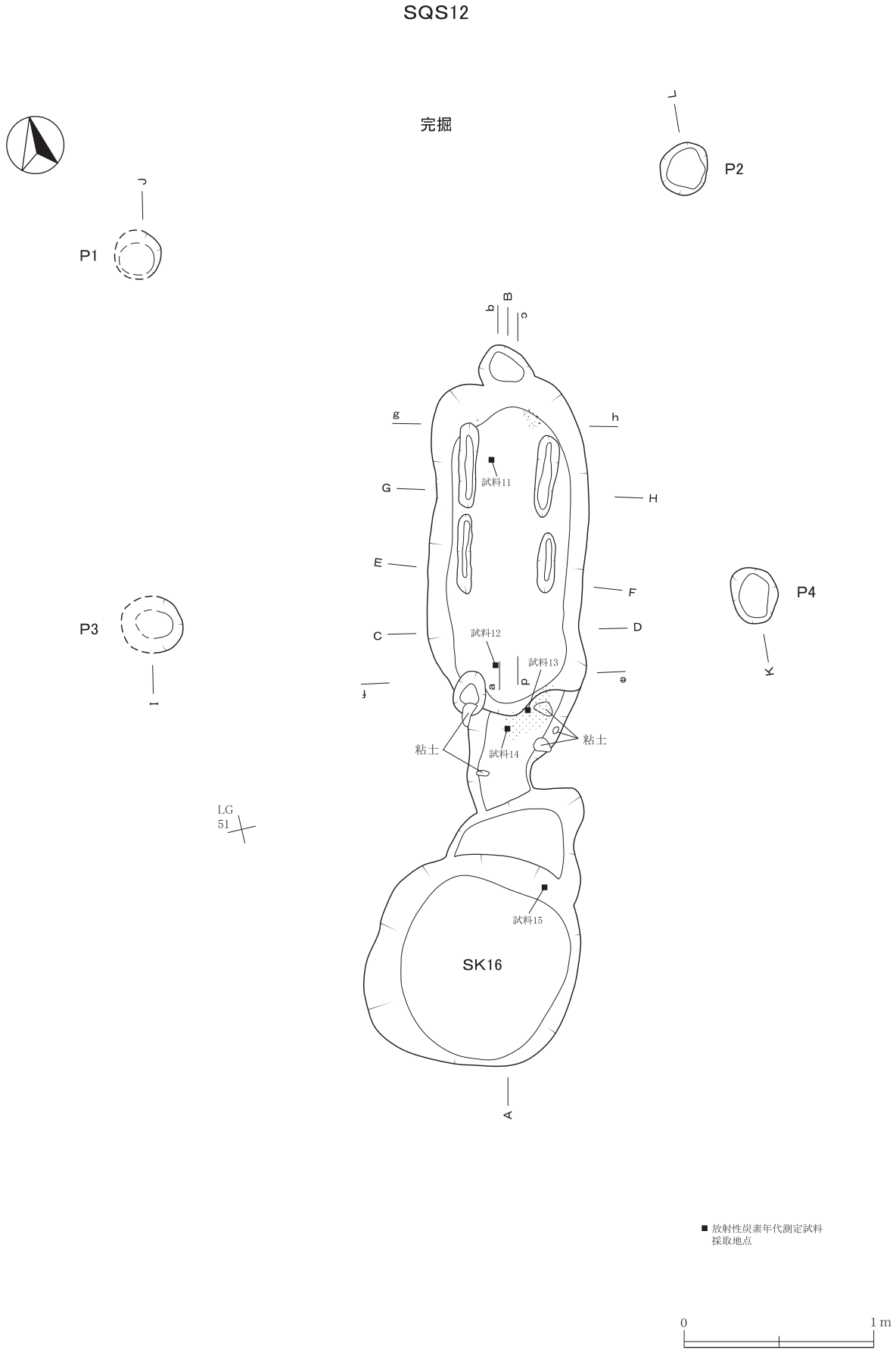
第11表　ＳＱＳ12石棺様組石類例

遺跡名	遺構番号	法量（m） ※１石組内底面の法量である ※２残存値については（）とする	礫構築部	付属施設	補正^{14}C 年代	文献	備考
諏訪岱Ⅱ	SX01	(1.2)×0.5×0.3	両長軸	土坑		『諏訪岱・柳田・冷水岱』 1994.3　森吉町教育委員会	
諏訪岱Ⅱ	SX02	(1.2)×0.5×0.2	両長軸、片側短軸			『諏訪岱・柳田・冷水岱』 1994.3　森吉町教育委員会	
深渡	SQN2025	1.0×0.4×0.2	両長軸	浅い掘り込み	350±40	本書	操業２回
深渡	SQS12	2.34×0.85×0.25	両長軸	土坑 掘立柱建物跡	580±40ほか	本書 『深渡遺跡』1999.3　秋田県教育委員会	廃絶時に短軸に礫据える
向様田Ｅ	SQN05	1.3×0.7×0.25	両長軸	土坑	680±30	『向様田Ｂ遺跡・向様田Ｃ遺跡・向様田Ｅ遺跡』 2003.3　秋田県教育委員会	
桐内Ａ	SJ13	1.7×0.7×0.20	焼土面上面に置かれる窯壁の芯材？	浅い掘り込み	760±40	『桐内Ａ遺跡』 2002.3　秋田県教育委員会	

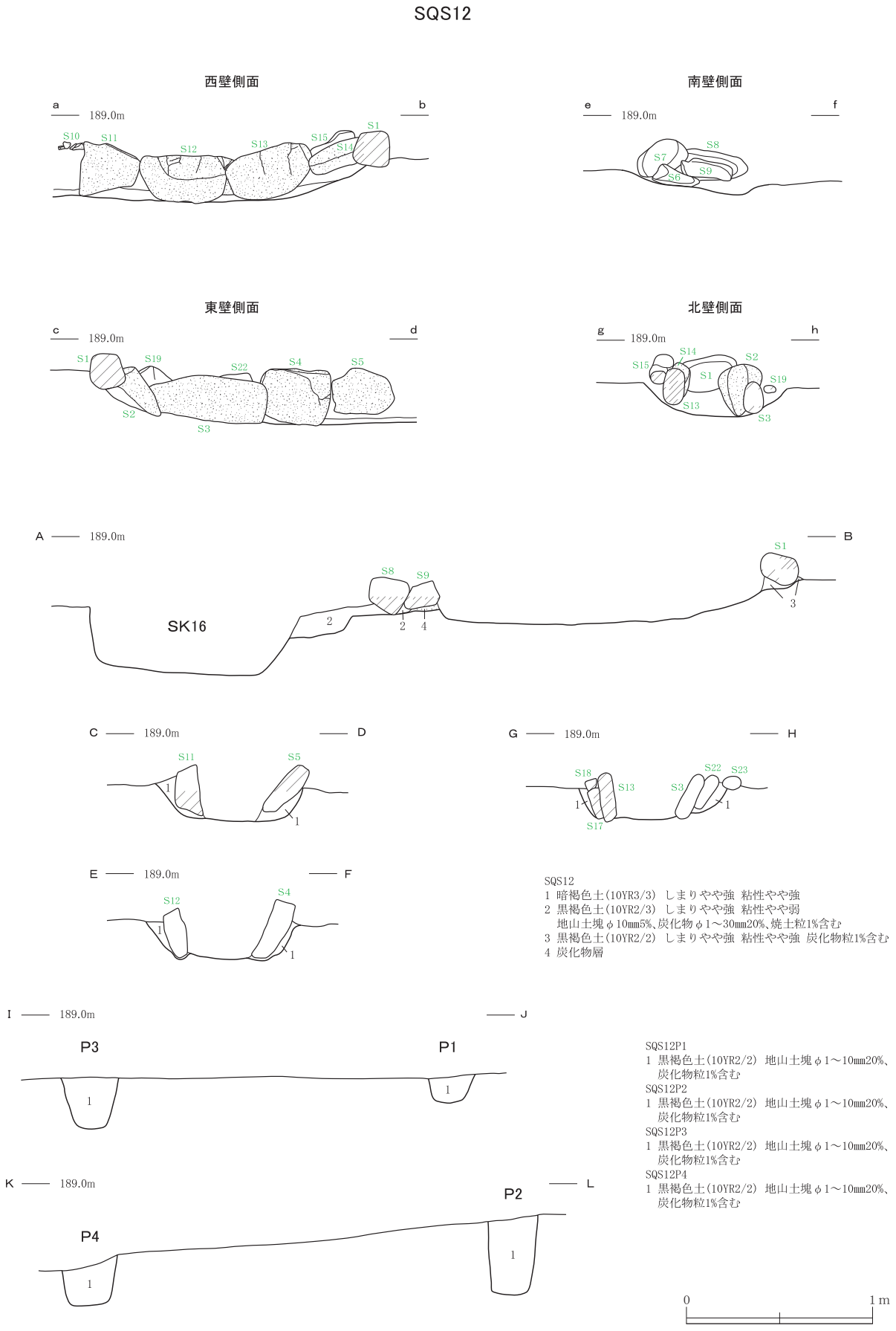
SQS12



第116図　ＳＱＳ12石棺様組石（１）



第117図　ＳＱＳ12石棺様組石（２）



第118図　ＳＱＳ12石棺様組石（３）

第５章　自然科学分析

第１節　放射性炭素年代測定

株式会社古環境研究所

１　試料と方法

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
№.１	ＳＩ5001	炭化材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄, 石墨調整	ＡＭＳ
№.２	ＳＩ5003	炭化材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄, 石墨調整	ＡＭＳ
№.３	ＳＩ5004	炭化材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄, 石墨調整	ＡＭＳ
№.４	ＳＩ5005	炭化材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄, 石墨調整	ＡＭＳ
№.５	ＳＩ5012	炭化材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄, 石墨調整	ＡＭＳ
№.６	ＳＩ5058（欠番）	炭化材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄, 石墨調整	ＡＭＳ
№.７	ＳＫ3263	炭化材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄, 石墨調整	ＡＭＳ
№.８	ＳＫ3262	炭化材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄, 石墨調整	ＡＭＳ
№.９	ＳＸ3140（欠番）	炭化材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄, 石墨調整	ＡＭＳ
№.10	ＳＮ3293	炭化材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄, 石墨調整	ＡＭＳ
№.11	ＳＱＳ12	炭化材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄, 石墨調整	ＡＭＳ
№.12	ＳＱＳ12	炭化材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄, 石墨調整	ＡＭＳ
№.13	ＳＱＳ12	炭化材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄, 石墨調整	ＡＭＳ
№.14	ＳＱＳ12	炭化材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄, 石墨調整	ＡＭＳ
№.15	ＳＱＳ12	炭化材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄, 石墨調整	ＡＭＳ
№.16	ＳＱＮ2025	炭化材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄, 石墨調整	ＡＭＳ
№.17	ＳＮ2030	炭化材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄, 石墨調整	ＡＭＳ

※１）AMSは加速器質量分析法：Accelerator Mass Spectrometry

２　測定結果

試料名	測定№.（Beta－）	^{14}C年代（年BP）	δ^{13}C（‰）	補正^{14}C年代（年BP）	暦年代（西暦）
№.１	187024	4650±40	－25.2	4650±40	交点：cal BC 3490, 3460, 3370 １σ：cal BC 3510 ～ 3430, ：cal BC 3390 ～ 3360 ２σ：cal BC 3520 ～ 3350
№.２	187025	4770±50	－25.7	4760±50	交点：cal BC 3620, 3580, 3530 １σ：cal BC 3640 ～ 3510 ２σ：cal BC 3650 ～ 3500, ：cal BC 3460 ～ 3380

№.3	187026	4680±40	−25.0	4680±40	交点:cal BC 3500, 3440, 3380 1σ:cal BC 3520 ～ 3480, :cal BC 3470 ～ 3370 2σ:cal BC 3620 ～ 3580, :cal BC 3530 ～ 3360
№.4	187027	4650±40	−27.3	4610±40	交点:cal BC 3360 1σ:cal BC 3490 ～ 3460, :cal BC 3370 ～ 3350 2σ:cal BC 3510 ～ 3430, :cal BC 3390 ～ 3340
№.5	187028	4790±40	−25.9	4780±40	交点:cal BC 3630, 3560, 3540 1σ:cal BC 3640 ～ 3620, :cal BC 3600 ～ 3520 2σ:cal BC 3650 ～ 3510, :cal BC 3420 ～ 3390
№.6	187029	4850±60	−25.7	4840±60	交点:cal BC 3640 1σ:cal BC 3660 ～ 3630, :cal BC 3560 ～ 3540 2σ:cal BC 3710 ～ 3520
№.7	187030	2980±40	−25.9	2970±40	交点:cal BC 1200 1σ:cal BC 1270 ～ 1120 2σ:cal BC 1310 ～ 1040
№.8	187031	3460±40	−25.2	3460±40	交点:cal BC 1750 1σ:cal BC 1870 ～ 1840, :cal BC 1780 ～ 1720 2σ:cal BC 1890 ～ 1680
№.9	187032	2960±40	−26.4	2940±40	交点:cal BC 1130 1σ:cal BC 1210 ～ 1060 2σ:cal BC 1280 ～ 1010
№.10	187033	1190±40	−23.2	1220±40	交点:cal AD 790 1σ:cal AD 770 ～ 880 2σ:cal AD 690 ～ 900
№.11	187034	530±40	−23.3	560±40	交点:cal AD 1410 1σ:cal AD 1320 ～ 1340, :cal AD 1390 ～ 1420 2σ:cal AD 1300 ～ 1430

№12	187035	4510±40	－27.4	4470±40	交点：cal BC 3100 １σ：cal BC 3330 ～ 3220, ：cal BC 3180 ～ 3160, ：cal BC 3130 ～ 3080, ：cal BC 3060 ～ 3040 ２σ：cal BC 3350 ～ 3010
№13	187036	590±40	－25.8	580±40	交点：cal AD 1400 １σ：cal AD 1310 ～ 1360, ：cal AD 1390 ～ 1410 ２σ：cal AD 1300 ～ 1420
№14	187037	1130±40	－26.1	1110±40	交点：cal AD　960 １σ：cal AD　890 ～　990 ２σ：cal AD　870 ～ 1010
№15	187038	500±40	－25.7	490±40	交点：cal AD 1430 １σ：cal AD 1420 ～ 1440 ２σ：cal AD 1400 ～ 1460
№16	187039	360±40	－25.9	350±40	交点：cal AD 1510, 1600, 1620 １σ：cal AD 1470 ～ 1530, ：cal AD 1550 ～ 1630 ２σ：cal AD 1450 ～ 1650
№17	187040	4820±40	－26.0	4800±40	交点：cal BC 3640 １σ：cal BC 3640 ～ 3620, ：cal BC 3580 ～ 3530 ２σ：cal BC 3660 ～ 3520

１）^{14}C年代測定値　試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

２）δ^{13}C測定値　試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

３）補正^{14}C年代値　δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

４）暦年代　過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、およびサンゴのU－Th年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ（シグマ）（68％確率）と２σ（95％確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

第２節　樹種同定

株式会社古環境研究所

１　はじめに

木材はセルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

２　試料

試料は、深渡遺跡より出土した炭化材で、放射性炭素年代測定試料10、13、16、17の４点である。

３　方法

試料を割折して、炭化材の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４　結果

主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

スギ　*Cryptomeria japonica* D. Don　スギ科　図版51－１

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に２個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径２mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版51－２

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常は高さ20m、径40㎝ぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径２mに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

ブナ属　*Fagus*　ブナ科　図版51－３

横断面：小型でやや角張った道管が、単独あるいは２～３個複合して密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は緩やかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られる。

接線断面：放射組織はまれに上下端のみ方形細胞が見られるがほとんどが同性放射組織型で、単列のもの、２～数列のもの、大型の広放射組織のものがある。

以上の形質よりブナ属に同定される。ブナ属には、ブナ、イヌブナがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ35m、径1.5m以上に達する。材は堅硬、緻密、靭性あり、保存性は低い。容器などに用いられる。

サクラ属 *Prunus*　バラ科　図版52－４

横断面：早材部において、小型で丸い道管が密になる傾向を示し、他の部分においては、小型で丸い道管が、単独あるいは不規則な方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は、同性に近い異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で１～４細胞幅である。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

５　所見

同定の結果、深渡遺跡出土の炭化材は、試料10－スギ、試料13－サクラ属１点、試料16－ブナ属、試料17－クリであった。いずれも温帯に広く分布する樹種である。スギは積雪、降水量の多い地域で純林を形成し、谷筋など湿潤地に分布する。ブナ属の主要樹種のブナは冷温帯落葉広葉樹林の代表的なブナ林を形成し湿潤な気候下に生育する。クリは乾燥地に、サクラ属は排水の良い斜面地に分布する。このように、深渡遺跡では周囲の多様な環境に生育する樹種が利用されている。

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p. 20－48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p. 49－100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, p. 296

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成, 植生史研究特別第１号, 植生史研究会, p. 242

第３節　火山灰（テフラ）分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

北秋田市（旧森吉町）に所在する深渡遺跡は、阿仁川の支流小又川左岸に形成された河岸段丘上に位置する。発掘調査では、竪穴住居跡や土坑およびそれらに伴う土器などの遺物が検出され、縄文時代前期から晩期にわたり、断続的に小規模な集落が営まれたとされている。今回の分析調査では、調査区の

土層中に認められた火山灰（テフラ）と考えられる堆積物について、その性状を明らかにする。テフラである場合には、噴出年代の明らかにされている指標テフラとの対比を行い、遺構や遺物の年代に関わる資料を作成する。

１　試料

試料は、LB60区ＥⅢ層より採取されたテフラ試料１点である。外見は、黒褐色を呈するシルト混じりの粗砂である。

２　分析方法

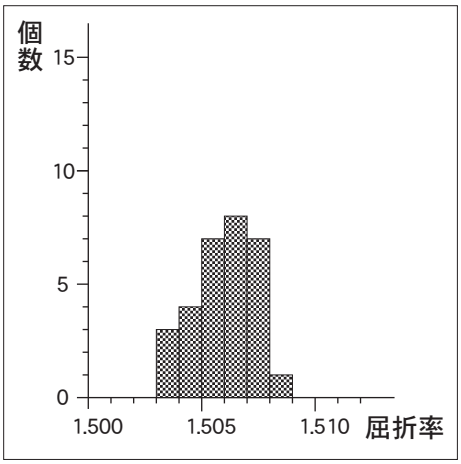
試料約20ｇを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の３タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

３　結果

処理後に得られた砂分は、多量の斜長石と中量の灰～暗灰色の安山岩片および少量の斜方輝石や角閃石などの遊離結晶から構成される。テフラの本質物としては、微量の火山ガラスと軽石が認められた。火山ガラスは無色透明の塊状の軽石型である。また、軽石は、径約１～３㎜で、白色を呈し、発泡は良好である。

火山ガラスの屈折率測定結果を第119図に示す。n1.503～1.50堆積物は、テフラの降下堆積物ではないと判断され、おそらく、流水等により洗い出された砂が堆積したものと考えられる。したがって、試料中に認められた火山ガラスおよび軽石も調査区周辺に堆積するテフラ層に由来する砕屑物が他の砂粒とともに調査区内に流れ込んだということが考えられる。したがって、試料中に認められた火山ガラスおよび軽石の由来するテフラの噴出年代と試料の採取された層位の堆積年代とは一致せず、年代指標とならないと考えられる。



第119図　火山ガラスの屈折率

なお、今回検出された火山ガラスおよび軽石については、上記の特性（特に火山ガラスの屈折率と角閃石の遊離結晶を伴うこと）と、本遺跡の地理的位置およびこれまでに研究された東北地方におけるテフラの産状（町田ほか（1981；1984）、Arai et al.（1986）、町田・新井（2003）など）との比較から、十和田カルデラを給源とする十和田八戸テフラ（To－H）に由来すると

考えられる。

To－Hは降下テフラと火砕流堆積物とが記載されており（Hayakawa, 1985）、降下テフラは最近では東北地方一帯や三陸沖などにおける広域テフラとして注目されている（町田・新井, 2003）。また、火砕流堆積物の分布も広域に及んでおり、秋田県北部では米代川とその支流の谷沿いに分布している（町田・新井, 2003）。したがって、小又川沿いにも火砕流堆積物が分布している可能性がある。今回検出された軽石や火山ガラスも、調査区周辺に堆積するTo－Hの降下堆積物だけではなく火砕流堆積物に由来する可能性がある。なお、To－Hの噴出年代は、放射性炭素年代では1. 3万年前前後とされている（町田・新井, 2003）。したがって、試料の採取されたLB60区EⅢ層は、古くとも1. 3万年前以降の堆積層といえる。現時点では、1. 3万年前以降のいつかということについては不明であり、今後の周辺における降下テフラ層の検出を待ちたい。

引用文献

Arai, F. ・Machida, H. ・Okumura, K. ・Miyauchi, T. ・Soda, T. ・Yamagata, K,1986, Catalog for late quaternary marker －tephras in JapanⅡ　－Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido－. Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No. 21, 223－250.

古澤　明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, 123－133.

HAYAKAWA, Y. , 1985, Pyroclastic Geology of Towada Volcano. Bulletin of The Earthquake Reserch Institute University of Tokyo, vol. 60, 507－592.

町田　洋・新井房夫, 2003, 新編　火山灰アトラス. 336p. , 東京大学出版会.

町田　洋・新井房夫・森脇　広, 1981, 日本海を渡ってきたテフラ. 科学, 51, 562－569.

町田　洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦, 1984, テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－. 古文化財に関する保存科学と人文・自然科学. 865－928, 渡辺直経編, 同朋舎.

第４節　花粉・プラントオパール・珪藻科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

深渡遺跡は、秋田県北秋田市に所在し、森吉山北麓を西流する小又川左岸の河岸段丘上に立地する。本遺跡の西部は現小又川の氾濫原で、標高は約182mである。昭和50年頃に水田造成により削平を受けているが、縄文時代前期から晩期の竪穴住居跡、柱穴様ピット、土坑群、土器、石器や、古代以降の掘立柱建物跡、炉跡などが確認されている。今回の分析調査では、本遺跡北部の低位段丘面を対象に、当時の古環境に関する情報を得ることを目的として、珪藻分析、花粉分析、プラントオパール分析を実施する。

１　試料

調査対象とする低位段丘面ＬＮ73区のトレンチ断面では、上位より大きくＦⅠ層からＦⅥ層に分層されており、ＦⅥ層の下位に地山とされる段丘礫層がある。この内、ＦⅠ層は水田造成により削平を受けた後に形成された層とされている。ＦⅡ層以深の時代観については、縄文時代前期から中期～後期初頭以降に対比されると考えられる。珪藻分析、花粉分析、プラントオパール分析に用いたのは、これらの層

準より採取した試料番号１－７の計７点である。試料の詳細を第12表に示す。

２　分析方法

（１）珪藻分析

試料を湿重で７g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer and Lange−Bertalot（1986, 1988, 1991a, 1991b）、Witkowski et al.（2000）などを参照する。同定結果は、淡水生種の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す（第14表）。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率2.0％以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図（第121図）を作成する。また、産出化石が現地性か異地性か判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については、Asai and Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

（２）花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。結果は同定・計数結果の一覧表（第15表）、および主要花粉化石群集の層位分布図（第122図）として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

（３）プラントオパール分析

湿重５g前後の試料について過酸化水素水、塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム：比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、プラントオパールを分離、濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下、乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来したプラントオパール（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来したプラントオパール（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。結果は、検出された種類とその個数の一覧表（第13表）で示す。また、検出されたプラントオパールの出現傾向から古植生について検討するために、プラントオパール群集の層位分布図（第120図）を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

３　結果

（１）珪藻分析

結果を第13表、第121図に示す。試料番号７－２の６試料については、珪藻化石の産出が少ないが、試料番号１からは珪藻化石が産出する。試料番号１における完形殻の出現率は約50％で、化石の保存状態は良好ではない。産出分類群数は、９属17種類である。試料番号１は、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が約95%と優占する。産出種の特徴は、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻Ａ群のHantzschia amphioxys、Navicula mutica、Pinnularia borealisがそれぞれ20%産出し、同じく陸生珪藻A群のPinnularia borealis var. linearis、乾いた環境にも水中にも生育する陸生珪藻Ｂ群のStauroneis obtuseなどを伴う。

（２）花粉分析

結果を第15表、第122図に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。木本花粉群集についてみると、大きく３つに分けられる。最下位の試料番号７では、ブナ属とマツ属が多く産出し、コナラ属コナラ亜属などを伴う。試料番号６－３にかけては、ブナ属とコナラ亜属が多く産出し、マツ属、スギ属、ハンノキ属、クリ属などを伴う。スギ属は上位に向かって増加する傾向があり、対照的にブナ属は上位に向かって減少する傾向が認められる。試料番号２，１になるとスギ属が優占し、マツ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属などを伴う。

草本花粉、シダ類胞子についてみると、試料番号７－３では産出量に変化はあるものの、イネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが認められる。シダ類胞子ではゼンマイ属が多産する。試料番号２，１になると、草本花粉ではイネ科に次いでヨモギ属が多く認められるようになる。シダ類胞子の産出は少なくなり、下位層準で多産したゼンマイ属はわずかに認められる程度である。

（３）プラントオパール分析

結果を第13表、第120図に示す。各試料からはプラントオパールが検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。また試料番号７－４では検出個数も少ない。試料番号７－４では、クマザサ属を含むタケ亜科がわずかに認められるのみである。試料番号３でもクマザサ属の産出が目立ち、ヨシ属やススキ属、イチゴツナギ亜科なども認められる。試料番号２，１ではクマザサ属の産出が目立ち、イチゴツナギ亜科なども見られる。

４　考察

（１）堆積環境

低位段丘面ＬＮ73区ＦⅡ層（試料番号１）から珪藻化石が産出したが、それ以外の６試料（試料番号７－２）からの産出は少なかった。ＦⅡ層の珪藻化石群集は、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が多産し、中でも耐乾性の高い陸生珪藻Ａ群が約80%と優占する。本調査地点が小又川左岸の河岸段丘上に位置する低位段丘面にあることから、本層堆積時はしばしば乾燥するような好気的環境であったか、上流部から陸生珪藻を含んだ土壌が洪水などによって本地点に二次堆積したことが考えられる。また、ＦⅢ層（試料番号２）も珪藻化石が47個体と少なかったが、珪藻化石群集がⅡ層に近似していたことから、同様な堆積環境が推定される。なお、ＦⅥ③層（試料番号７）からＦⅣ②層（試料番号３）では、産出化石が４－１個体と極めて少なかったことから堆積環境につ

いて検討することは困難であった。

（２）森林植生

今回分析した試料は、遺物の出土状況から縄文時代前期以降の堆積物とされている。分析試料中最下位のＦⅥ③層（試料番号７）からＦⅣ②層（試料番号３）では、ブナ属、コナラ属コナラ亜属が多く産出する。その他では、マツ属、スギ属、ハンノキ属、クリ属、ニレ属－ケヤキ属などを伴う。これらの内、ブナ属、コナラ亜属は冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素であり、ハンノキ属、ニレ属－ケヤキ属などはクルミ属、クマシデ属－アサダ属などとともに、渓谷や河畔、低湿地などに生育する種を含む分類群である。これらのことから、縄文時代以降の後背地には、ブナ属、コナラ亜属を主体として、クリ属、トチノキ属、シナノキ属などを伴う落葉広葉樹林が成立しており、マツ属、スギ属などの針葉樹も生育していたと推測される。後背山地の渓谷や小又川の河畔などには、ハンノキ属、ニレ属－ケヤキ属、クルミ属、クマシデ属－アサダ属などが生育していたと思われる。また、上位層に向かうにつれ、スギ属では増加傾向が、ブナ属では減少傾向が認められる。このことから、古墳時代初期から中期にかけて、ブナ属の生育域にスギ属の生育域が次第に広がっていったと思われる。なお、最下位のＦⅥ③層でマツ属が比較的多く検出されている。マツ属は生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能である。また、極端な陽樹であり、やせた裸地などでもよく発芽し生育する。これらのことから、周辺の岩場や林縁の急斜面、あるいは遺跡周囲の個体などの局地的影響が反映されている可能性があり、この時期に周囲でマツ属が多く生育していたとは考えにくい。一方、ＦⅢ層（試料番号２）、ＦⅡ層（試料番号１）になると、スギ属が優占する。スギ属は下位層準においても増加の傾向が認められるが、ＦⅢ層より上位での急増は顕著である。このことから、ＦⅢ層からＦⅡ層堆積時になると、後背の植生は変わらずブナ属を中心とする落葉広葉樹林が成立しているが、標高のやや低い場所や林縁部などにスギ属の林分が増加したと考えられる。ところで、本地域周辺におけるスギ属の増加は既存の研究により知られており、秋田市の女潟や飯田などの平野部では約3000年前、八幡平などの山間部では約2500年前とされている（辻・日比野, 1975；川村, 1977；辻, 1977）。このことから、ＦⅢ層およびＦⅡ層は約3000年前以降の堆積物である可能性もある。

（３）低地の植生

ＦⅥ③層（試料番号７）からＦⅣ②層（試料番号３）にかけては草本花粉の産出量に差があるものの、イネ科が比較的多く検出される。また、ゼンマイ属をはじめとするシダ類胞子も多産する。プラントオパール分析の結果からは、ＦⅥ③層からＦⅣ④層（試料番号４）ではクマザサ属を含むタケ亜科がわずかに認められるだけであるが、ＦⅣ②層ではクマザサ属の産出が目立ち、ヨシ属やススキ属、イチゴツナギ亜科なども認められる。これらのことから、縄文時代前期から中期～後期初頭にかけて、本遺跡周辺では、クマザサ属をはじめとするイネ科やカヤツリグサ科、ヨモギ属などの草本類やゼンマイ属などのシダ類が生育していたと推測される。日本海側の多雪地域では、自然状態においてはブナを中心とした森林植生となるが、ブナの林床はチシマザサ（クマザサ属の一種）が発達する（宮脇, 1987）。先に述べたように、花粉分析結果からもブナ属を主体とした植生が指摘されることから、検出されたクマザサ属は、周辺に成立していたブナ林の林床に生育していたチシマザサに由来する可能性もある。ただし、タケ亜科のプラントオパールは他のイネ科と比較して風化に強く、また生産量の多い点がこれまでの研究から指摘されており（近藤, 1982；杉山・藤原, 1986）、他の種類よりも残留しやすい。したがって、プラ

ントオパール組成からみると、本遺跡周辺でクマザサ属が優勢であったように見えるが、実際にはそれほど多くなかったと考えられる。ＦⅢ層（試料番号２）では草本花粉は少ないものの、ＦⅡ層（試料番号１）ではイネ科が多産しヨモギ属の割合も高くなる。プラントオパールではいずれの層準においてもクマザサ属が多産する。下位層準で多産したシダ類胞子はあまり産出せず、ヨシ属などのプラントオパールも認められない。これらのことから、当時の本遺跡周辺ではクマザサ属をはじめとするイネ科やヨモギ属などが生育し、比較的湿潤な環境を好むヨシ属やシダ類胞子は少なくなったと推測される。また、ＦⅡ層において栽培種であるソバ属の花粉がわずかではあるが認められることから、周辺地域でのソバ栽培が示唆される。

引用文献

安藤　一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73－88.

Asai, K. and Watanabe, T. , 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, 35－47.

原口　和夫・三友　清・小林　弘, 1998, 埼玉の藻類　珪藻類. 埼玉県植物誌, 埼玉県教育委員会, 527－600.

伊藤　良永・堀内　誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, 23－45.

川村　智子, 1977, スギ(Cryptomeria japonica)の分布に関する花粉分析的研究（Ⅰ. 秋田県）. 花粉, 11, 8－20.

近藤　錬三, 1982, Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究. 昭和56年度科学研究費（一般研究Ｃ）研究成果報告書, 32p.

近藤　錬三・佐瀬　隆, 1986, プラントオパール分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, 31－64.

小杉　正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, 1－20.

Krammer, K. , 1992, PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, 353p. , BERLIN・STUTTGART.

Krammer, K. and Lange－Bertalot, H. , 1986, Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p. , Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange－Bertalot, H. , 1988, Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p. , Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange－Bertalot, H. , 1991a, Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p. , Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange－Bertalot, H. ,1991b, Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p. , Gustav Fischer Verlag.

宮脇　昭編著, 1987, 日本植生誌　東北. 至文堂, 605p.

杉山　真二・藤原　宏志, 1986, 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－. 考古学と自然科学, 19, 69－84.

辻　誠一郎・日比野　紘一郎, 1975, 秋田県女潟における花粉分析学的研究. 第四紀研究, 14, 151－157.

辻　誠一郎, 1977, 秋田県玉川温泉地域の沖積世鹿湯層の花粉分析. 東北地理, 29, 162－167.

Witkowski, A. , H. Lange－Bertalot, and D. Metzeltin, 2000, Diatom flora of Marine coast Ⅰ Iconographia Diatomologica 7:881p. , Koeltz Sci. Koenigstein.

第12表　土壌分析試料一覧

試料番号	調査区	層準	花粉	プラントオパール	珪藻
1	LN73	F Ⅱ層	●	●	●
2	LN73	F Ⅲ層	●	●	●
3	LN73	F Ⅳ②層	●	●	●
4	LN73	F Ⅳ④層	●	●	●
5	LN73	F Ⅵ①層	●	●	●
6	LN73	F Ⅴ②層	●	●	●
7	LN73	F Ⅵ③層	●	●	●

第13表　プラントオパール分析結果

種　　類　　試料番号	1	2	3	4	5	6	7
イネ科葉部短細胞珪酸体							
タケ亜科クマザサ属	90	101	48	8	12	10	12
タケ亜科	-	15	19	-	7	1	-
ヨシ属	-	-	5	1	-	-	-
ウシクサ族ススキ属	3	-	5	-	-	-	-
イチゴツナギ亜科	1	1	6	-	-	-	-
不明キビ型	14	9	21	7	1	3	-
不明ヒゲシバ型	2	-	3	1	-	-	-
不明ダンチク型	6	5	9	-	-	-	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
タケ亜科クマザサ属	317	209	147	15	12	19	45
タケ亜科	-	-	1	-	-	2	-
ヨシ属	-	-	1	-	-	-	-
ウシクサ族	-	-	5	1	-	-	-
不明	2	1	35	3	1	1	-
合　　計							
イネ科葉部短細胞珪酸体	116	131	116	17	20	14	12
イネ科葉身機動細胞珪酸体	319	210	189	19	13	22	45
総　　計	435	341	305	36	33	36	57

第14表　珪藻分析結果

種　　類	生態性			環境							
	塩分	pH	流水	指標種	1	2	3	4	5	6	7
Aulacoseira ambigua (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N,U	1	-	-	-	-	-	-
Caloneis bacillum (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	1	-	-
Caloneis hyalina Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	-	-	-	-	-	-
Caloneis largerstedtii (Lagerst.)Cholnoky	Ogh-ind	al-il	ind	S	1	-	-	-	-	-	-
Eunotia exigua (Breb.)Grunow	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	P	1	4	-	-	-	-	-
Gomphonema sphaerophorum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	1	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	23	14	-	1	-	-	-
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	2	1	-	-	-	-	-
Navicula kotschyi Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	-	-	-	-	-
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	23	9	1	-	-	-	-
Navicula muticoides Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	8	1	-	-	-	-	-
Navicula sp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	1
Orthoseira roeseana (Rabh.)O'Meara	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	2	-	-	-	-	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	19	11	-	3	-	1	-
Pinnularia borealis var. linearis M.Per.	Ogh-ind	ind	ind	RA	10	-	-	-	-	-	-
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	1	-	-	-	-	-
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	2	-	-	-	-	-	-
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	10	4	-	-	-	-	-
海水生種					0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0
淡水生種					101	47	1	4	2	1	1
珪藻化石総数					101	47	1	4	2	1	1

凡例

H.R.：塩分濃度に対する適応性　pH: 水素イオン濃度に対する適応性　C.R.：流水に対する適応性

Ogh-ind	：貧塩不定性種	al-il	：好アルカリ性種	l-bi	：真止水性種
Ogh-hob	：貧塩嫌塩性種	ind	：pH不定性種	l-ph	：好止水性種
Ogh-unk	：貧塩不明種	ac-il	：好酸性種	ind	：流水不定性種
		ac-bi	：真酸性種	r-ph	：好流水性種
		unk	：pH不明種	unk	：流水不明種

環境指標種群

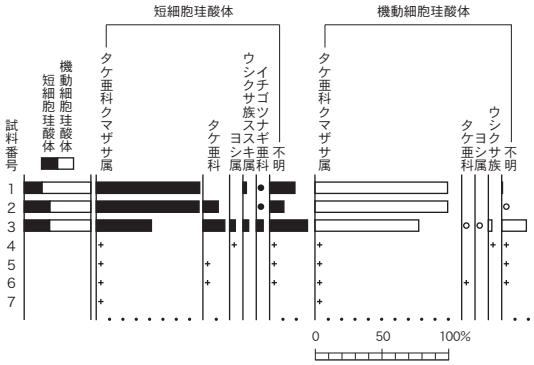
N:湖沼沼沢 湿地指標種，P:高層湿原指標種（安藤，1990）

S:好汚濁性種，U:広域適応性種，T:好清水性種（以上はAsai and Watanabe，1995）

R:陸生珪藻（RA:A群，RB:B群，RI:未区分、伊藤・堀内，1991）

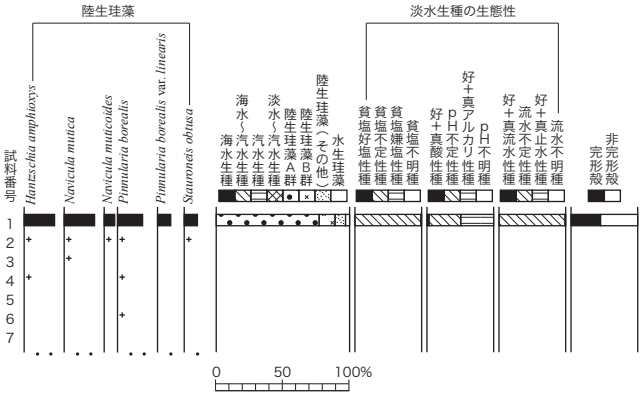
第15表　花粉分析結果

種　類　　試料番号	1	2	3	4	5	6	7
木本花粉							
ツガ属	-	-	-	-	-	-	1
マツ属	9	14	12	13	11	20	62
コウヤマキ属	3	1	1	-	1	-	1
スギ属	173	258	45	18	6	12	3
マオウ属	-	-	-	-	1	-	-
ヤナギ属	-	-	-	-	1	-	-
サワグルミ属	-	-	1	-	-	-	-
クルミ属	4	1	7	7	11	9	3
クマシデ属－アサダ属	2	9	9	6	9	4	5
ハシバミ属	-	2	-	-	-	-	-
カバノキ属	-	-	-	-	1	-	-
ハンノキ属	23	6	17	12	15	9	4
ブナ属	9	21	42	38	60	81	81
コナラ属コナラ亜属	18	11	37	25	40	37	19
クリ属	4	9	9	13	18	8	4
ニレ属－ケヤキ属	8	7	7	7	9	6	2
エノキ属－ムクノキ属	1	-	1	-	-	-	-
ヤドリギ属	-	-	3	1	-	-	-
キハダ属	-	2	-	-	-	-	-
ユズリハ属	-	2	3	-	-	-	1
カエデ属	-	4	3	1	3	6	9
トチノキ属	6	3	6	8	5	6	3
シナノキ属	-	4	10	4	3	7	3
ツバキ属	-	1	-	-	-	-	-
ウコギ科	-	2	3	1	8	2	5
ミズキ属	-	-	-	-	2	-	-
ツツジ科	-	-	1	-	1	-	-
トネリコ属	2	1	-	-	-	-	-
タニウツギ属	-	-	-	-	-	-	1
草本花粉							
イネ科	53	5	48	70	98	41	34
カヤツリグサ科	2	-	2	1	4	-	2
サナエタデ節－ウナギツカミ節	-	-	-	-	-	1	-
ソバ属	1	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	-	-	-	2	-	-	-
バラ科	1	1	-	-	-	-	1
マメ科	-	-	-	-	1	-	-
セリ科	-	-	-	1	-	-	-
ヨモギ属	19	5	2	1	4	2	5
キク亜科	2	-	2	5	-	1	-
タンポポ亜科	2	-	1	-	-	2	-
不明花粉	10	14	12	25	26	20	5
シダ類胞子							
ヒカゲノカズラ属	-	-	-	1	-	2	-
ゼンマイ属	9	8	165	90	49	86	60
他のシダ類胞子	88	40	136	282	136	279	243
合　計							
木本花粉	262	358	217	154	205	207	207
草本花粉	80	11	55	80	107	47	42
不明花粉	10	14	12	25	26	20	5
シダ類胞子	97	48	301	373	185	367	303
総　計（不明を除く）	439	417	573	607	497	621	552



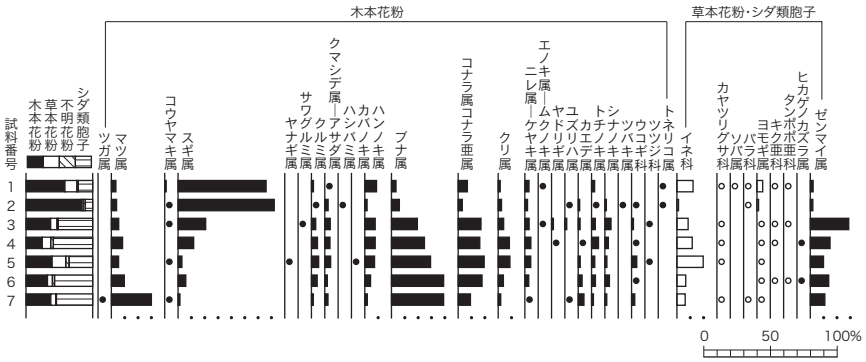
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満、＋は100個未満の試料で検出された種類を示す。

第120図　プラントオパール群集の層位分布



海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は２％未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

第121図　主要珪藻化石群集の層位分布



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満を示す。

第122図　主要花粉化石群集の層位分布

第５節　岩石肉眼鑑定（石器・石製品）

株式会社　大和地質研究所

１　業務の目的及び概要

本業務は、深渡遺跡で検出した石器類の岩石肉眼鑑定を行うことにより、石器石材利用に関する基礎資料とすることを目的とする。

２　調査項目及び数量

ａ．調査項目　石質鑑定　　ｂ．数量　187点（報告書掲載石器）

３　鑑定方法

秋田県埋蔵文化財センター北調査課（秋田県北秋田市宮前町12－１）にて行う。
光を十分に当て、ルーペ及び双眼実体顕微鏡を使い観察する。岩石や鉱物の種類組成・構造的質感等から、その場で岩石名を判断する。

４　地質概要

東北地方土木地質図（東北地方土木地質図編纂委員会，1988）を参照し、深渡遺跡周辺（半径20km程度）に分布する地質及び岩相と分布地域を、年代の古いものから順に以下に記述する。

（１）基盤岩類

１）未区分中・古生界（岩相：粘板岩、砂岩、凝灰岩）

深渡遺跡北東10km程度に位置する竜ヶ森周辺に分布する。

２）白亜系花崗岩類（岩相：花崗斑岩、花崗閃緑岩）

深渡遺跡北東10km程度に位置する竜ヶ森周辺に分布する。

（２）新第三系

１）中新統大荒沢層、門前層（岩相：火山角礫岩、安山岩質凝灰岩、安山岩質火砕岩）

大荒沢層は、深渡遺跡北東の高烏帽子山北東側斜面周辺に分布する（遺跡から８km程度）。

門前層は、深渡遺跡南西12km程度に位置する鬼灯山より南西方に分布する。

２）中新統大石層、台島層（岩相：緑色凝灰岩、凝灰角礫岩、凝灰質泥岩）

大石層は、深渡遺跡北東15km程度の大葛周辺に分布する。

台島層は、深渡遺跡近傍から東側にかけて分布する。

３）西黒沢層（岩相：凝灰質硬質泥岩、硬質砂岩、凝灰質砂岩（凝灰岩を含む））

深渡遺跡近傍から、西側に向かって分布する。

４）中新統貫入岩類１（岩相：粗粒玄武岩）

貫入岩であり、深渡遺跡近傍のほか周辺にも点在する。

５）中新統玄武岩（岩相：玄武岩、玄武岩質集塊岩）

深渡遺跡北西５kmに位置する源五郎岳を中心に分布する。

６）中新統安山岩（岩相：安山岩）

深渡遺跡北西９㎞程度に位置する四十八滝周辺に小さく分布する。

７）中新統流紋岩類（岩相：流紋岩（酸性凝灰岩を伴う））

深渡遺跡近傍から周辺にかけて、小規模に多数分布する。

８）中新統女川層（岩相：硬質泥岩、珪質頁岩（砂岩、酸性凝灰岩を伴う））

深渡遺跡西方15㎞程度の上小阿仁村南東部周辺に分布する。

９）中新統貫入岩類２（岩相：石英斑岩、花崗斑岩、石英閃緑岩、閃緑岩）

貫入岩であり、深渡遺跡北東９ｋｍに位置する小繋森山の東方に分布する。

（３）第四系（堆積岩類は軟質で石器として使用されていないため、火山岩類のみについて記述する）

１）第四紀火山岩類１（岩相：石英安山岩、石英安山岩質火山噴出物）

深渡遺跡東方５㎞程度の小又峡周辺に分布する。

２）第四紀火山岩類２（岩相：安山岩、玄武岩、安山岩質・玄武岩質火山噴出物）

森吉山を中心として深渡遺跡近傍まで分布する。

５　岩石肉眼鑑定

深渡遺跡出土石器187点を観察した結果を第９表に、機種と石質との関係を第16表に示す。第17表及び第123図には、地質概要に示した岩石名での比率を示した。

（１）岩石の特徴及び鑑定根拠

各岩石について平凡社発行の地学事典に記載されている特徴を記載し、岩石鑑定根拠を箇条書きする。

１）砂岩

＜特徴＞　岩片や鉱物粒子などの砂粒が粘土物質、炭酸カルシウム、珪酸などで膠結されてできた岩石。

＜鑑定根拠＞

・16分の１㎜～２㎜の砂粒子が固結した岩石。

・基本的にそれぞれの粒子は円磨されている。

２）凝灰岩

＜特徴＞　火山灰が固結して生じた火砕岩。（火砕岩：火山砕屑物が固結して生じた岩石。）

＜鑑定根拠＞

・火山灰と火山岩片から構成されている岩石。

・構成物中に軽石が認められる。

・砂岩と異なり、構成物が円磨されていない場合が多い。

３）流紋岩

＜特徴＞　珪長質火山岩。SiO2の平均値は72.8wt%。一般に斑状をなし、石英・アルカリ長石・少量のソーダ長石・黒雲母（または角閃石まれに輝石）の斑晶を有する。石器はガラス質～隠微晶質・珪長質で、流理・球顆・団塊・気泡などの構造を示すことが多い。

＜鑑定根拠＞

・白色～桃色を呈する場合が多い。

・斑晶として主に石英を含むことが特徴的であり他の岩石との区別に有効。

・流理構造と呼ばれる縞模様を呈する場合がある。

・ガラス質流紋岩は斑晶の確認できる細粒流紋岩に類似した岩質を持ち、実体顕微鏡では粒子が確認できないほど緻密で硬質なものについて命名。

４）安山岩

＜特徴＞　中性火山岩。SiO2量が52～63wt%、あるいは53～63wt%の非アルカリ岩質の火山岩。SiO2量が57wt%以下のものを玄武岩質安山岩と呼ぶ。一般に斑状であり、斑晶は斜長石が普遍的で、その他に斜方輝石・単斜輝石・ホルンブレンド・磁鉄鉱を含むことが多く、かんらん石・石英を含むこともある。

＜鑑定根拠＞

・青色～灰色を呈する場合が多い。玄武岩質安山岩では黒色に近くなる。

・斑晶として、ほとんどの場合斜長石を含む。また、輝石や角閃石を含む場合が多い。

・ガラス質安山岩は斑晶の確認できる細粒安山岩に類似した岩質を持ち、実体顕微鏡では粒子が確認できないほど緻密で硬質なものについて命名。

５）玄武岩

＜特徴＞　苦鉄質火山岩。SiO2量が45～52wt%。短冊状斜長石、粒状輝石、磁鉄鉱などからなるサブオフィチック・間粒状・填間状などの組織を示し、これらを玄武岩組織と呼ぶことがある。

＜鑑定根拠＞

・黒色を呈する場合が多い。

・斑晶としてかんらん石を含むことが多く、他の岩石との区別に有効。

６）花崗岩

＜特徴＞　珪長質粗粒完晶質火成岩。カリ長石・石英・斜長石及び有色鉱物を主成分とする。通常、有色鉱物は黒雲母で、ときに角閃石や白雲母、ざくろ石を含む。副成分鉱物として、ジルコン・磁鉄鉱・イルメナイト・りん灰石・チタン石などを少量含む。

＜鑑定根拠＞

・白色～桃色を呈する。

・岩石全体が石英・長石・黒雲母等の鉱物の集合から構成されている。

７）石英斑岩

＜特徴＞　珪長質斑状火成岩。石英・アルカリ長石・少量の黒雲母などの斑晶と、隠微晶質ないし微晶質石器からなる。

＜鑑定根拠＞

・灰色（白地に黒斑点が多数）を呈する。

・岩石全体が細かい石英・長石・角閃石等の結晶から構成されている。

８）ひん岩

＜特徴＞　斑状組織を示す閃緑岩組成の半深成岩。

＜鑑定根拠＞

・灰色～暗灰色を呈する。

・岩石全体が細かい輝石・長石・角閃石等の結晶から構成されている。

９）泥質片岩

＜特徴＞　泥質堆積岩起源の、片理の発達した広域変成岩。

＜鑑定根拠＞

・黒色を呈する。

・薄い層状の岩石が無数に重なっているような様相を呈する。

・剥離性をもち、一定方向に剥離しやすい。

10）玉髄

＜特徴＞　石英の微小結晶が網目状に集まり、超顕微鏡的小孔をもつ緻密集合体。不純物により色及び組織が変化する。玉髄は色が均質、めのうは色が帯状または同心円状に配列。岩石の空洞を充塡、内張りするように乳頭状・ぶどう状を示す。

＜鑑定根拠＞

・硬質である（石英と同じ、硬度７）。

・無色～白色を呈する場合が多い。有色の場合も透明感がある。

（２）深渡遺跡出土石器の岩質

深渡遺跡出土石器187点を鑑定した結果は、第９表及び第16表に示すように、堆積岩類は砂岩の１種類、火砕岩類は凝灰岩・溶結凝灰岩・軽石の３種類、火山岩類は玄武岩（玄武岩、細粒玄武岩）・安山岩（安山岩、細粒石安山岩、ガラス質安山岩）・流紋岩（流紋岩、細粒流紋岩、ガラス質流紋岩）の３種、半深成岩類は石英斑岩とひん岩の２種類、変成岩は泥質片岩の１種類、そして二次的な鉱物として玉髄が認められた。

なお、第９表では、上述の区分の他にも、玄武岩及び安山岩については代表的に認められる有色鉱物名を頭につけて岩石名として示した（例：かんらん石玄武岩、輝石安山岩）。

岩石毎の比率は、第17表及び第123図に示したように流紋岩が最も多く（111点）、次いで安山岩（50点）、そしてその他の岩石となる（玄武岩：７点、凝灰岩：５点、砂岩：４点、玉髄：４点、ひん岩：３点、石英斑岩：２点、泥質片岩：１点）。また、玄武岩・安山岩・流紋岩の火山岩類については、ガラス質及び細粒の岩石がその大部分を占めている。

（３）器種と石質の関係

鑑定資料187点の多くは刃が付けられた石器（石鏃、石匙、スクレイパー等）である。これら刃が付けられた石器には、ガラス質流紋岩、ガラス質安山岩や玉髄等の硬質であり、割ると鋭利な刃状になりやすいものが用いられている。

一方、刃がない石器（石皿、凹石、磨石、礫器等）には、比較的大きなサイズ（握り拳大以上）であり、また、加工しやすい軟質な岩石（砂岩、凝灰岩、気泡の多い火山岩）が多く用いられている。また、これら刃のない石器は円磨されたものが多く、河原から採取されたものと推定される。

６　岩石産地の推定

「４　地質概要」に基づき、各岩石について採取地の推定を行う。

（１）堆積岩類（砂岩）

砂岩は西黒沢層もしくは女川層に起源すると推定される。

（２）火砕岩類（凝灰岩・溶結凝灰岩・軽石）

凝灰岩・溶結凝灰岩・軽石それぞれ、深渡遺跡周辺に広く分布する火山岩類、火砕岩類の一部であると推定されるが、詳細な産地を推定するためには、現地踏査が必要とされる。

（３）火山岩類（玄武岩・安山岩・流紋岩）

玄武岩及び流紋岩は中新統の噴出岩（中新統玄武岩、中新統流紋岩）に起源すると推定される。安山岩については第四紀火山岩類に起源すると推定される。また、ガラス質の安山岩及び流紋岩については、安山岩及び流紋岩の火山岩体周縁の急冷部分である可能性が高い。

（４）半深成岩類（ひん岩・石英斑岩）

ひん岩・石英斑岩のいずれも中新統の貫入岩類に起源すると推定される。

（５）変成岩類（泥質片岩）

基盤岩類の未区分中・古生層に起源すると推定される。

（６）二次的な鉱物（玉髄）

玉髄は岩石の空隙等で、周囲の岩石から溶け出したSiO_2成分が再結晶することによって二次的に生成される。本地域では、SiO_2成分に富む岩石である中新統流紋岩に付随して形成された可能性が高いと考えられる。

７　まとめ

今回鑑定を行った深渡遺跡の石器は、全てが遺跡周辺で採取可能であることが確認された。また、凹石・磨石・礫器等に用いられている岩石はその丸い形状から、河原で採取された、小又川上流域に分布するものであることが推定される。

今回深渡遺跡から発見された石器について鑑定を行ったが、深渡遺跡周辺の遺跡から発見された石器については、すでに鑑定された例がある。それらの鑑定結果によると、今回ガラス質流紋岩とした岩石に類似したものが珪質頁岩であると鑑定されている。

今回ガラス質流紋岩と判断した根拠は以下の２点である：（１）微小な斜長石や石英が認められた細粒流紋岩と鉱物の種類組成・構造的質感が非常に類似している。（２）薄い部分が光を透過する（堆積岩は主に不透明な粒の集合であるためこのような特徴を持たない）。いずれも双眼実体顕微鏡（～40倍）を使用して観察した結果であるが、これまでの鑑定は主に肉眼及びルーペ（～10倍）によるものである。そのため、これまでに珪質頁岩と鑑定された石器についても、実体顕微鏡を使用して、詳細に観察することによって、ガラス質流紋岩の特徴などが発見できる可能性がある。

参考文献

東北地方土木地質図編纂委員会（1988）：20万分の1東北地方土木地質図及び同解説書.

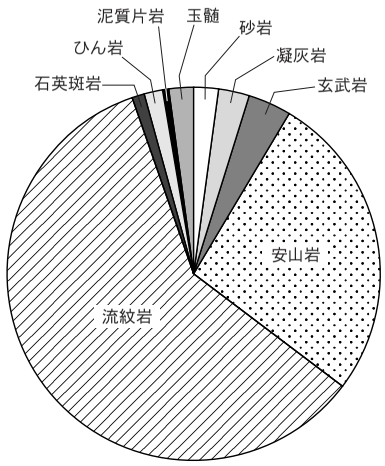
地学団体研究会編（1996）：新版地学事典. 平凡社.

第16表　器種別石質一覧

岩石区分	岩石（鉱物）名	石鏃	石匙	石錐	石槍	石篦	磨製石斧	石皿	凹石	凹石（磨石）	磨石	錘	スクレイパー	二次加工のある剥片	半円状扁平打製石器	礫器	計
堆積岩	砂岩							1	2	1							4
火砕岩	凝灰岩						1		1						1		3
	溶結凝灰岩													1			1
	軽石							1									1
火山岩	玄武岩										1						1
	細粒玄武岩					2					1					3	6
	安山岩								9	6	4				1	1	21
	細粒安山岩		3	1		1							4				9
	ガラス質安山岩	4											15	1			20
	流紋岩				1	1			2	1	3				3	2	13
	細粒流紋岩	2	4	1					1								8
	ガラス質流紋岩	22	20	5	2	8							32		1		90
半深成岩	石英斑岩						1					1					2
	ひん岩										2				1		3
変成岩	泥質片岩						1										1
二次的な鉱物	玉髄	1	1	1									1				4
計		29	28	8	3	12	3	2	15	8	11	1	52	2	7	6	187

第17表　石器の岩石構成

岩石（鉱物）名	個数	比率
砂岩	4	2.1
凝灰岩	5	2.7
玄武岩	7	3.7
安山岩	50	26.7
流紋岩	111	59.4
石英斑岩	2	1.1
ひん岩	3	1.6
泥質片岩	1	0.5
玉髄	4	2.1
計	187	100.0



第123図　石器の岩石構成

第６節　岩石肉眼鑑定（ＳＩ2001出土礫）

パリノ・サーヴェイ株式会社

第18表　岩石肉眼鑑定（ＳＩ2001出土礫）

番号	石材	位置
Ｓ１	安山岩	竪穴壁
Ｓ２	安山岩	竪穴壁
Ｓ３	安山岩	竪穴壁
Ｓ４	安山岩	竪穴壁
Ｓ５	安山岩	竪穴壁
Ｓ６	安山岩	竪穴壁
Ｓ７	安山岩	竪穴壁
Ｓ８	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ９	閃緑岩	竪穴壁
Ｓ10	安山岩	竪穴壁
Ｓ11	安山岩	竪穴壁
Ｓ12	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ13	安山岩	竪穴壁
Ｓ14	輝石安山岩	ｽﾛｰﾌﾟ部
Ｓ15	輝石安山岩	ｽﾛｰﾌﾟ部
Ｓ16	安山岩	ｽﾛｰﾌﾟ部
Ｓ17	安山岩	ｽﾛｰﾌﾟ部
Ｓ18	安山岩	ｽﾛｰﾌﾟ部
Ｓ19	安山岩	ｽﾛｰﾌﾟ部
Ｓ20	輝石安山岩	ｽﾛｰﾌﾟ部
Ｓ21	安山岩	竪穴壁
Ｓ22	安山岩	竪穴壁
Ｓ23	安山岩	竪穴壁
Ｓ24	安山岩	竪穴壁
Ｓ25	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ26	安山岩	竪穴壁
Ｓ27	輝石安山岩	SK2013
Ｓ28	安山岩	覆土
Ｓ29	安山岩	SK2013
Ｓ30	安山岩	SK2013
Ｓ31	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ32	安山岩	竪穴壁
Ｓ33	安山岩	竪穴壁
Ｓ34	安山岩	竪穴壁
Ｓ35	火山礫凝灰岩(ｸﾞﾘｰﾝﾀﾌ)	竪穴壁
Ｓ36	火山礫凝灰岩(ｸﾞﾘｰﾝﾀﾌ)	竪穴壁
Ｓ37	安山岩	竪穴壁
Ｓ38	安山岩	竪穴壁
Ｓ39	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ40	安山岩	竪穴壁
Ｓ41	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ42	安山岩	竪穴壁
Ｓ43	安山岩	竪穴壁
Ｓ44	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ45	火山礫凝灰岩(ｸﾞﾘｰﾝﾀﾌ)	竪穴壁
Ｓ46	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ47	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ48	安山岩	竪穴壁
Ｓ49	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ50	安山岩	竪穴壁
Ｓ51	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ52	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ53	安山岩	竪穴壁
Ｓ54	輝石安山岩	炉部壁
Ｓ55	輝石安山岩	炉部壁
Ｓ62	安山岩	炉部壁
Ｓ63	安山岩	SK2013
Ｓ65	安山岩	覆土
Ｓ70	安山岩	床面
Ｓ71	安山岩	覆土
Ｓ72	安山岩	覆土
Ｓ73	安山岩	床面
Ｓ74	安山岩	床面
Ｓ75	安山岩	床面
Ｓ76	安山岩	SK2013
Ｓ77	安山岩	SK2013
Ｓ78	安山岩	床面
Ｓ79	安山岩	床面
Ｓ80	安山岩	炉
Ｓ81	輝石安山岩	炉
Ｓ82	輝石安山岩	炉
Ｓ83	安山岩	炉
Ｓ84	安山岩	炉
Ｓ85	輝石安山岩	炉
Ｓ86	輝石安山岩	炉
Ｓ87	輝石安山岩	炉
Ｓ88	輝石安山岩	炉
Ｓ89	安山岩	炉
Ｓ90	安山岩	炉
Ｓ91	安山岩	炉
Ｓ92	輝石安山岩	炉
Ｓ93	安山岩	炉
Ｓ94	安山岩	炉
Ｓ95	安山岩	炉
Ｓ96	安山岩	炉直上
Ｓ97	安山岩	Ｐ２
Ｓ98	輝石安山岩	Ｐ２
Ｓ99	安山岩	Ｐ１
Ｓ100	安山岩	竪穴壁
Ｓ101	安山岩	竪穴壁
Ｓ102	火山礫凝灰岩	竪穴壁
Ｓ103	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ104	安山岩	竪穴壁
Ｓ105	安山岩	炉部壁
Ｓ106	輝石安山岩	炉部壁
Ｓ107	輝石安山岩	炉部壁
Ｓ108	安山岩	炉部壁
Ｓ109	安山岩	炉部壁
Ｓ110	輝石安山岩	炉部壁
Ｓ111	輝石安山岩	炉部壁
Ｓ112	輝石安山岩	炉部壁
Ｓ113	安山岩	炉部壁
Ｓ114	輝石安山岩	ｽﾛｰﾌﾟ部
Ｓ115	安山岩	ｽﾛｰﾌﾟ部
Ｓ116	安山岩	ｽﾛｰﾌﾟ部
Ｓ117	輝石安山岩	SK2013
Ｓ118	輝石安山岩	SK2013
Ｓ119	安山岩	SK2013
Ｓ120	輝石安山岩	SK2013
Ｓ121	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ122	安山岩	竪穴壁
Ｓ123	安山岩	SK2013
Ｓ124	安山岩	竪穴壁
Ｓ125	安山岩	竪穴壁
Ｓ126	安山岩	炉部壁
Ｓ127	安山岩	SK2013
Ｓ128	火山礫凝灰岩(ｸﾞﾘｰﾝﾀﾌ)	炉部壁
Ｓ129	輝石安山岩	SK2013
Ｓ130	安山岩	SK2013
Ｓ131	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ132	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ133	安山岩	竪穴壁
Ｓ134	安山岩	竪穴壁
Ｓ135	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ136	安山岩	炉部壁
Ｓ137	安山岩	竪穴壁
Ｓ138	安山岩	竪穴壁
Ｓ139	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ140	安山岩	竪穴壁
Ｓ141	安山岩	竪穴壁
Ｓ142	安山岩	竪穴壁
Ｓ143	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ144	安山岩	竪穴壁
Ｓ145	安山岩	SK2013
Ｓ146	安山岩	SK2013
Ｓ147	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ148	安山岩	竪穴壁
Ｓ149	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ150	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ151	安山岩	竪穴壁
Ｓ152	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ153	安山岩	竪穴壁
Ｓ154	安山岩	竪穴壁
Ｓ155	安山岩	竪穴壁
Ｓ156	安山岩	竪穴壁
Ｓ157	安山岩	竪穴壁
Ｓ158	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ159	安山岩	竪穴壁
Ｓ160	安山岩	炉部壁
Ｓ161	安山岩	炉部壁
Ｓ162	安山岩	炉部壁
Ｓ163	安山岩	炉部壁
Ｓ164	安山岩	炉部壁
Ｓ165	輝石安山岩	SK2013
Ｓ166	安山岩	炉部壁
Ｓ167	安山岩	炉部壁
Ｓ168	安山岩	炉部壁
Ｓ169	安山岩	炉部壁
Ｓ170	安山岩	竪穴壁
Ｓ171	安山岩	竪穴壁
Ｓ172	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ173	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ174	安山岩	SK2013
Ｓ175	輝石安山岩	SK2013
Ｓ176	安山岩	床面
Ｓ177	安山岩	竪穴壁
Ｓ178	安山岩	竪穴壁
Ｓ179	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ180	安山岩	竪穴壁
Ｓ181	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ182	安山岩	竪穴壁
Ｓ183	安山岩	竪穴壁
Ｓ184	安山岩	竪穴壁
Ｓ185	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ186	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ187	安山岩	竪穴壁
Ｓ188	安山岩	竪穴壁
Ｓ189	安山岩	竪穴壁
Ｓ190	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ191	輝石安山岩	竪穴壁
Ｓ192	安山岩	炉部壁
Ｓ193	安山岩	炉部壁
Ｓ194	安山岩	炉部壁
Ｓ195	閃緑岩	炉部壁
Ｓ196	輝石安山岩	炉部壁
Ｓ197	輝石安山岩	炉部壁
Ｓ198	安山岩	竪穴壁
Ｓ199	安山岩	竪穴壁
Ｓ200	安山岩	竪穴壁
Ｓ201	安山岩	ｽﾛｰﾌﾟ部
Ｓ202	安山岩	竪穴壁
Ｓ203	安山岩	竪穴壁
Ｓ204	安山岩	SK2013
Ｓ205	輝石安山岩	SK2013
Ｓ206	輝石安山岩	炉部壁
Ｓ207	安山岩	炉
Ｓ208	安山岩	炉
Ｓ209	安山岩	炉
Ｓ210	安山岩	炉

第６章　まとめ

深渡遺跡は、平成８年度調査の919㎡（森吉町教委1997）、平成９年度調査（秋田県教委1999）の4000㎡に加え、今回調査した15,700㎡で、一部を除きほぼ遺跡全面の調査が終了した。遺跡はほ場整備により、大部分で削平を受けており、遺構の遺存は必ずしも良好な状態ではなかったが、縄文時代（前期中葉、中期中葉、中期後葉、後期、晩期前葉）と古代以降の人々の活動の痕跡が残されていた。以下、過去２回の調査の成果も踏まえ[註１]、遺跡の変遷、及び特徴的な遺構と遺物に言及し、まとめに変えたい。

（１）遺構について

深渡遺跡の変遷

縄文時代前期中葉

該期に属する遺構としては、竪穴住居跡６軒（ＳＩ5001Ａ、ＳＩ5001Ｂ、ＳＩ5003、ＳＩ5004、ＳＩ5005、ＳＩ5012）が挙げられる。６軒は高位面南西部の約300㎡の狭い範囲にそれぞれ近接して位置する。

ＳＩ5003、ＳＩ5004は重複しており、切り合い関係からＳＩ5004が新しいことが明らかである。またＳＩ5001覆土と、ＳＩ5003覆土には同一個体土器片が含まれていることから、住居廃絶後には同時に廃棄場として利用されていた可能性が考えられる。６軒のうちＳＩ5003、ＳＩ5004、ＳＩ5005、ＳＩ5012は、①平面形は長軸５ｍ前後の不整楕円形、②床面標高は186.7ｍ～186.9ｍ、③炉は浅く掘り窪めた掘込炉、④炉は住居の中心に位置する（ＳＩ5004を除く）、という点で共通の特徴を持つ。これら６軒の住居は同時存在したものではなく、おそらく一時期１軒～２軒程度の小規模な居住域が形成されていたものと想定される。４軒の居住跡が同様の形態であることから、それぞれの住居が連続して営まれた可能性が考えられる。

また、遺跡北部に位置する低位面沢状部分では、包含層より土器が18ℓ遺物収納箱に88箱出土した。これらの土器を使用した集落は確認していないが、低位面に南接する中位面は大幅に上位を削平されていることから、この部分に集落が営まれていた可能性が想定される。

なお、低位面から出土する土器と、高位面南西部の住居などの遺構から出土した土器は、同じ円筒下層ｂ式に比定されるが、頸部横位文や地文などが異なる。このことから、低位面から出土した土器を製作した人々と、高位面から出土した土器を製作した人々は、時期差も含め何らかの差異があった可能性が高い。

縄文時代中期前葉～中期中葉

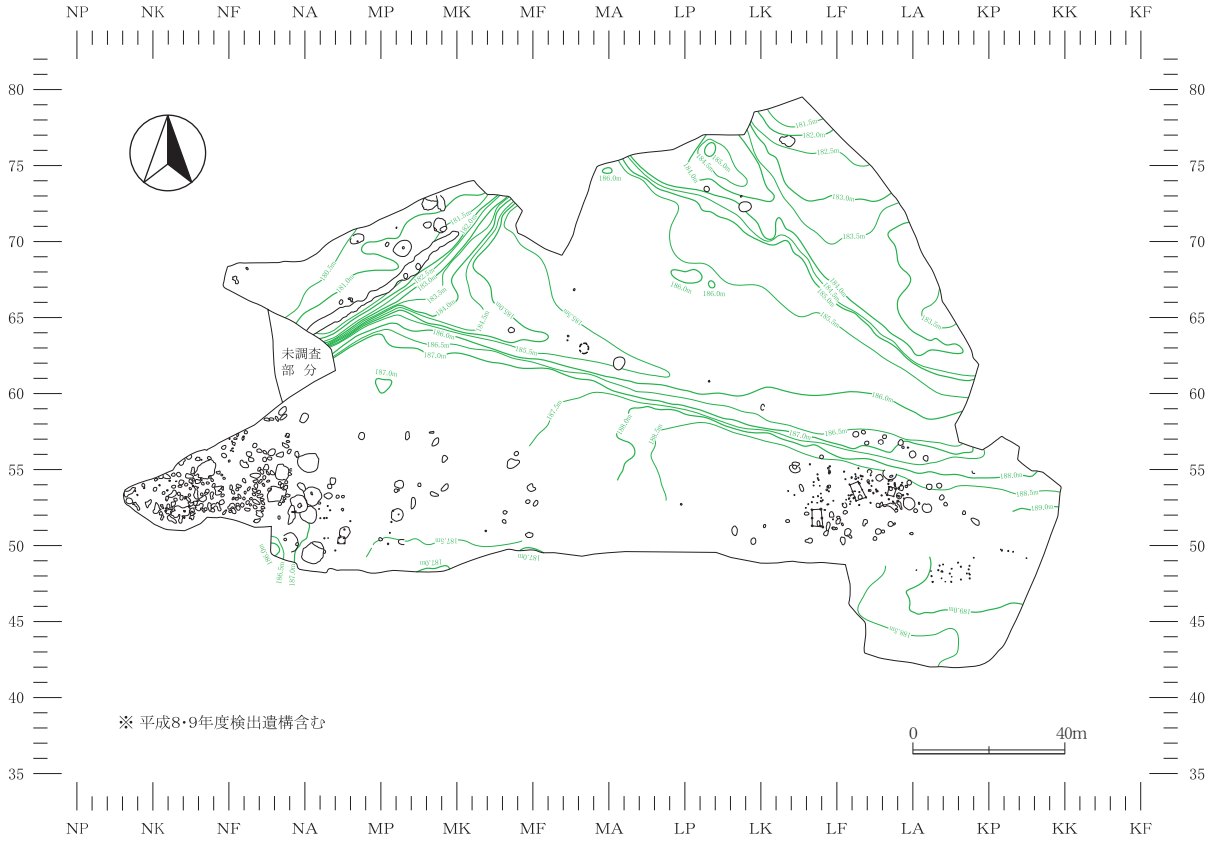
該期に属する遺構としては、平成９年度調査の際に検出されたＳＩ107がある。ＳＩ107は高位面の遺跡西端に位置する。円筒上層ｃ式の深鉢形土器が出土していることから、縄文時代中期中葉に営まれた住居と判断できる。ほかにも、平成８年度に調査された遺跡南西端部では、中期前葉～中期中葉とされる土器埋設遺構がまとまって確認されている。個別の遺構の詳細な時期や性格は定かではないが、十数基が該期に属すると報告されている。

さらに遺跡西端部の氾濫原では、該期の土器が18ℓ遺物収納箱で68箱出土した。それらはすべて高位面側に堆積していた崖錐性堆積物に混入しており、本来、高位面崖際もしくは斜面に捨てられていたも

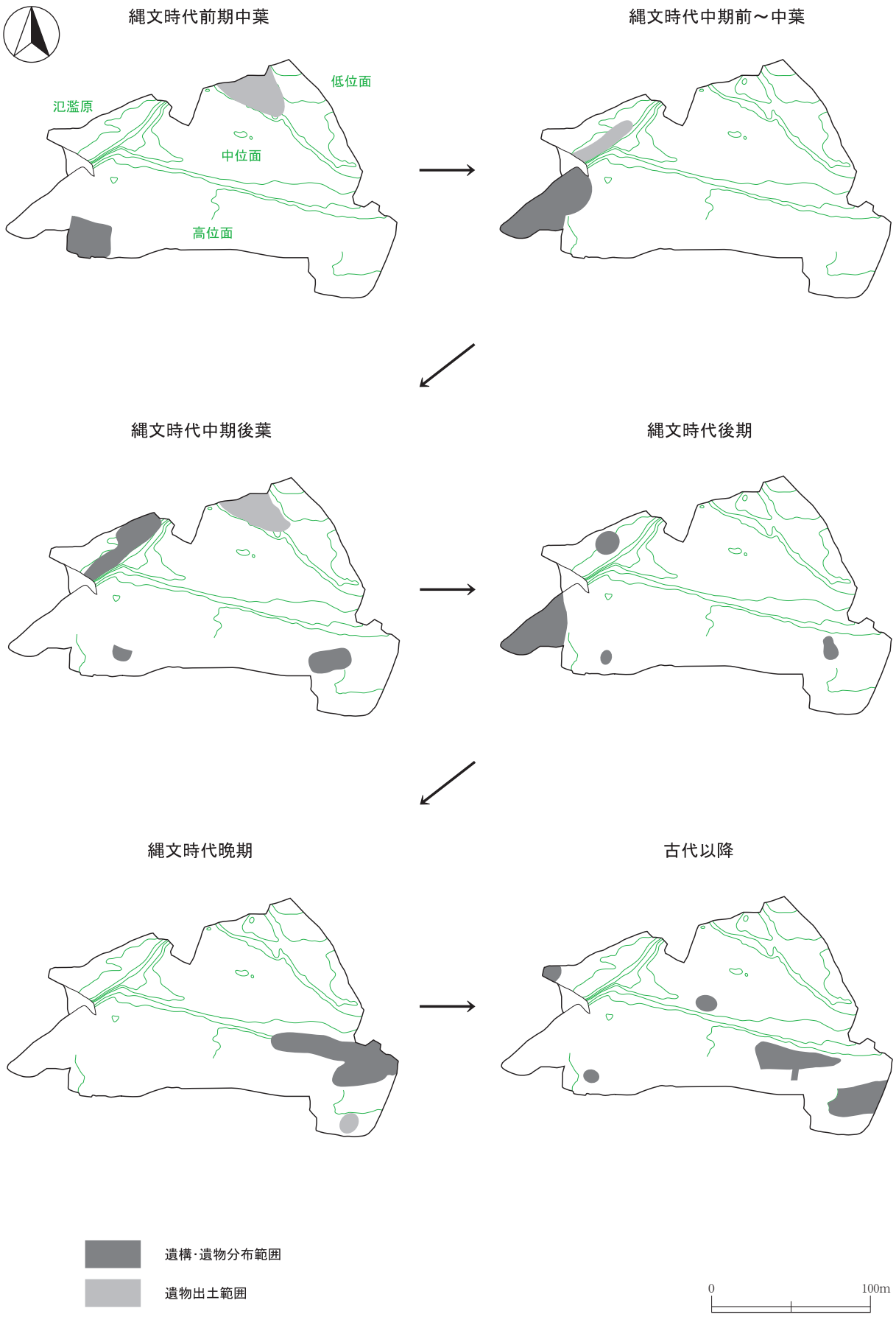
のが、斜面の崩落に伴い、斜面下の氾濫原に堆積した結果と判断できる。調査時には、高位面西部は大きく削平され、遺構や遺物は全く検出できなかったが、崖錐性堆積物に遺物が多く混入していた状況から推測すると、高位面西部には該期の集落が営まれ、いくつかの竪穴住居跡が存在していたと想定できる。出土した遺物の量及び時期から推測すると、集落の規模は、１軒程度の小規模・短期のものではなく、前葉から中葉にかけて、ある程度の規模で連続して営まれた集落であった可能性が考えられる。前述したＳＩ107は、それらの竪穴住居跡のうちの１つが削平を免れ残存したものと推測する。

また、集落の連続性は遺跡南西端部で確認された土器埋設遺構群の存在からも裏付けられる。土器埋設遺構群が構築された区域では竪穴住居跡は確認されておらず、場の利用に何らかの制限があったと推定できる。土器埋設遺構群の性格は明らかでないが、前期以降の土器埋設遺構群に対して一般的に考えられているように墓だとすれば、居住域と墓域が区別されていたと考えられよう。また、土器埋設遺構群の周囲には162基もの土坑が検出されている（平成８年度調査）。それらの詳細な時期は報告されていないが、ＳＫ50、ＳＫ105などでこの時期の土器が出土していることから、該期に属する土坑が一定量存在すると考えられる。これらの土坑も含め、この区域に墓域が形成されていた可能性が高い。

これらを考え合わせると、想像の域を出ないが、該期には高位面西側に中規模程度の集落が墓域を伴って継続して営まれていたものと復元できよう。



第124図　遺構分布図



第125図　時期別遺構･遺物分布図

縄文時代中期後葉

該期には、高位面西部と氾濫原でそれぞれ１軒の竪穴住居跡（高位面ＳＩ5013、氾濫原ＳＩ2001）が確認されている。どちらも住居内に複式炉を伴うが、立地する面が異なることや複式炉の形状が異なることから、２軒の竪穴住居跡には、直接的な関連は認められない。おそらくそれぞれが単独で機能していたものと想定できよう。高位面ではほかに、東側で覆土に該期の土器が混入する土坑が４基（ＳＫ07、15、19、115、いずれも平成９年度調査）確認されている。ＳＩ5013が位置する高位面西部を居住空間とし、東側は必要に応じて利用していたのであろうか。

氾濫原ではＳＩ2001のほかに、遺物が18ℓ遺物収納箱で35箱出土した。多くがＳＤ2007溝跡からの出土で、そのほかにＳＫ2015土坑、ＳＫ2019土坑などから出土している。ＳＩ2001出土土器と遺構間で接合するものを含むことから、これらの遺構はＳＩ2001と同時期に機能していたものと考えられる。特にＳＤ2007はＳＩ2001が住居として使用されていた時期から、廃棄場所として使用されていたと考えられる。

氾濫原で検出した住居はＳＩ2001のみであり、集落としては極めて小規模である。しかしＳＩ2001は住居廃絶後に配石遺構へと形態を変化させており、それは計画的に行われている。配石遺構のもつ象徴性やその構築にかかる作業量からみても、その背景には住居１軒程度の家族単位を越えた、一定規模の集団が存在していたと想定される。すなわち該期の本遺跡の評価は、住居件数に示される単純な小規模集落ではなく、規模は小さくとも周辺一帯を含めた中心的な存在であった可能性が考えられる。

なお、約300m上流に位置する深渡Ａ遺跡では、ＳＩ2001と同様に、住居廃絶後に配石遺構として更新されたＳＩ29竪穴住居跡が検出されている。直接的な関連を示す資料は得られていないが、両者は出土遺物から連続して営まれた住居である可能性が高く、何らかの関連があったものと考えられる。

縄文時代後期前葉

該期に属する遺構は、氾濫原に位置するＳＩ2004、高位面東部に位置するＳＩ95（平成９年度調査）がある。また高位面南西端部では、６基確認された石囲炉のうちＳＮＱ１・ＳＮＱ６（平成８年度調査）から該期の土器が出土している。

高位面東部ではＳＩ95のほかに、該期に属する遺構としてＳＫ3101がある。ＳＫ3101は貯蔵穴から転用された土坑墓と推定される。また、これらの遺構分布域の下位面である中位面東部では、遺構周辺より流れ込んだと考えられる該期の土器が出土している。これらのことから、高位面東部では、集落の規模は小さいが、一定期間居住域が営まれていたと想定される。

氾濫原に位置するＳＩ2004は、周囲に同時期の土坑などの遺構はなく、遺物も出土していない。このことから、極めて小規模かつ短期の居住単位であったと考えられる。

ＳＩ2004からは詳細な時期を特定できる遺物が出土していないため、ＳＩ95とＳＩ2004の時期関係は不明である。しかしながら、ＳＩ2004とＳＩ95は、立地する面や住居形態が異なることから、それぞれが独立した居住域として、個別に機能していたと想定する。

また、平成８年度調査では高位面西端部で石囲炉が確認されている。報告書によれば、これらの石囲炉は住居に伴うものではなく、焼土面の形成が弱いことから使用期間は短いと想定されている。このことから、祭祀など非日常時に使用された炉と考えられる。石囲炉群から出土した土器は、磨消縄文が施されていることから、恐らく十腰内Ｉ式ないしそれ以降の時期と考えられる。一方、ＳＩ95周辺から出

土した土器は、十腰内Ⅰ式期以前のものであることから、石囲炉群とＳⅠ95は直接的な結びつきはない可能性が高いと推測する。ＳⅠ2004と石囲炉との関係は、前述したとおりＳⅠ2004の詳細時期が定かではないため、現状では言及しがたい。

縄文時代晩期前葉

該期に属する遺構としては、中位面南側に位置するＳⅠ3266竪穴住居跡、及びその周囲に構築された14基の土坑群がある。土坑群は高位面から中位面へ至る斜面に列状に構築されており、形状も類似することから、一連の遺構群と推定する。いずれも貯蔵穴と考えられるが、なかにはＳＫ3282などのように土坑墓に転用されたと考えられるものもある。竪穴住居跡と土坑群は、出土した土器から、ほぼ同時期もしくは土坑が若干新しいと判断できる。ＳⅠ3266と土坑群を結びつける資料は得られていないが、立地や時期がほぼ同じであることから、関連性は高いと言えよう。

なお、約300m上流に位置する深渡Ａ遺跡では、本遺跡の土坑群とほぼ同時期のフラスコ状土坑群が確認されている。深渡Ａ遺跡においても、高位面が中低位面に臨む先端部に立地しており、貯蔵穴群を構築する適地として、高位面の端部ないし中位面の斜面が選ばれていた様子がうかがわれる。

以上のように、高位面東部及び深渡Ａ遺跡周辺は、居住域としてのみならず、貯蔵域としても利用された場であったと捉えられる。

古代以降

古代以降の遺構は高位面東部のＳＢ3259、ＳＢ3260掘立柱建物跡及びピット群、高位面西部に位置するＳＫⅠ5064竪穴状遺構、高位面中央部に位置するＳＱＳ12石棺様組石、ＳＮ3216炉跡、低位面に位置するＳＮ3293炉跡、氾濫原に位置するＳＱＮ2025石組炉などがある。それぞれの遺構の詳細な時期が明らかではなく、遺構も遺跡全域に散在するため、古代以降の人々の詳細な営みを復元することは困難である。しかしながら、炉跡が４基確認されていることから、古代以降、この地で炉を使用した何らかの生産活動が行われていたことが想定できよう。

竪穴住居跡の形態について

本遺跡では、縄文時代の竪穴住居跡が５時期14軒検出された。ここでは、詳細な時期が特定できなかったＳⅠ1015、ＳⅠ5010を除く12軒について、形態の特徴を時期ごとにまとめる。なお、小又川流域の竪穴住居跡についてはすでにまとめられており（河田2004、2005）、ここでの成果はその補遺資料となる。

縄文時代前期中葉

この時期には６軒（ＳⅠ5001Ａ、ＳⅠ5001Ｂ、ＳⅠ5003、ＳⅠ5004、ＳⅠ5005、ＳⅠ5012）の竪穴住居跡がある。竪穴の平面形はＳⅠ5001Ａ・Ｂを除き、いずれも長軸が短軸の1.1倍程度の不整楕円形である。規模はＳⅠ5001Ａが長軸6.2m、床面積約22㎡と他の住居に比べて大形であるほかは、長軸５m前後、床面積10㎡～15㎡である。炉は掘込炉が主体で、ＳⅠ5004を除いて、住居の中心に位置する。炉の改築が行われている例が３軒に認められる。炉の周囲に炭化物が散在する例が目立ち、３軒でこのような事象が認められた。また、炉の脇にピットを伴う例が２軒確認されている。柱穴は３基～４基で炉を中心に配置される。壁溝は２軒で検出した。

ＳⅠ5001Ａは、規模が大きく、竪穴掘り込みが深い点で他の住居と様相が異なるが、炉形態や、柱穴配置などでは他の住居とほぼ同じである。形態が明らかでないＳⅠ5001Ｂを除く５軒がほぼ同様の特徴

を持つことから、住居形態が定型化していたと想定される。

縄文時代中期中葉

この時期の住居はＳＩ107（平成９年度調査）がある。竪穴の平面形は5.6m×5.2mの不整隅丸方形で、床面積は約15㎡である。床面が倒木痕に攪乱されているため、炉や柱穴は検出されていない。

ＳＩ107は平面隅丸方形と報告されている住居である。しかし、遺構図や写真によれば、定型的な隅丸方形ではなく、不整楕円形と見ることも可能である。この時期の小又川流域の住居は、円形もしくは楕円形が主流であることを考え合わせれば、方形を意識して構築したものではなく、結果的に隅丸方形を呈することとなったものと捉える方が適切であろう。

縄文時代中期後葉

この時期の住居はＳＩ2001とＳＩ5013がある。ＳＩ2001の平面形は3.9m×3.3mの楕円形で床面積は6.6㎡、主柱穴は４基である。ＳＩ5013の平面形は径3.3mの円形で、床面積は6.8㎡、柱穴は２基である。炉はどちらも複式炉である。

本遺跡において、該期には竪穴の規模が小さくなることが特徴として挙げられる。前時期までは径５m前後が主体であったが、この時期の住居は径４m以下で、床面積も７㎡以下と前時期と比較して５割程度の広さである。ただし、周辺の遺跡では桐内Ｄ遺跡のＳＩ34（秋田県教委2001）や二重鳥Ｅ遺跡のＳＩ01（森吉町教委2002）など、径が５m以上の住居も同時期に存在する。

縄文時代後期前葉

この時期にはＳＩ95とＳＩ2004が営まれる。ＳＩ95は3.3m×3.0mの平面不整円形で床面積は5.1㎡である。ＳＩ2004は推定4.7m×4.0mの楕円形で、床面積は12.6㎡である。柱穴はＳＩ95では６基が竪穴の外側に回る。ＳＩ2004では、竪穴内に２基認められる。炉はＳＩ95では認められず、ＳＩ2004は住居中心に掘込炉が位置する。

柱穴が竪穴の外側に回る例は、桐内Ａ遺跡のＳＩ37（秋田県教委2002）や姫ヶ岱Ｄ遺跡のＳＩ04（秋田県教委2000）に認められる。桐内Ａ遺跡の住居は後期後葉、姫ヶ岱Ｄ遺跡の住居は晩期前葉である。柱穴が竪穴の外側に位置する竪穴住居跡の例としては、本遺跡のＳＩ95が小又川流域では初現と言えよう。

縄文時代晩期前葉

この時期の住居はＳＩ3266がある。平面形は推定径3.5mの円形で、床面積は9.0㎡である。炉は住居のほぼ中心に位置しており、地床炉である。柱穴は壁柱穴で、壁際に沿って径20㎝以下の柱穴が巡る。住居南壁際には覆土を掘り込んで土器が逆位に埋設されていた。土器は胴部下半を欠く深鉢形土器もしくは台付鉢形土器で、大洞Ｂ～ＢＣ式に比定される。

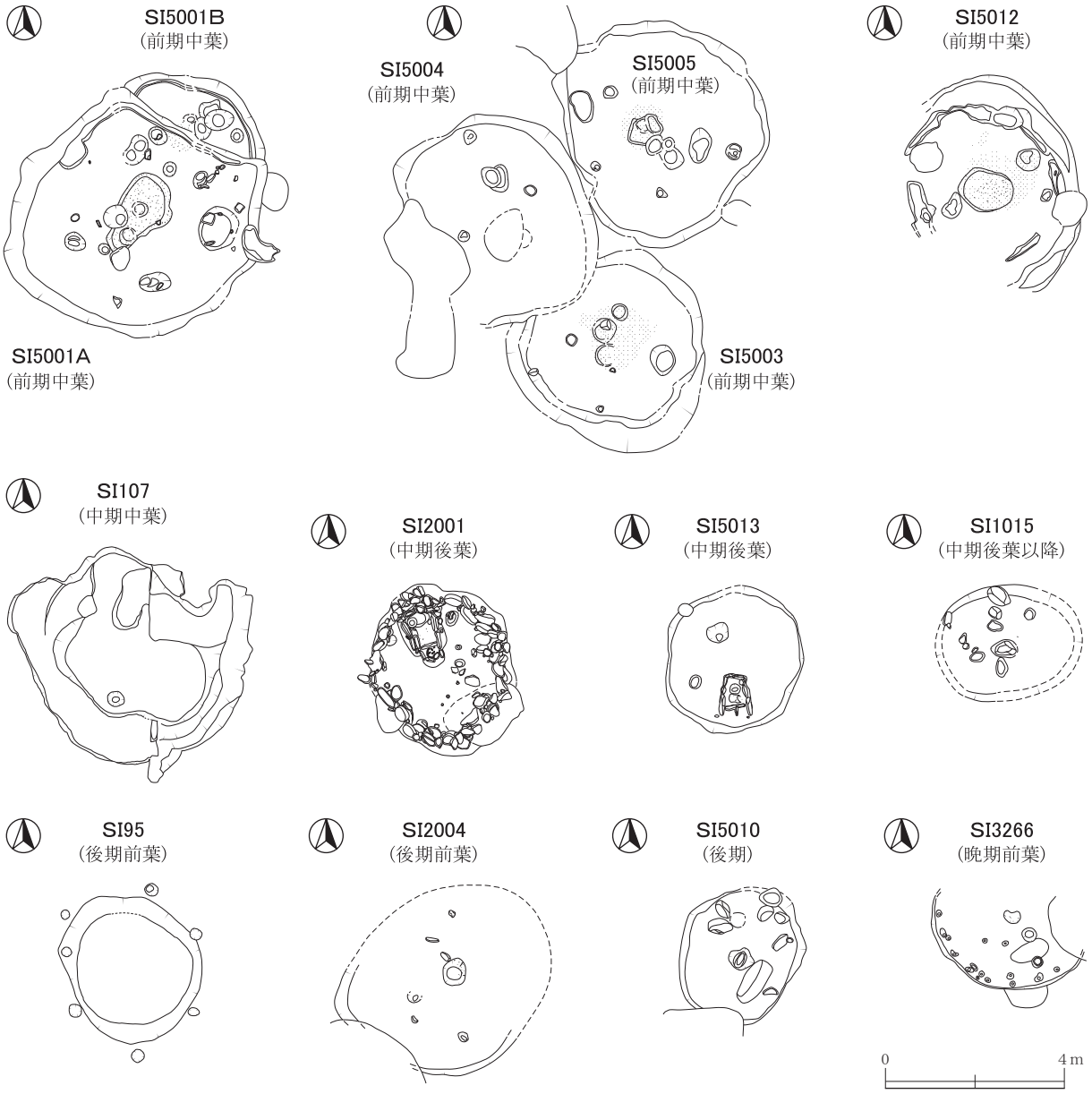
住居覆土を掘り込んで土器を埋設する例は、本遺跡より６㎞小又川下流左岸に位置する二重鳥Ｅ遺跡（森吉町教委2002）のＳＩ34竪穴住居跡に類例が認められる。二重鳥Ｅ遺跡ＳＩ34では、人為的に埋め戻された覆土を掘り込んで、住居南壁際に土器が設置される。口縁が床面に接するように逆位に埋設され、胴部下半は打ち欠かれる。埋設土器は深鉢形土器もしくは台付鉢形土器で、詳細な時期比定は困難であるが、大洞Ｂ式前後と考えられる。このように、二重鳥Ｅ遺跡ＳＩ34の様相は、本遺跡ＳＩ3266の例と埋設方法、位置、土器の種類など極めて類似する。

また、向様田Ｅ遺跡（秋田県教委2003）では、ＳＩ20竪穴住居跡の南壁際覆土を掘り込んでＳＲ26土器埋設遺構が構築される。埋設された土器は台付鉢形土器で、ＳＩ20床面より５㎝上位に、口縁部を下に

第19表　深渡遺跡竪穴住居跡一覧

遺構番号	調査区	時期	調査年度	規模(m)	平面形	床面積(㎡)	炉形態(※ →は改築を表す)	主柱穴	その他の付属施設	備考
SI5001A	MS～NA48～50	前期中葉	H15	6.2×5.4	不整隅丸方形	21.6	掘込炉→掘込炉	6基		
SI5001B	MS～NA48～50	前期中葉	H15	－	不整楕円形？	－	地床炉	不明	壁溝	
SI5003	MT・NA51・52	前期中葉	H15	(4.7)×4.3	不整楕円	9.6	掘込炉→掘込炉	4基		
SI5004	MT・NA52・53	前期中葉	H15	5.0×(4.5)	不整楕円	(13.5)	掘込炉	3基		
SI5005	MS・MT52・53	前期中葉	H15	5.1×4.6	不整楕円	15.2	掘込炉→掘込炉→掘込炉	4基		炉にピットを伴う
SI5012	NA・NB49・50	前期中葉	H15	4.9×(4.4)	不整楕円	(11.0)	掘込炉	2基	壁溝	炉にピットを伴う
SI107	MT55・56・NA54～56	中期中葉	H 9	5.6×5.2	不整隅丸方形	14.5	不明	不明		
SI2001	MK・ML70・71	中期末葉	H15	3.9×3.3	楕円	6.6	複式炉	4基		
SI5013	MN・MO51・52	中期後葉	H15	3.3×3.3	円	6.8	複式炉	2基		
SI1015	LK・LL71・72	中期後葉以降	H15	(3.3)×(2.6)	楕円	(5.1)	地床炉	なし		
SI95	KT・LA52・53	後期前葉	H 9	3.3×3.0	不整円	5.1	なし	6基(竪穴外)		
SI2004	MN69・70・MO69	後期前葉	H15	(4.7)×(4.0)	楕円	(12.6)	掘込炉	2基		
SI5010	MR50・51	後期	H15	3.2×2.6	楕円	5.5	掘込炉	なし		
SI3266	LB54	晩期前葉	H15	3.5×(3.5)	円	(9.0)	地床炉	13基		

※1　(　)は推定値である。　※2　床面積は、竪穴下端で算出した。



第126図　深渡遺跡検出竪穴住居跡

向けて設置される。時期は大洞Ｂ式期である。ＳＩ20は覆土から出土した土器により縄文時代後期に比定されているため、報告書では時期の異なる遺構の重複と捉えられている。しかし、ＳＩ20から出土した土器が混入とすれば、本遺跡のＳＩ3266の類例となる可能性も考えられよう。

これらの住居はいずれも①竪穴埋め戻し後、もしくは埋め戻す際に土器を埋設する[註２]、②埋設土器は深鉢形土器もしくは台付鉢形土器である、③土器は逆位に埋設する、④南壁際に位置する、という特徴を持つ。小又川流域ではこの時期、何らかの共通認識のもとに、このような廃絶行為が行われていたと可能性が想定されよう[註３]。

ＳＩ2001竪穴住居跡について

氾濫原で検出されたＳＩ2001竪穴住居跡は、壁際に礫が巡らされた住居である。詳細は本書第４章第２節に記載したが、ここではその特徴と類例を整理していきたい。

遺構の変遷と計画性

本住居は、①竪穴住居として使用されていた段階、②壁に礫が巡らされた段階、③竪穴が埋め戻され配石として機能していた段階、の三段階に機能が変化する。

ＳＩ2001が竪穴住居として機能していた第一段階では、壁際の礫は据えられていなかったと考えられる。その根拠としては、柱穴（Ｐ４）が礫の下に位置すること、礫の下より出土した土器小片が炉体土器と接合し、小片には炉使用時の被熱痕が認められること、礫は長期間の自立が不可能な状態で据えられていることの３点が挙げられる。これらのことから、住居機能時には本住居跡は一般的な竪穴住居跡と差異のない形態であったと判断することができる。床面は固く締まり、炉石や炉体土器に被熱痕跡が認められることから、ある程度の期間、住居として機能していたことが想定できよう。

その後、住居が廃絶し、上屋が解体された段階で、壁際に礫が巡らされる。これが第二段階である。この時点ですでに、竪穴を埋め戻して環状の配石遺構を構築する意図が見受けられる。それは礫の上端を水平に揃えていることから指摘できる。例えば三角形の礫は逆三角形状に据えられていたり、大きすぎる礫は床面を掘り込んで高さを調整する、逆に高さが足りない礫は下部で小礫などを咬ませて高さを確保するなど、礫ごとに高さを揃えるという、手間をかけているのである。これらの行為は、壁に礫を巡らすことが目的とすれば必要のない作業であり、竪穴が埋まって礫の上部のみが地表から顔を出す状態になって初めて活きてくる作業なのである。なお、礫の下部には地山土が貼られており、強く締まることから、これは礫の転倒を防ぐ目的があったものと想定される。このことから、礫は自立する必要があったと考えられ、礫を据える作業と竪穴を埋める作業は連続しないと判断できよう。すなわち、壁に礫が配された状態で開口していた期間があったと復元できるのである。ただし前述したような不安定な礫の据え方においては、長期間の自立は不可能であることから、開口期間は極めて短期間であったと推定できよう。

壁際に配された礫は立石の状態が基本であるが、炉に接する部分と、東側の一部は様相が異なる。炉に接する部分は比較的小型の扁平礫を石垣状に平積みしており、炉と一体のようにも見える。この部分の礫がどの段階で配されたものなのかは判然としないが、炉を特別視していることは明らかであろう。また東側の一部には、礫を階段状に据える部分がある。これはこの部分の床面が掘削時に高く残され、スロープ状に盛り上がっていたことに対応するものと考えられる。これは出入口と想定され、竪穴住居

としての機能を失った後にも出入口を意識していたことが伺われる。

さらに礫を配する際の特徴として、炉を含む住居内を清掃していることが挙げられる。炉は縁石を解体し、清掃後再び構築されるが、炉体土器は縦に分割された半分のみが埋め戻され、残りは埋設された土器に被せるように置かれていた。何らかの意図的な行為であろう。また、住居床面には生活時の堆積土が全く認められず、遺物なども出土していないことから、床面も清掃したものと考えられる。

以上のように、この段階では極めて丁寧に作業を行っていることがわかる。この段階で祭祀行為などを行っていた可能性も考えられよう。住居北壁際床面直上で出土した深鉢形土器の胴部片や、炉を挟んで対象の位置から出土した三角状土製品はそれに伴う遺物であろうか。

そして最後に竪穴が埋め戻され、配石遺構として機能するようになる。礫はあらかじめ旧地表面より10cmほど顔を出すように構築されているため、竪穴を埋め戻すと円形の配石遺構が出来上がる。その際、必要な土は住居から２～３ｍ離れた位置に土取り穴（ＳＫ2015・ＳＫ2019）を掘削して調達している。本遺構が位置している氾濫原は腐植土の発達していない地盤だったこともあり、竪穴埋め戻し後は土の違いによる明瞭な竪穴痕跡は残らなかったと推定される。

埋め戻しに際しては、炉体土器の約25cm直上に鉢形土器を正位に据えている。掘り込みは伴わないことから、竪穴埋め戻しと一連の作業のなかで埋められたものと考えられる。炉体土器のほぼ直上に位置するということは、この時点で炉体土器の記憶が鮮明に残っていたのだろう。この鉢形土器は、一部口縁部が欠損し、その破片が周辺に散らばることから、口縁部が地表に出ていたものと推測される。何かを供えるための容器であった可能性も考えられるが、その痕跡は残っていなかった。さらに炉を意識した施設として、竪穴埋め戻し後に掘り込まれているＳＫＰ2016がある。ＳＫＰ2016は複式炉の前庭部に置かれた石皿状の礫（Ｓ208）の直上に構築される。ただし深さは50cm程度で、礫とは直接接しない。しかし、Ｓ208を意識して構築した可能性は極めて高いといえよう。その用途は復元しがたいが、埋設された鉢形土器と共に、何らかの祭祀施設であったと考えられる。木柱状の施設を構築したのであろうか。

本遺構はその後、配石遺構として一定期間機能していたようである。時が経ち、礫が内側に倒れてきた北東部分には竪穴と礫の隙間にさらに小礫を入れ、修復を図っている。また、重複して構築されるＳＫ2013やＳＫ2014は明らかに本遺構を意識して構築しているものである。精神的な拠りどころとして、本遺構が機能していたと考えることができようか。

以上見てきたように、本遺構は形態の変化とともに、その性格も変容させている。その意義は推察しがたいが、その都度この遺構にかける手間を惜しまなかった人々の存在を考えると、この遺構が当時の人々にとって大きな意味を持つ構造物であったことは想像に難くないだろう。

小又川流域の類例

小又川流域には、壁際に礫が配される遺構が本遺構以外に２軒確認されている。姫ヶ岱Ｃ遺跡第４号住居跡（森吉町教委1999）と深渡Ａ遺跡ＳＩ29竪穴住居跡（秋田県教委2006）である。姫ヶ岱Ｃ遺跡の例は、報告書に「礫が住居の壁に沿って検出された」とのみ記載してあり、その詳細は定かではないことから、現状で比較検討が可能な資料としては、深渡Ａ遺跡で検出された１軒のみである。

深渡Ａ遺跡は、本遺跡から約300m上流の小又川左岸に位置する。壁際に礫が巡らされた竪穴住居跡ＳＩ29は、小又川への段丘崖際で検出された。本住居跡と同様に、遺跡内の最下面に位置し、上位面から見下ろすと遺構の全形を眺めることができる。竪穴の平面形は径約３ｍの不整隅丸方形で、炉は地床炉

から複式炉へ造り替えられている。調査段階では、礫は北東壁にのみ残存していたが、南西側にも礫の抜け痕が確認されたことから、本来は竪穴の壁全体に巡らされていたと推定される。また、住居の北東外側にも住居の同心円上に弧状の配石を構築している。残存している礫や抜け痕から、使用された礫は形状や大きさとも多様で、壁に礫を立てかけるのではなく、覆土に埋め込むような状態で設置されたと推測される。ＳＩ29は竪穴壁際を埋め戻しながら礫を据え、上屋に火をかけた後に、中心部分が埋め戻されていることから、本住居跡と同じく「竪穴住居→開口期→配石遺構」の３段階の変遷が認められる。時期は、覆土から出土した土器より縄文時代中期末（大木10式期）に比定されている。

ＳＩ29と本住居跡の新旧は、出土遺物から、本遺跡が旧いと想定する。もちろんＳＩ29出土土器は覆土からの出土であり、明確にＳＩ29の時期を示すものではない。しかしながら、本遺構が位置する氾濫原で、本遺構とほぼ同時に機能していたと考えられるＳＫ2012、ＳＫ2019、ＳＤ2007からの出土遺物を見ても、ＳＩ29出土遺物より新しい様相を示す遺物はない。このことから、ＳＩ29が埋め戻された段階では本遺構が位置する氾濫原は、すでに生活の場ではなかったと復元できよう。これらのことからも本遺構から深渡ＳＩ29への変遷が想定できる。

本住居とＳＩ29は、ともに「竪穴住居廃絶→礫構築→短期間の開口期（祭祀期間？）→竪穴埋め戻し→配石遺構」という変遷過程をたどる。ＳＩ29では開口期に住居の構築材に火をかけており、何らかの儀礼的な行為を行なっている。この儀礼の性格が、これらの住居を特徴づけるものとなろうが、現状では具体的な内容を復元しうる資料は得られていない。前後の時期も含め、小又川流域全体の様相を考慮した上で、これらの住居の性格を検討していく必要があろう。

周辺地域の様相

竪穴の壁に立石が巡らされる遺構は、同時期の東北地方北部では現在のところ類例は求められない。後期初頭には、岩手県遠野市の張山遺跡（遠野市立博物館1997）で、竪穴住居の壁際に礫を巡らす例が認められ、壁の土止めと解釈されている。また、竪穴住居と礫を円形に配する行為が融合したような例が、岩手県花巻市（旧東和町）の安俵６区遺跡で認められる（東和町教委1999、2000）。安俵６区遺跡では１・３・６号環状列石で、竪穴住居の形状をした環状列石が検出されている。また、岩手県北上市の横欠遺跡[註４]の13･15号住居跡では、覆土中から円形に配された礫が検出されている（北上市教委1997）。東北地方南部まで目を向けると、壁際に礫が巡らされる中期末葉～後期初頭の住居の例が福島県で検出されている。特に上川向遺跡３号住居跡（福島市教委ほか1997）や大枝館跡４号住居跡[註５]（福島市教委ほか2001）は、本遺構と形状が類似する。また、それらは壁に立てかけた扁平な大形礫の間に小形の礫を挟んでいるが、その構築方法は、本遺構の南壁側でも認められる。

形状のみをみれば、本遺構と福島県の例は密接な関係が伺われるが、福島県の例は壁に巡る礫が竪穴住居跡の壁体と考えられている[註６]。今後、中間地域での資料の増加を待ち、改めての検討が必要であろう。

（２）遺物について

今回の調査では、縄文時代前期中葉（第Ⅰ群）、中期前葉～中葉（第Ⅱ群）、中期後葉（第Ⅲ群）、後期（第Ⅳ群）、晩期前葉～中葉（第Ⅴ群）の土器が出土した。特に第Ⅰ群及び第Ⅱ群の資料がまとまって出土したため、ここではそれらについて所見を述べることとする。なお、中期後葉、後期、晩期前葉～中葉の資料については数が少ないため、それらについては第４章第２節をご参照いただきたい。

第Ⅰ群土器について

本群に属する土器は、おおむね円筒下層ｂ式に比定される土器群である。従来、円筒下層各式では、頸部に施される隆帯や縄側面圧痕を「区画文」と捉え、その上位を「口縁部文様帯」、下位を「胴部文様帯」と呼称することが多かった。しかし、第４章第２節２でも述べたように、本群においては、隆帯などの施文以前に地文縄文の施文方向により、文様帯がすでに区別されている例が一般的に認められた。そのため、文様帯は地文縄文で区別し、従来の「区画文」としての隆帯などは、文様帯の概念とは独立した文様と捉え、「頸部横位文」と呼称する。ここでは、このような観点から口頸部地文と頸部横位文の相関関係について述べる。

今回出土した土器群の口頸部文様は、結節回転文（綾絡文）、斜縄文、羽状縄文、縄側面圧痕、口縁部文様帯無しの５種類がある。そのうち縄側面圧痕、口縁部文様帯無しのものは資料が少なく、特徴をつかむことができないため、ここでは言及しない。

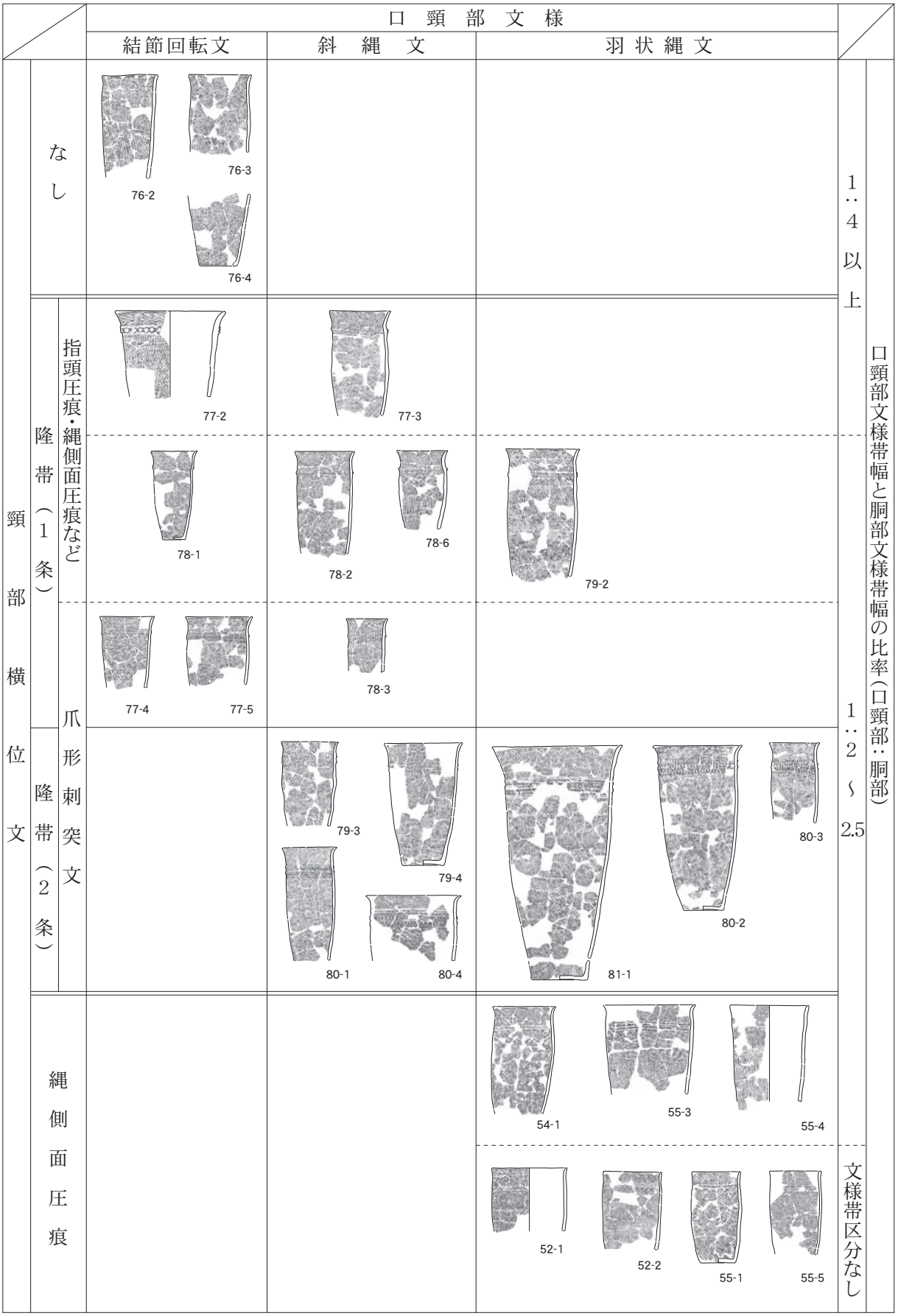
まず頸部横位文に着目すると、頸部横位文がないもの、１条の隆帯、２条の隆帯、縄側面圧痕の４種類が認められる。頸部横位文に用いられる隆帯は、厚さ４㎜前後のものと２㎜前後のものに大きく分けることができる。２㎜前後のものは隆帯を貼り付けた後に、隆帯上を撫でることにより平坦に仕上げるもの（第77図４など）が多く、１条の隆帯のうち爪形刺突文を伴うものと、２条の隆帯に認められる。４㎜前後のものは、隆帯を貼り付けた後の調整は施さず、隆帯の断面形状が三角形もしくは円形を呈するもの（第77図２・３）が多い。これは１条の隆帯にのみ認められる。

隆帯と共に用いられる文様は、１条の隆帯では斜縄文（第78図２・６）、単軸絡条体第１類（第77図３、第79図２）、爪形刺突文（第78図３・４）など様々であるが、２条の隆帯では爪形刺突文のみ（第79図３～第81図１）で、さらに沈線を巡らすもの（第80図４、第81図１）が認められる。前述したとおり、１条の隆帯のうち爪形刺突文を伴うもの（第77図４・５）は隆帯が薄く、それ以外のもの（第78図１・２など）は隆帯が厚い傾向が認められる。

次に、口頸部文様帯幅と胴部文様帯幅の比率について見てみる。頸部横位文がないもの、及び１条の隆帯のうち、口頸部文様帯と胴部文様帯の境界に頸部横位文が施文されるものは、口頸部文様帯幅と胴部文様帯幅の比率が１：４以上のものが主流である。[註７] 一方、頸部横位文が口頸部にタガ状に巡らされるもの（第78図１など）は、口頸部文様帯幅と胴部文様帯幅の比率が１：2.5程度のものが多く、口頸部文様帯幅が広いことがわかる。また、頸部横位文が縄側面圧痕のものには、文様帯を持たず、口頸部から胴部まで横位に同じ文様が施文されるもの（第54図３など）もある。

口頸部文様ごとに頸部横位文を見てみると、口頸部文様が結節回転文（綾絡文）のものでは、頸部横位文がない、もしくは１条の隆帯が施され、２条の隆帯や、縄側面圧痕は認められない。口縁部文様が斜縄文のものでは隆帯が用いられ、頸部横位文が施文されないものや縄側面圧痕は認められない。羽状縄文では隆帯もしくは縄側面圧痕が用いられ、頸部横位文が施文されないものは認められない。

以上の関係を図（第127図）に表すと、それぞれが連鎖的に特徴を共有することがわかる。その原因としては、時間差や集団差、個人差などが考えられる。しかしながら前述したとおり、今回出土した第Ⅰ群の土器群は、二次堆積層に混入した状態で出土したものであり、出土状況からの検証は困難である。よってここでは、文様の相関関係を提示するに留めたい。



第127図　第Ⅰ群土器文様属性図

第Ⅱ群土器について

本群に属する土器は、円筒上層式（Ａ類）と大木式（Ｂ類）に大きく分けられる。しかし、それらは明確に分けられるものではなく、それぞれにお互いの影響が認められる個体がある。例えば今回Ａ類とした第84図６の胴部には大木７式に多く見られる縦位の結節回転文が施される。他にも第83図１の胴部に施される縦位の縄側面圧痕も、同様の影響を受けている可能性が考えられる。一方Ｂ類の第89図５は、大木７ｂ式の文様モチーフを構成する隆線上に、円筒上層ｂ式で特徴的にみられるＣ字状縄側面圧痕が施されている。また、第88図２・３、第89図１・２では胴部文様を横もしくは斜方向に施文しており、円筒上層式の技法が用いられていることがわかる。特に第89図１は、一見すると大木７ｂ式の特徴である縦方向の結節縄文のようであるが、単節縄文を横方向に施文したのち、結節回転文を縦に施文する。つまり、大木７ｂ式の文様を円筒上層式の施文技法によって模倣した土器である。

本遺跡は北緯40°02′42″に位置する。本遺跡の土器の様相は、まさしく円筒式土器分布圏と大木式土器分布圏の境界の状況を示す良好な資料といえよう。

また本群の土器には、軟質で色調がにぶい黄橙～明黄褐色を呈する特徴的な胎土をもつものがある。第83図１・２・４、第84図５・６、第86図４、第88図３、第89図６、第90図１がその類で、Ａ類、Ｂ類ともに認められる。しかしこの一群は、そのほとんどが文様が崩れているか、簡略化されており、円筒上層式、大木式の典型的なものはない。比較的小形で煮沸痕が認められないことから、他の土器と用途が異なっていた可能性が考えられるが、なぜこのような一群が存在するのかは定かではない。しかしながら、これらも円筒式と大木式の境界に位置する本遺跡を特徴づける資料となりうる可能性があろう。

註１　本章で用いる平成８年度調査成果は（森吉町教委1997）から、平成９年度調査成果は（秋田県教委1999）から引用する。

註２　向様田Ｅ遺跡ＳＩ20の埋没過程は報告書では言及されていないが、南東壁際や床面直上に地山由来土と思われる褐色土が堆積しており、それらを含む覆土全体に焼土粒・焼土塊が含まれることから、一括の人為堆積と推定する。

註３　日廻岱Ｂ遺跡ＳＩ2333竪穴住居跡（秋田県教委2005）では、住居南壁際床面直上から大洞Ｂ１式の台付鉢形土器が横倒しの状態で出土している。これも類例となる可能性があろう。

註４　報告書（北上市教委1997）によれば、13号住居跡は「住居跡縁辺に添うかたちで多くの礫群が検出されたが、（中略）いずれも床面からは浮いた状態で検出されており、住居跡埋没過程で遺棄されたものと考えられる。」（P.13 L.４～６）とあり、15号住居跡については「調査時点では配石である可能性も考えられたが、礫上面・下面レベルとも一定しておらず、現時点では人為的な遺構と捉えるのには問題があると考えた」（P.15 L.６～８）とあり、検出された礫に作為性は認めていない。

註５　第４号住居跡は北西壁のみ礫が確認されているが、「掘り込みの際に南側の礫の一部を除去してしまっており、本来は礫は全周していたものと考えられる」（福島市教委ほか2001 P.21 L.21～22）とある。また、４号住居跡では、確認面において、環状に巡る多量の礫群が検出されている。これについては「住居を埋め戻す際に意図的に環状の配石を作ったもの」（福島市教委ほか2001 P.22 L.８）とされている。

註６　佐藤啓氏は福島県内で検出された石壁を持つ住居の形態や年代にそれぞれ相違があることを指摘し、「全てが同じ目的で構築されたとはいいがたい」（福島県教委ほか1999 P.400 L.27～28）としている。

註７　頸部横位文がないもの、及び１条の隆帯のうち、口頸部文様帯と胴部文様帯の境界に頸部横位文が施文されるものは、完形に復元できた個体がないため、比率は推定である。なお口縁部から胴部下半まで遺存する第76図２、第77図２・３は口頸部文様帯幅と胴部文様帯幅（残存）の比率が１：４～５である。

引用・参考文献

秋田県教育委員会　1999『深渡遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』
秋田県文化財調査報告書第286集

秋田県教育委員会　2000『姫ヶ岱Ｄ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』
秋田県文化財調査報告書第300集

秋田県教育委員会　2001『桐内Ｂ遺跡・桐内Ｄ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』
秋田県文化財調査報告書第318集

秋田県教育委員会　2002『桐内Ａ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』
秋田県文化財調査報告書第334集

秋田県教育委員会　2003『向様田Ｂ遺跡・向様田Ｃ遺跡・向様田Ｅ遺跡
－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－』　秋田県文化財調査報告書第347集

秋田県教育委員会　2005『日廻岱Ｂ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ－』
秋田県文化財調査報告書第394集

秋田県教育委員会　2006『深渡Ａ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅦ－』
秋田県文化財調査報告書第408集

河田弘幸　2004「小又川流域における縄文時代の竪穴住居跡について（１）」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第18号』

河田弘幸　2005「小又川流域における縄文時代の竪穴住居跡について（２）」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第19号』

北上市教育委員会　1997『横欠遺跡』　北上市埋蔵文化財調査報告第30集

東和町教育委員会　1999『安俵６区Ⅳ遺跡発掘調査報告書　平成10年度(1998)』　東和町文化財調査報告書第20集

東和町教育委員会　2000『安俵６区Ⅴ遺跡発掘調査報告書－遺構編－　平成12年度(2000)』
東和町文化財調査報告書第26集

遠野市立博物館　1997『縄文の暮らしと精神文化』

福島県教育委員会　財団法人福島県文化センター　建設省東北地方建設局摺上川ダム工事事務所　1999
『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅶ　八方塚Ａ遺跡(第１次調査)』　福島県文化財調査報告書第350集

福島市教育委員会　財団法人福島市振興公社　建設省東北地方建設局摺上川ダム工事事務所　1997
『獅子内遺跡　西ノ前遺跡　西ノ向Ｂ遺跡　西ノ向Ｃ遺跡　入トンキャラ遺跡　上川向遺跡
摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告５』　福島市埋蔵文化財報告書第97集

福島市教育委員会　財団法人福島市振興公社　国土交通省東北地方整備局摺上川ダム工事事務所　2001
『大枝館跡　入トンキャラ遺跡　摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告９』
福島市埋蔵文化財報告書第142集

森吉町教育委員会　1997『平成８年度　埋蔵文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』

森吉町教育委員会　1999『平成10年度　埋蔵文化財発掘調査報告書　上悪戸Ｂ・Ｃ遺跡　姫ヶ岱Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡
～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』

森吉町教育委員会　2002『平成12年度　埋蔵文化財発掘調査報告書　二重鳥Ｄ・Ｅ・Ｆ遺跡
～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』

森吉町教育委員会　2003『平成13年度　埋蔵文化財発掘調査報告書　二重鳥Ｃ・Ｇ遺跡
～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』

高位段丘面南西部全景（西から）

低位段丘面沢状部分全景（東から）

図版2　SI5001竪穴住居跡

ＳＩ5001完掘（南から）

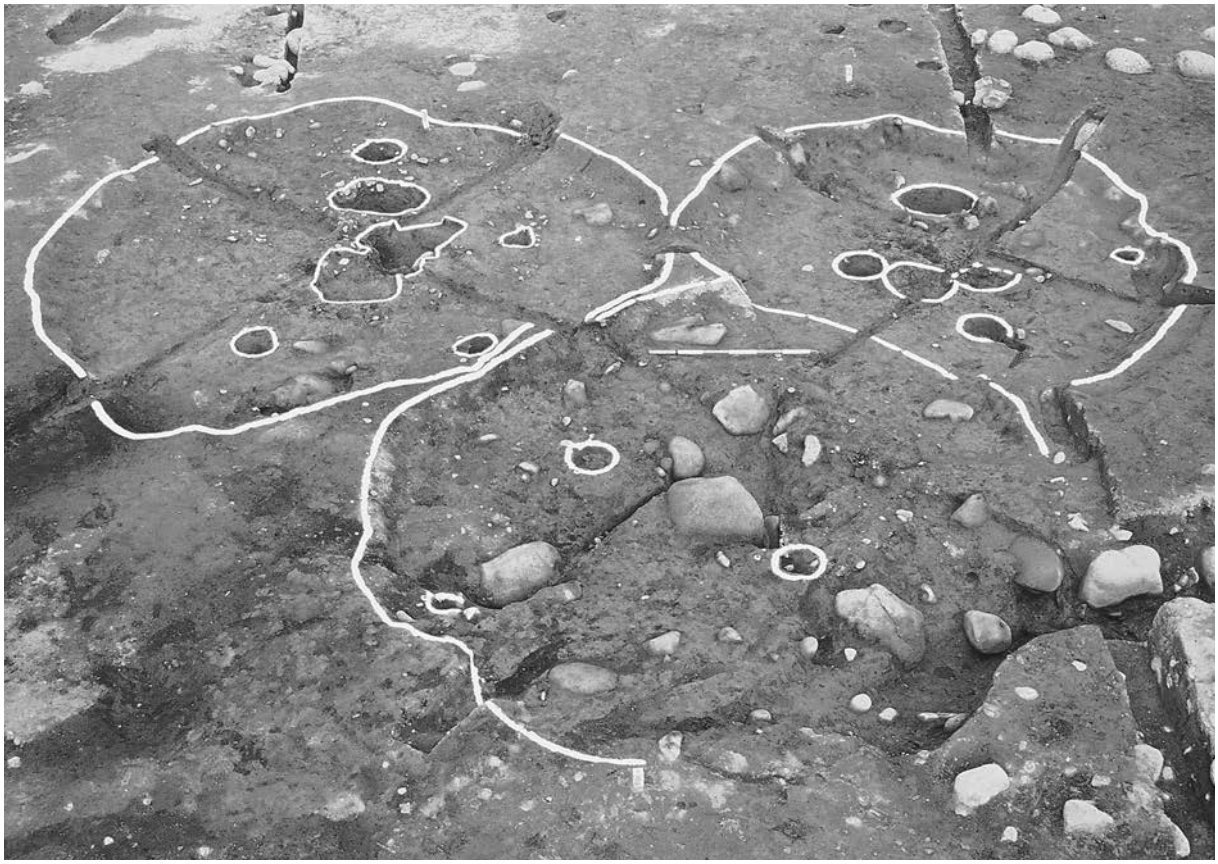
ＳＩ5001A－B断面（南から）

ＳＩ5001炉断面（西から）

ＳＩ5001調査風景（南東から）

ＳＩ5001調査風景（南西から）

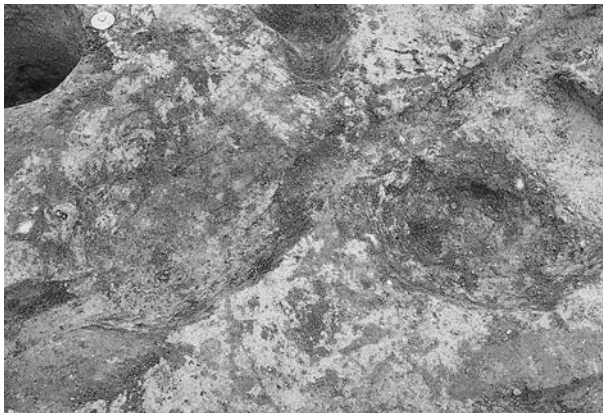
図版3　SI5003・5004・5005竪穴住居跡



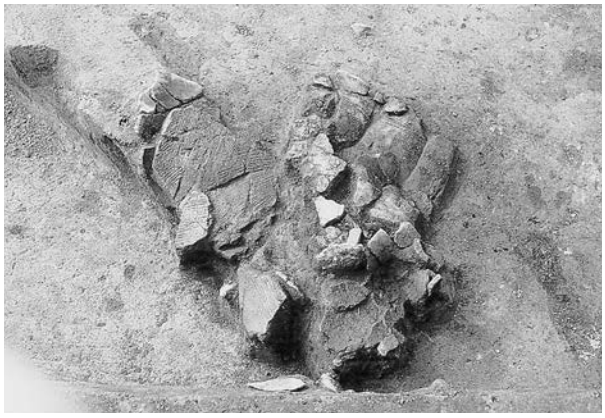
ＳＩ5003・5004・5005完掘（西から）

ＳＩ5003G－H断面（南東から）

ＳＩ5003C－D断面（南西から）



ＳＩ5003炉完掘（南西から）



ＳＩ5003遺物出土状況（南東から）

図版4　SI5004・5005・5012竪穴住居跡

ＳＩ5004炉断面（北東から）

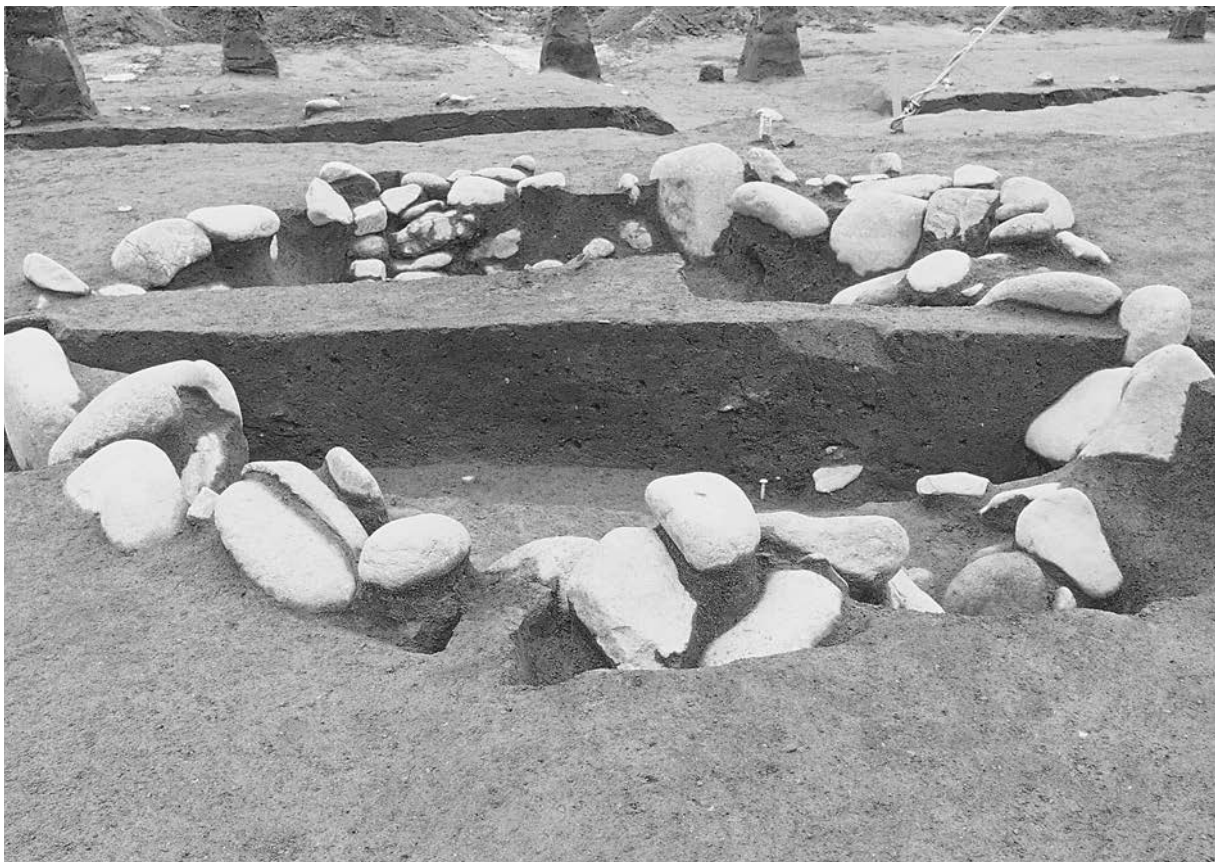
ＳＩ5005炉完掘（南西から）

ＳＩ5005遺物（55－1）出土状況（北から）

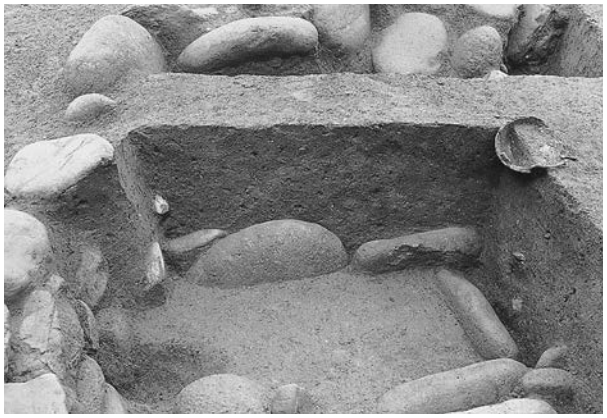
ＳＩ5005調査風景（南から）

ＳＩ5012完掘（西から）

図版5　SI2001竪穴住居跡（1）



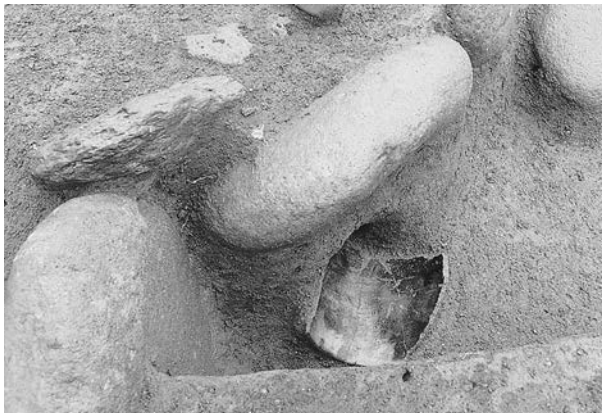
ＳＩ2001Ｉ－J断面（南から）



ＳＩ2001M－Ｎ北側断面（西から）

ＳＩ2001東西ベルト西側断面（北から）

ＳＩ2001遺物（56－10）出土状況（北から）

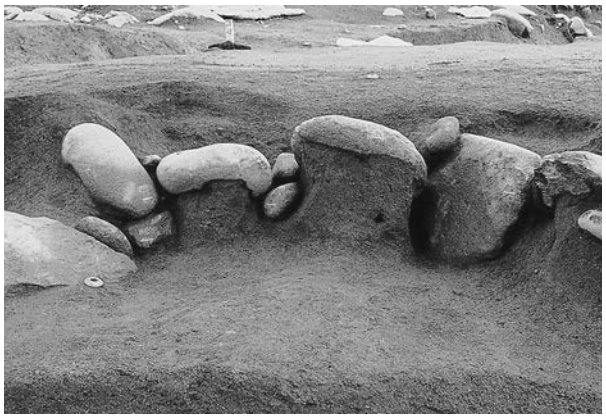


ＳＩ2001遺物（56－14）出土状況（西から）

図版6　SI2001竪穴住居跡（2）

ＳＩ2001北西壁礫検出状況（南東から）

ＳＩ2001南壁礫検出状況（北から）

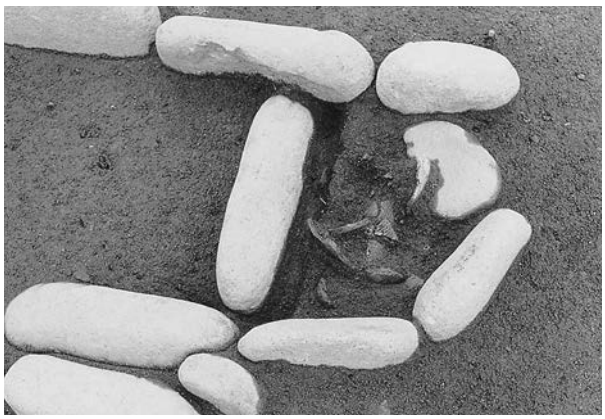


ＳＩ2001南壁礫検出状況（北から）

ＳＩ2001炉北壁礫検出状況（南から）

ＳＩ2001現況（東から）

SI2001炉確認（東から）

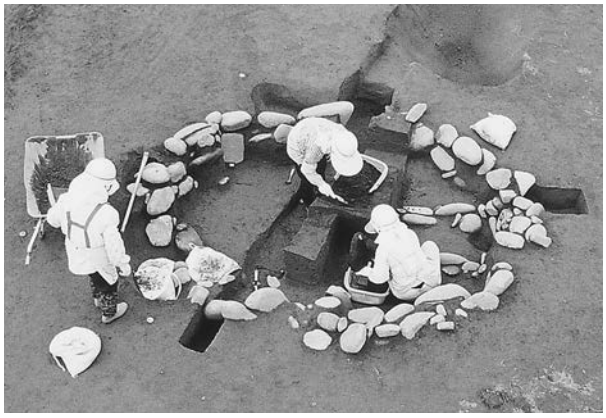

SI2001炉埋設土器（56－9）確認（西から）

SI2001炉遺物（56－9）出土状況（南から）

SI2001炉埋設土器（56－9）側面（西から）

SI2001調査風景（北西から）

SI2001炉埋設土器（56－9）断面（西から）


SI2001調査風景（東から）

SI2001完掘（東から）

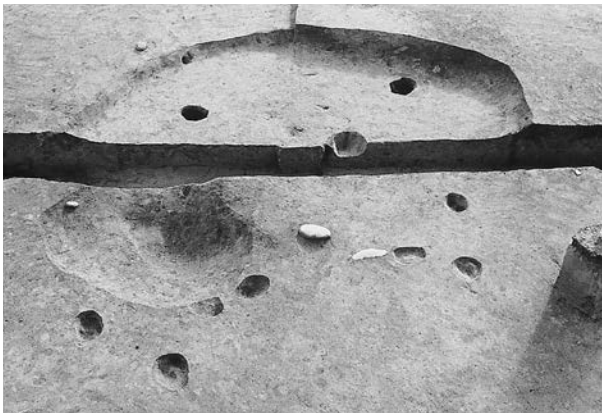
図版8　SI5013・2004竪穴住居跡

ＳＩ5013完掘（南から）

ＳＩ5013A－B断面（南西から）

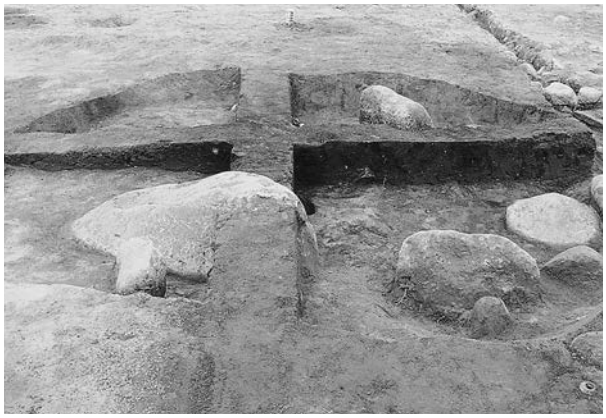
ＳＩ5013C－D断面（東から）

ＳＩ5013調査風景（東から）



ＳＩ2004完掘（北東から）

ＳＩ5010完掘（北から）



ＳＩ5010Ｓ－Ｎ断面（東から）

ＳＩ5010E－W断面（北から）

ＳＩ5010炉断面（北から）

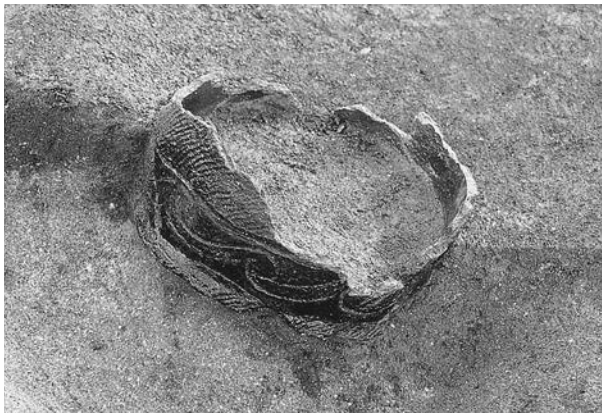
ＳＩ5010調査風景（西から）

図版10　SI3266竪穴住居跡

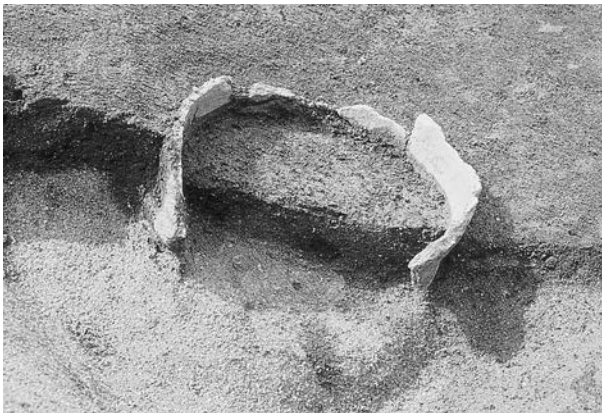
ＳＩ3266完掘（北東から）

ＳＩ3266C－D断面（西から）

ＳＩ3266ＳR01（57－7）確認（北東から）

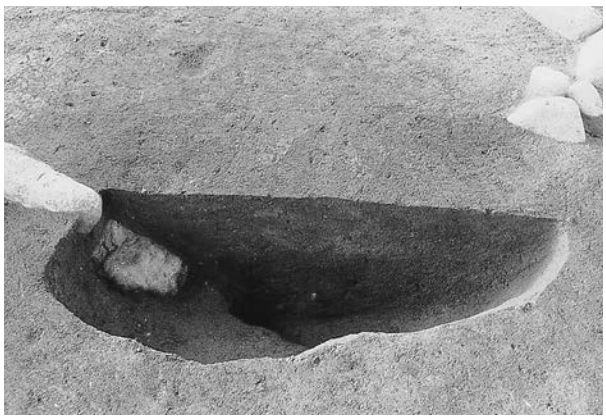


ＳＩ3266ＳR01（57－7）側面（北東から）



ＳＩ3266ＳR01（57－7）断面（北東から）

図版11　ＳＫ2013・2014・5009・5017土坑


ＳＫ2013断面（南東から）

ＳＫ2014完掘（西から）

ＳＫ2013完掘（北西から）

ＳＫ5017Ａ－Ｂ断面（南西から）

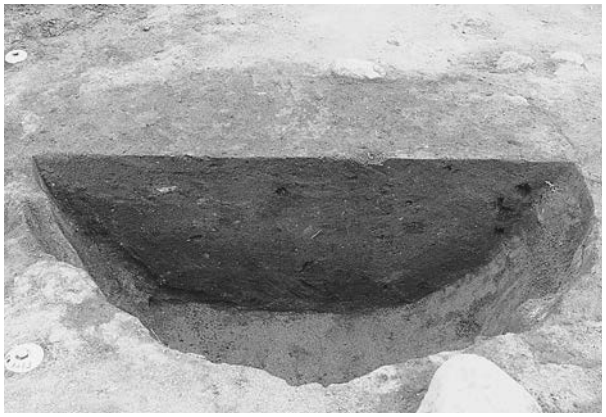
ＳＫ5009断面（北から）

ＳＫ5017礫出土状況（南西から）

ＳＫ5009礫出土状況（北から）

ＳＫ5017調査風景（南西から）

図版12　SK3213・3261・3262・3267土坑


ＳＫ3213断面（南西から）

ＳＫ3261断面（北西から）

ＳＫ3213完掘（南西から）

ＳＫ3261完掘（北西から）

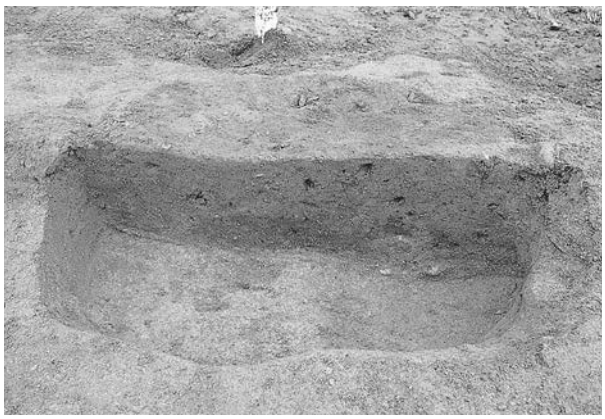
ＳＫ3262断面（西から）

ＳＫ3267断面（南東から）

ＳＫ3262完掘（西から）

ＳＫ3267完掘（南東から）

ＳＫ3282断面（北から）


ＳＫ3286断面（南西から）

ＳＫ3282完掘（北から）

ＳＫ3286完掘（南西から）

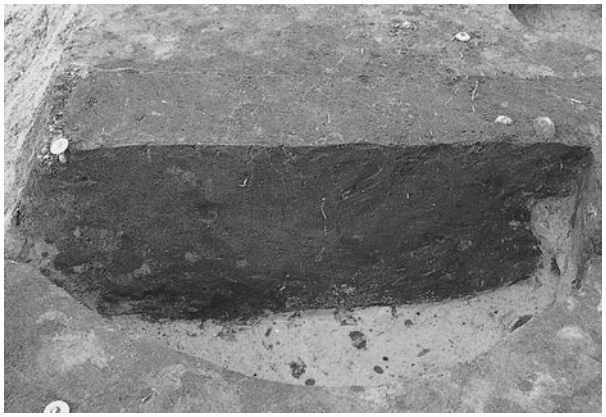
ＳＫ3289断面（南から）

ＳＫ3290遺物出土状況（南西から）

ＳＫ3289遺物出土状況（南から）

ＳＫ3290遺物出土状況（南西から）

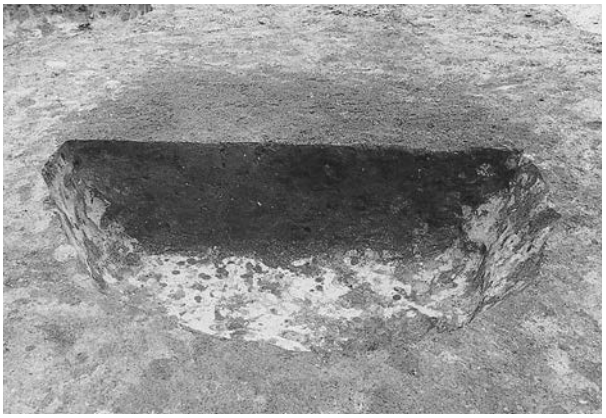
図版14　SK3291・3292・3294・3295土坑



ＳＫ3291断面（西から）

ＳＫ3291完掘（西から）

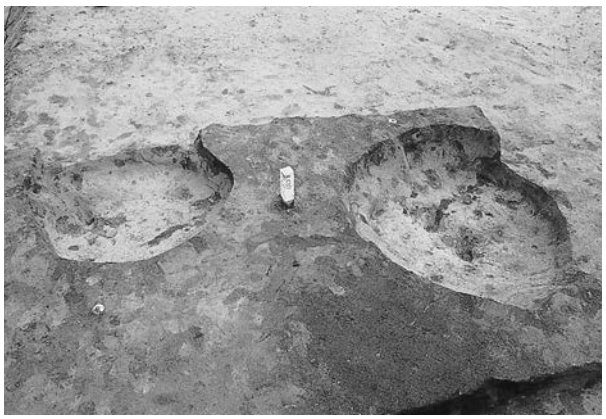
ＳＫ3294断面（北東から）



ＳＫ3292断面（西から）

ＳＫ3295断面（南東から）

ＳＫ3292完掘（西から）



ＳＫ3295（左）ＳＫ3294（右）完掘（北西から）

ＳＫ3292遺物（61－10）出土状況（西から）

図版15　ＳＤ２００７・３３１５溝跡・ＳＱ５０２５配石遺構・ＳＮ２０３０焼土遺構

ＳＤ2007遺物出土状況（北東から）

ＳＤ3315完掘（南西から）

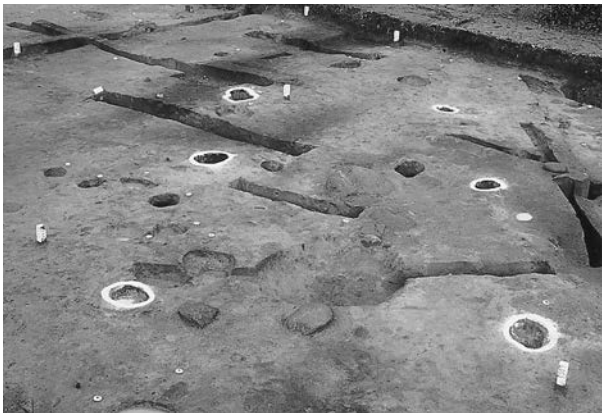
ＳＱ5025確認（南西から）

ＳＮ2030現況（南西から）

ＬＯ73遺物出土状況（西から）

図版16　ＳＫＩ５０６４竪穴状遺構・ＳＢ３２５９掘立柱建物跡・ＳＱＳ12石棺様組石

ＳＫＩ5064完掘（南から）



ＳＢ3259完掘（南東から）

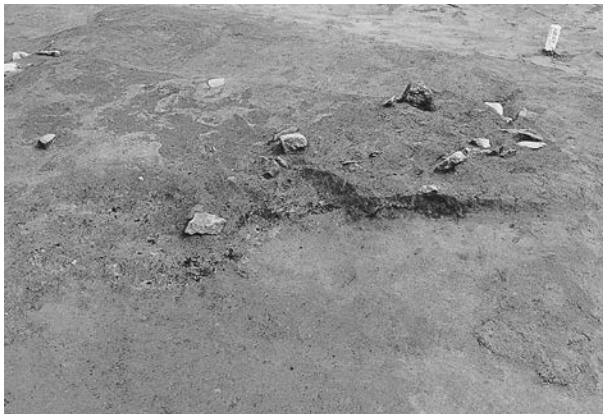
ＳＱＳ12現況（西から）

ＳＱＳ12調査風景（南西から）

ＳＱＳ12完掘（北から）

図版17　ＳＱＮ2025石組炉

ＳＱＮ2025完掘（南東から）



ＳＱＮ2025確認（西から）

ＳＱＮ2025炉床断面（西から）

ＳＱＮ2025Ａ－Ｂ断面（西から）

ＳＱＮ2025Ａ－Ｂ断面（東から）

図版18　遺構内出土土器類（1）

52－1

S I 5001

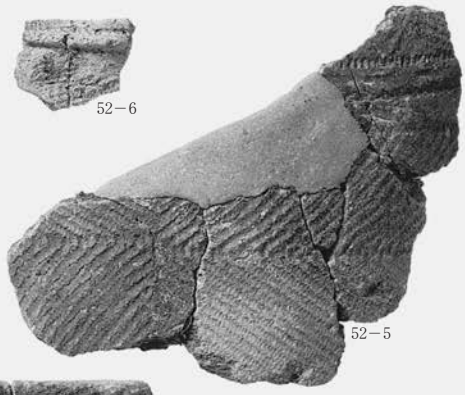
52－2

S I 5001

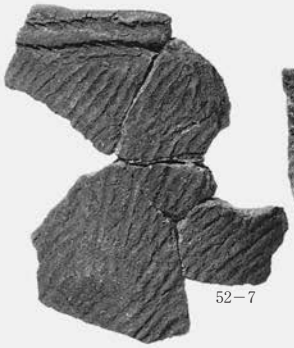
52－3

52－4

52－6

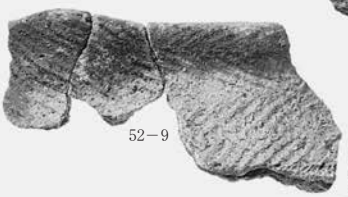


52－5



52－7

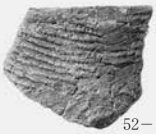
52－8



52－9

52－10

52－11

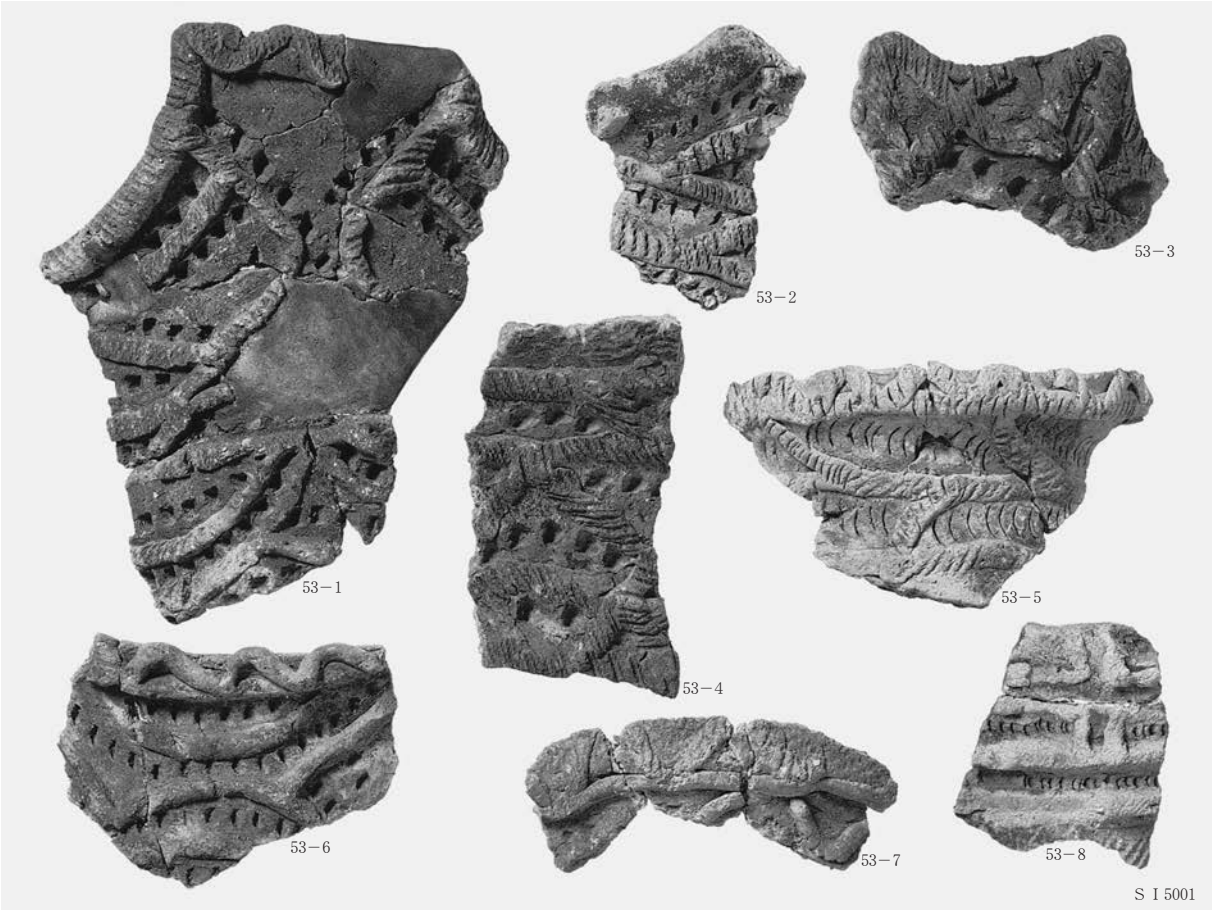


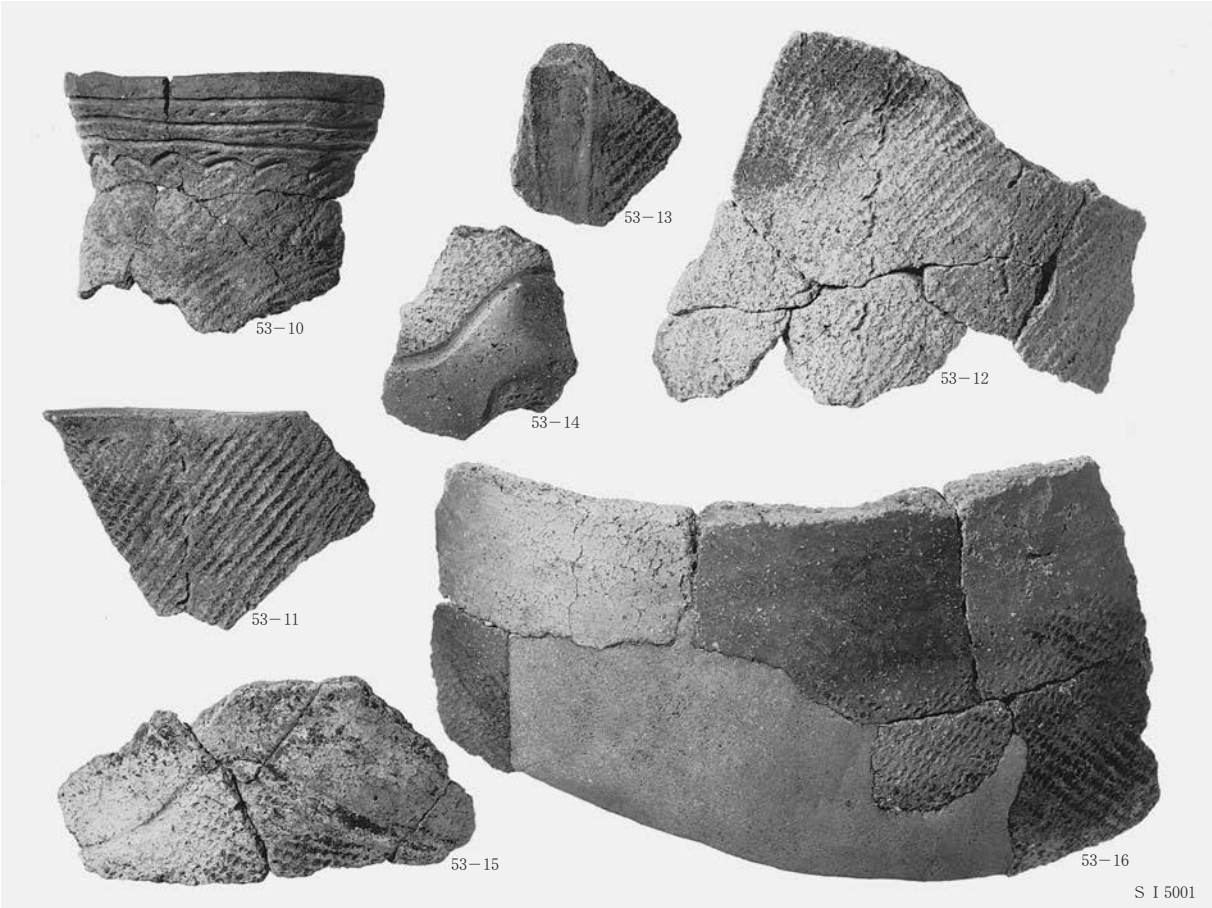
52－12

52－13

52－14

S I 5001


53－1
53－2
53－3
53－4
53－5
53－6
53－7
53－8
S I 5001


53－10
53－13
53－12
53－14
53－11
53－15
53－16
S I 5001

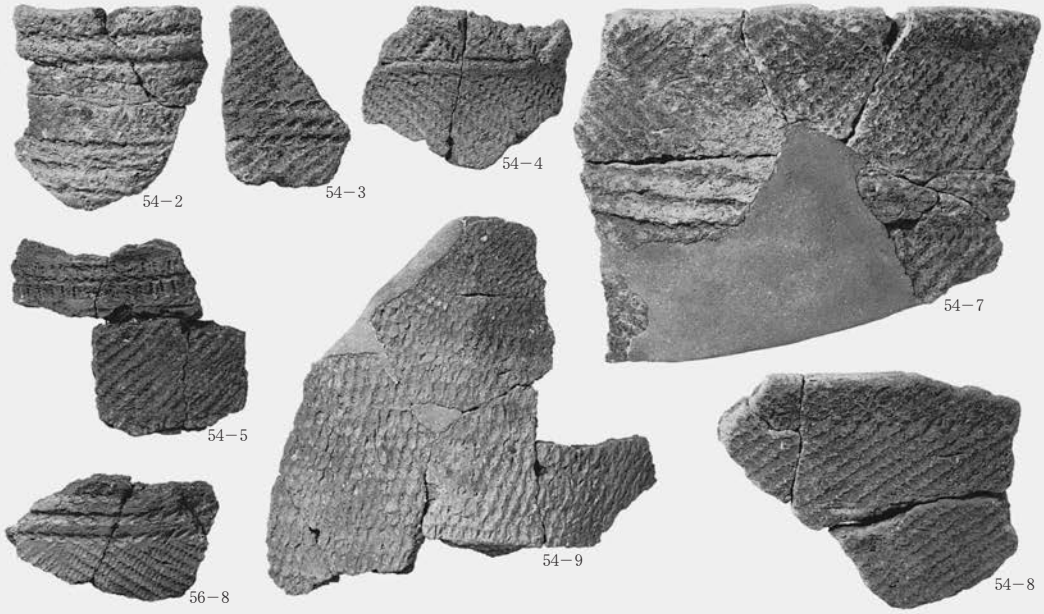
図版20　遺構内出土土器類（3）

S I 5005

S I 5005

S I 5005

S I 5005



S I 5003

図版22　遺構内出土土器類（5）

56－9

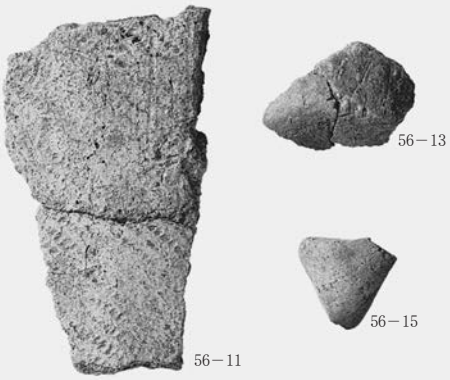
S I 2001

56－10

S I 2001

56－14

S I 2001
S K2015
S K2019

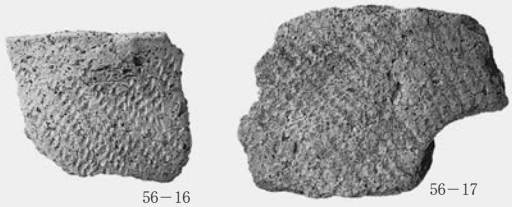


56－13

56－15

56－11

S I 2001

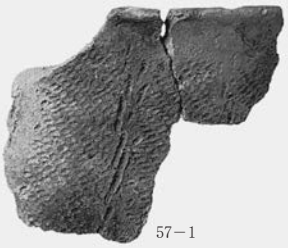


56－16

56－17

56－18

S I 2004



57－1

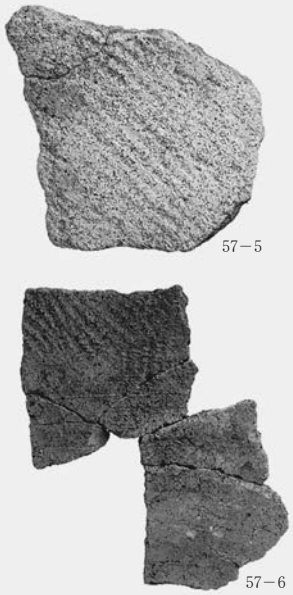
57－3

S I 5013

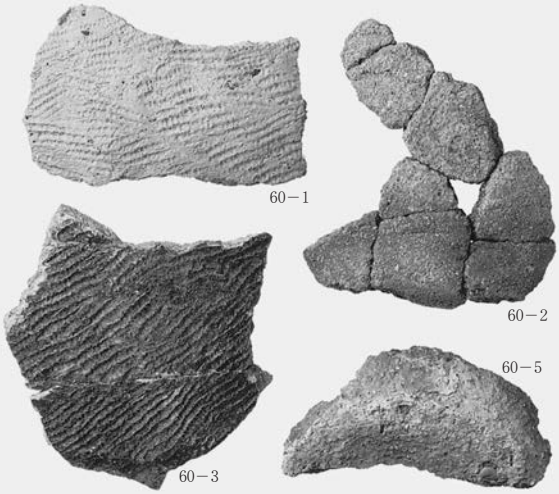
57－2

S I 5013

S I 3266

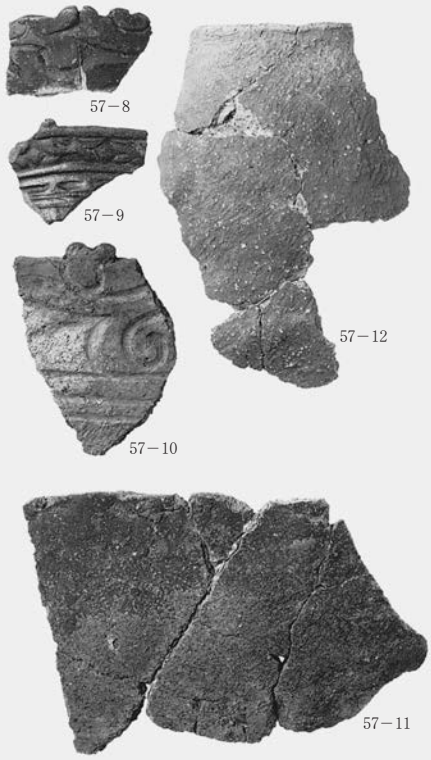


S I 5010

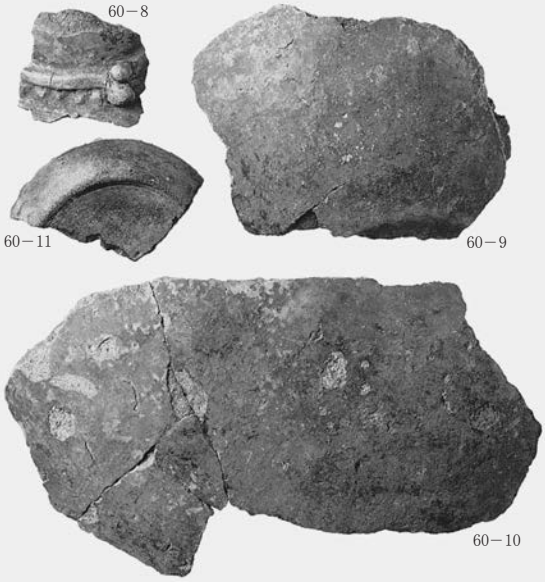


S K3101・3262・3263

S K3281



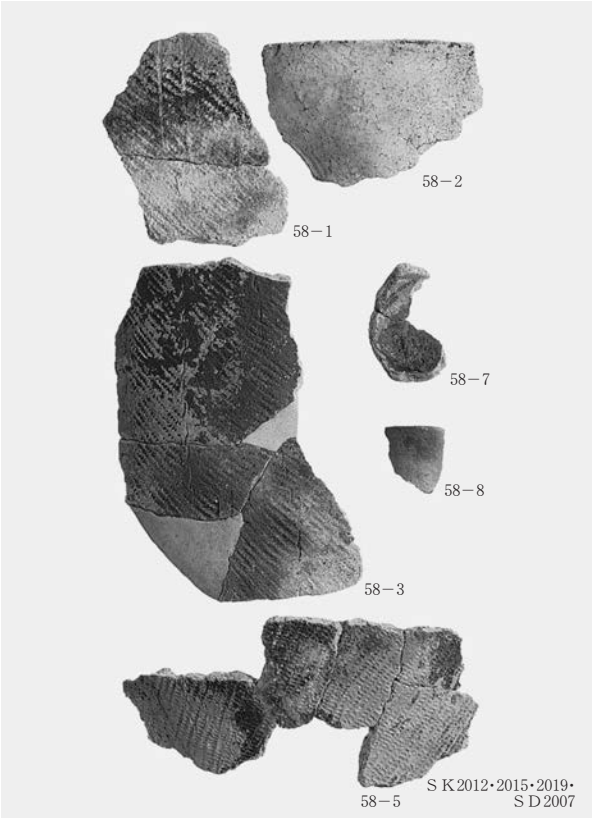
S I 3266

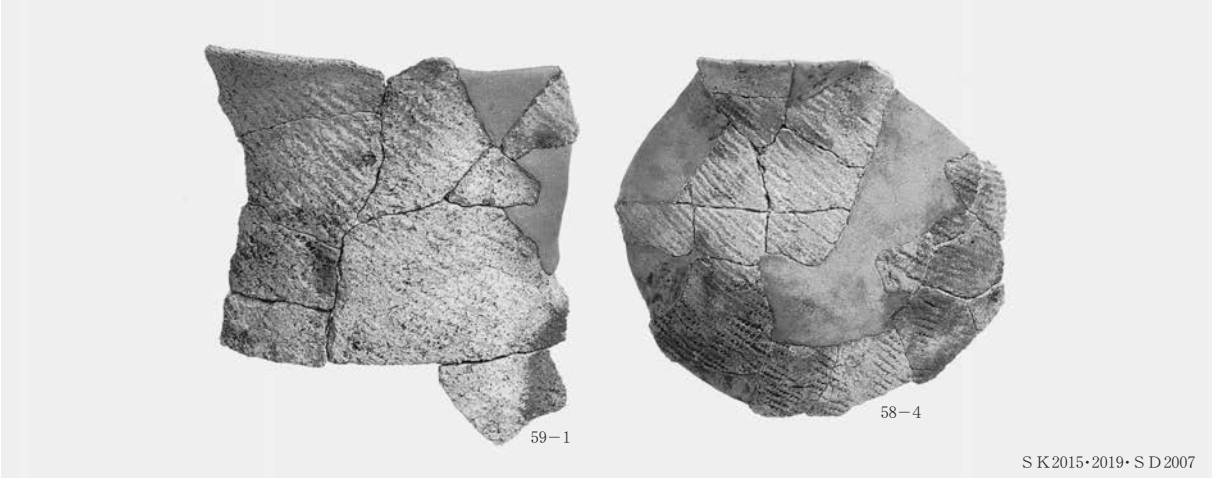


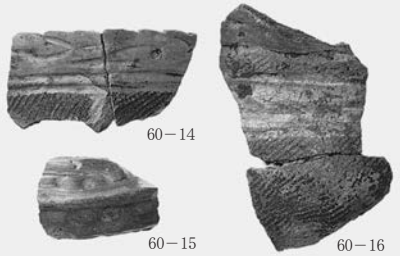
S K3267

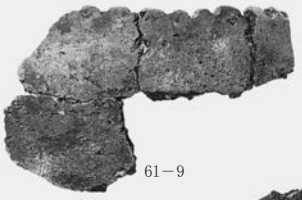
S K3267

図版24　遺構内出土土器類（7）





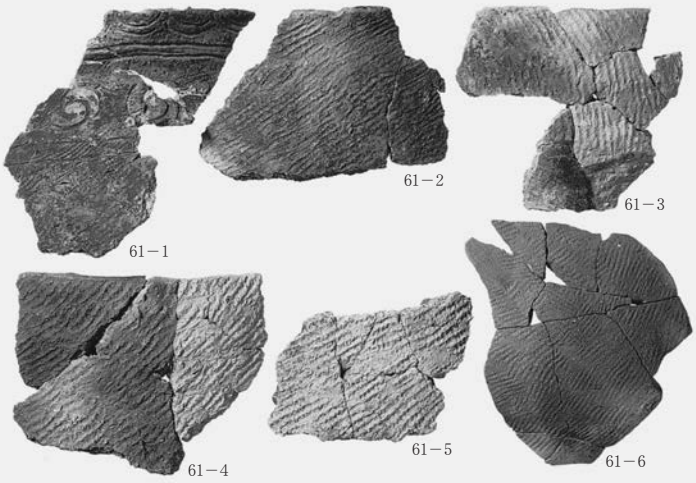




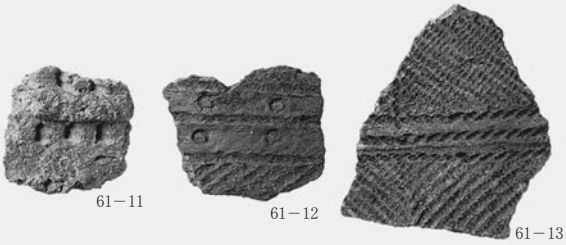
S K3290・3294

S K3291

S K3292



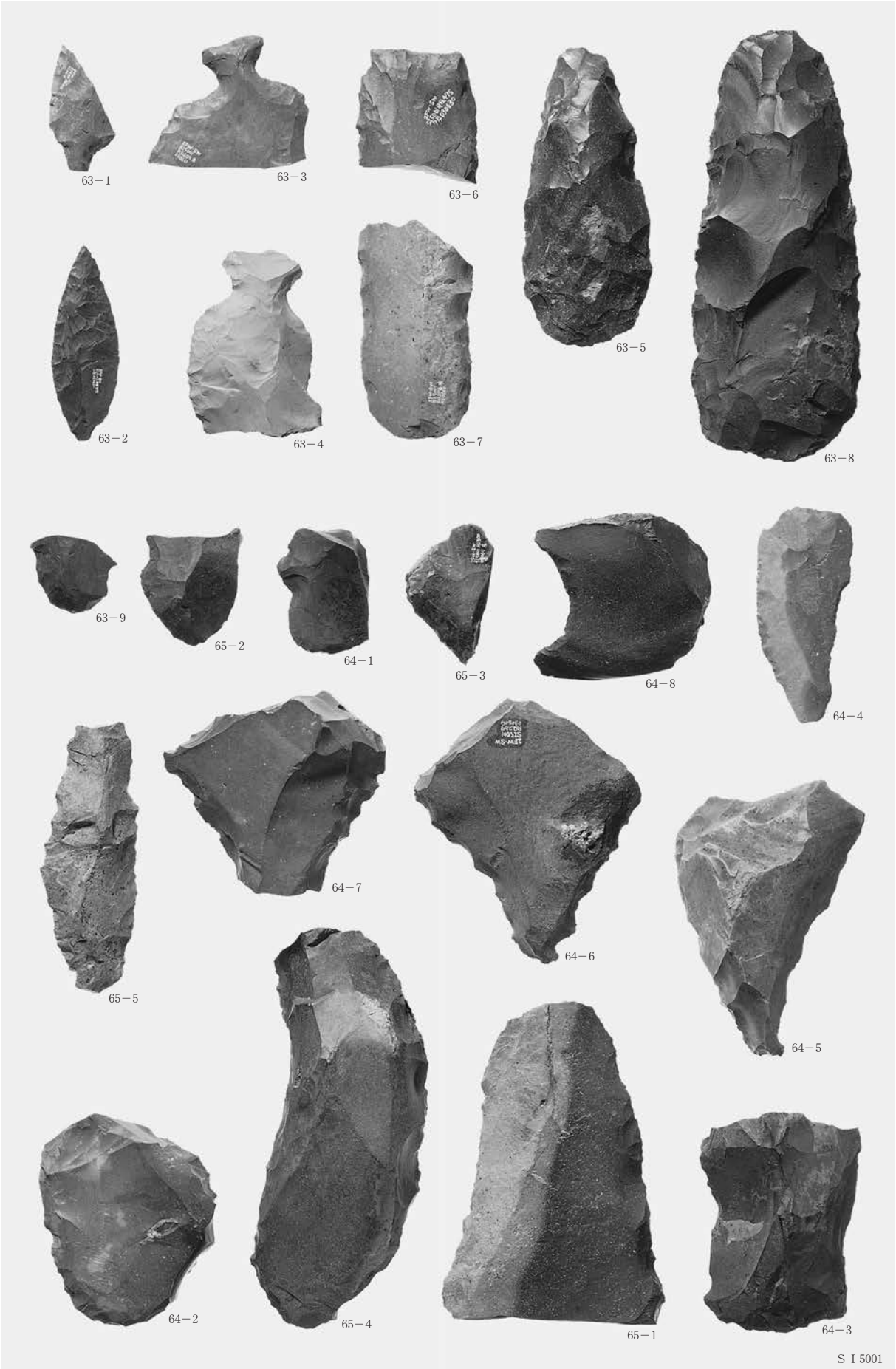
S K3282



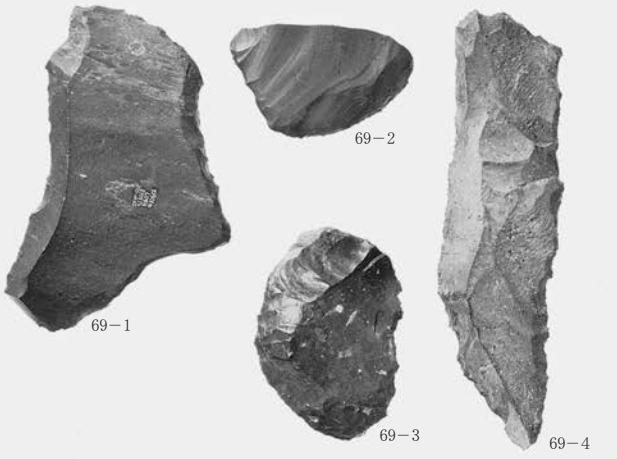
S K5007・5018・5024

S D2007

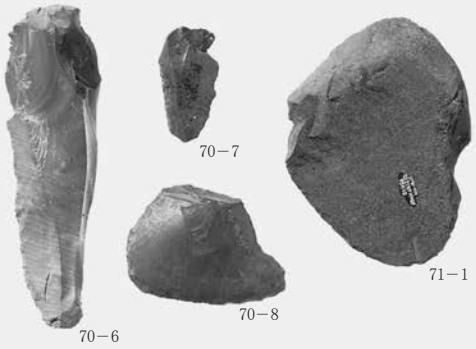
図版26　遺構内出土石器類（1）



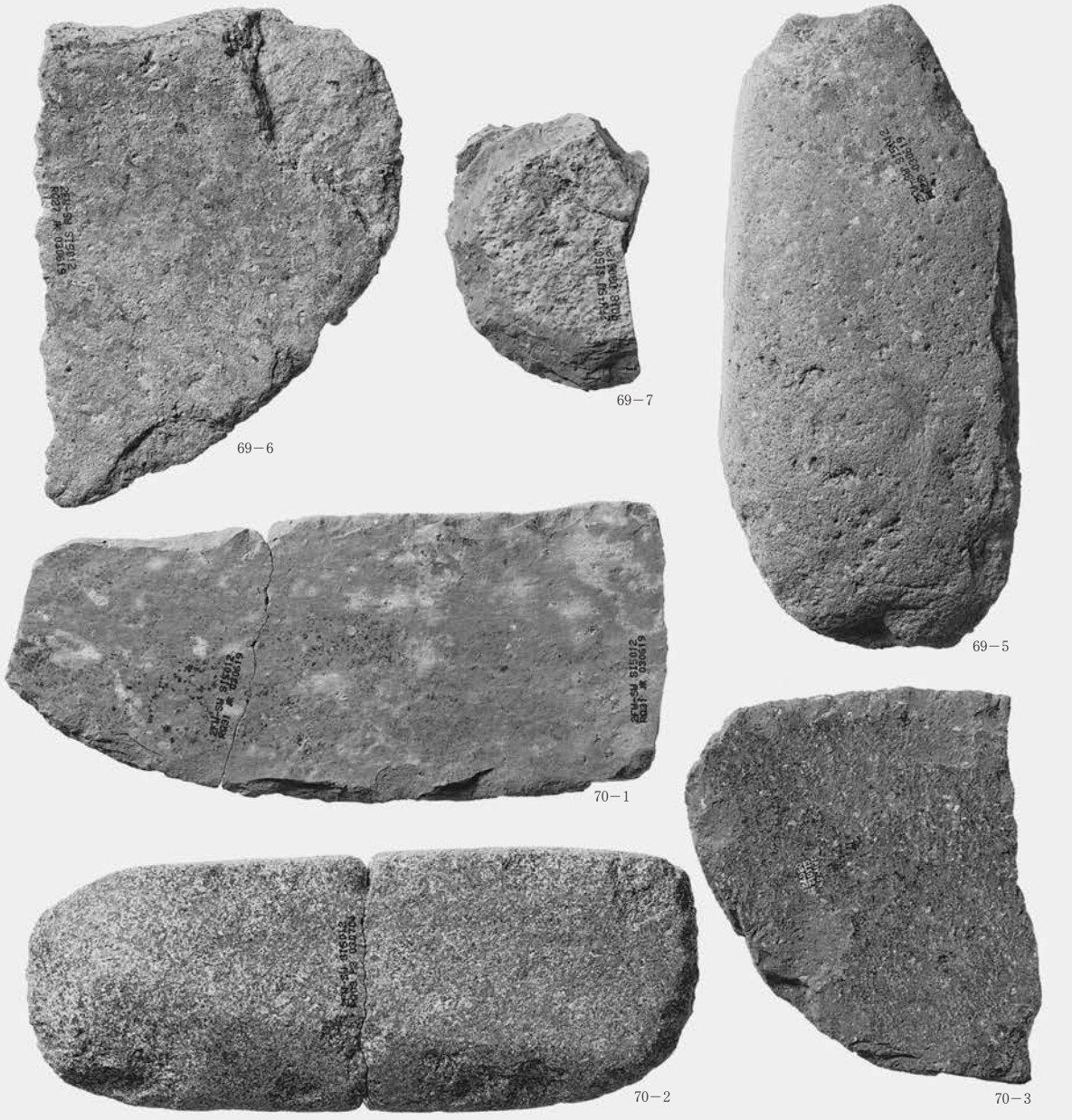
図版27　遺構内出土石器（2）



S I 5012

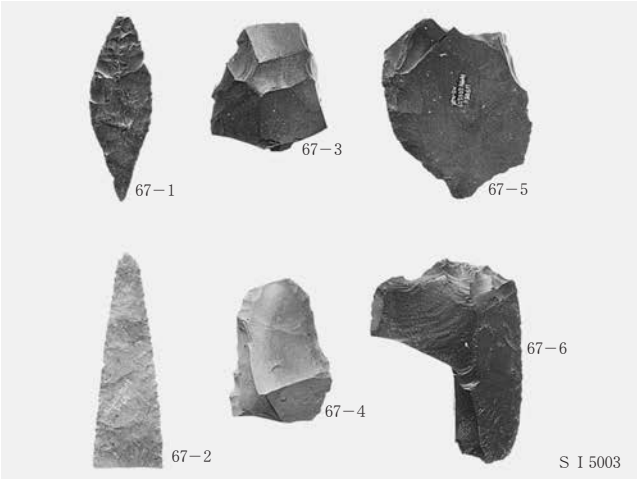


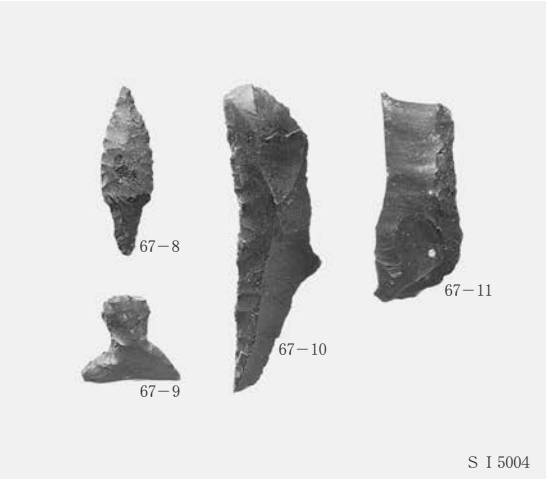
S I 2001・5013・2004

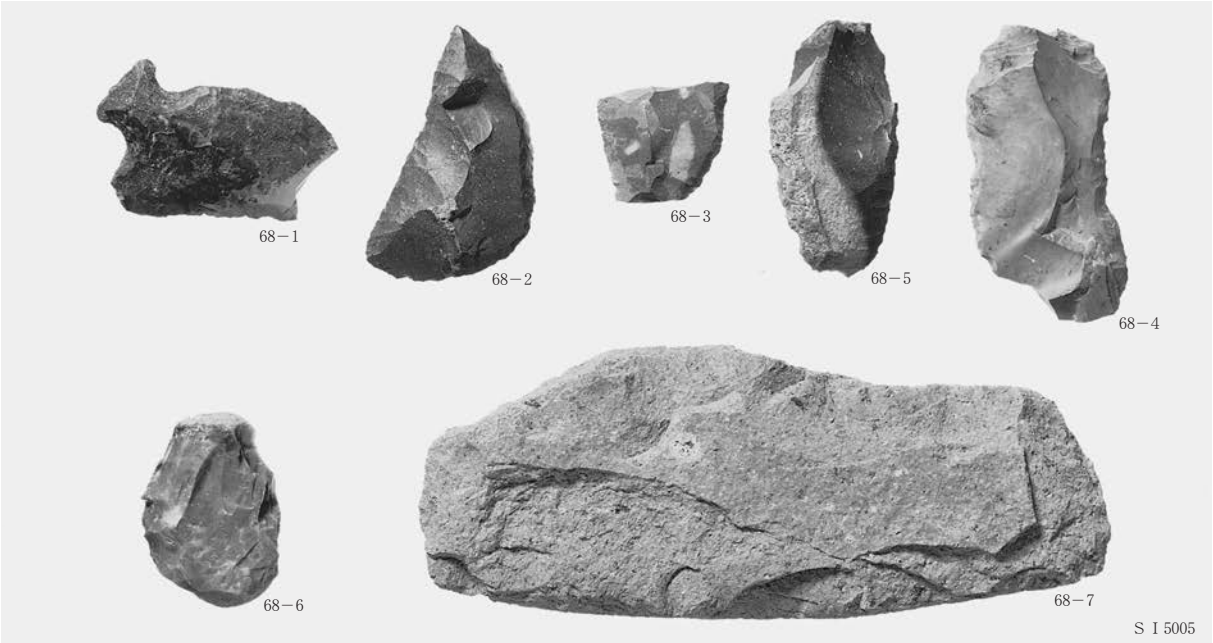


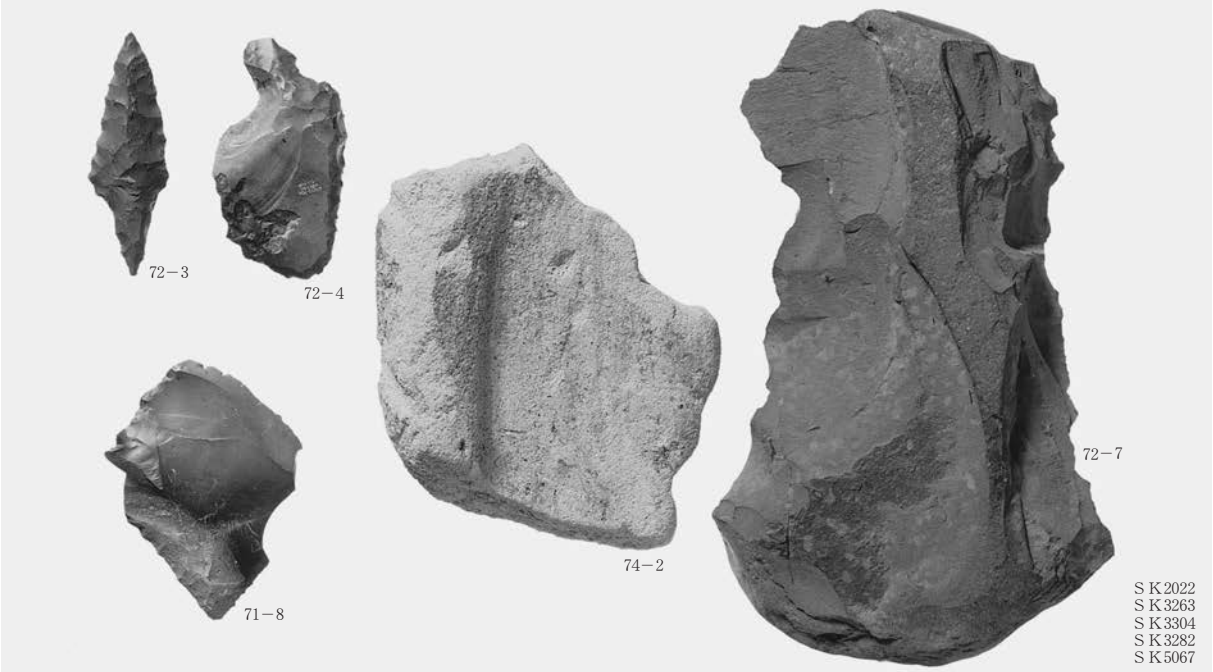
S I 5012

図版28　遺構内出土石器類（3）









75－1

75－2

75－3

75－4

図版30　遺構外出土土器類（2）

76－1

76－2

76－3

76－4

77－1

77－2

77－3

77－4

77－5

78－1

78－3

図版32　遺構外出土土器類（4）

78－4

78－5

78－6

79－2

79－3

79－4

80－1

80－3

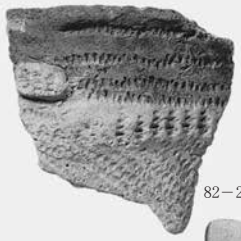
図版34　遺構外出土土器類（6）

80－2

81－1

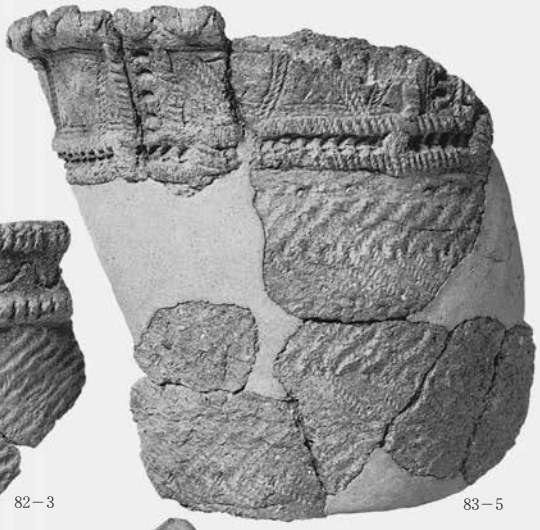
82－1

82－5

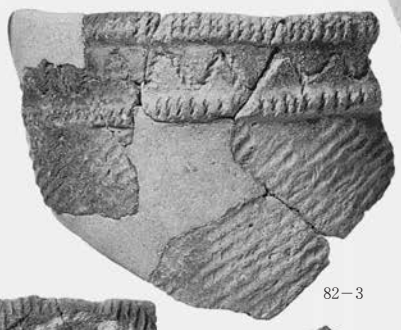


82－2

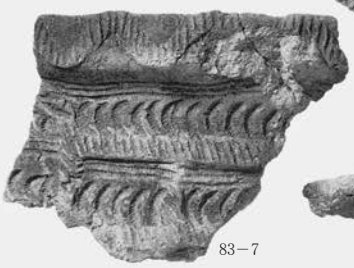
83－4



83－5



82－3



83－7

83－8

図版36　遺構外出土土器類（8）

82－4

83－1

83－2

83－3

83－6

83－9

84−1

84−2

84−6

84−5

85−3

85−1

85−4

86－1

86－2

87－2

86－4

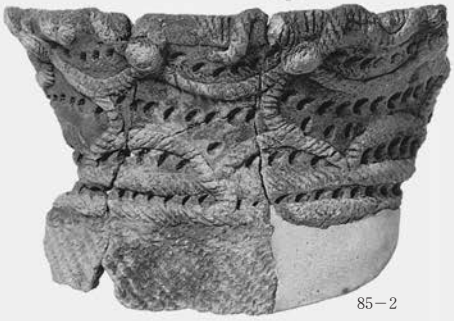
86－3

87－1

84－4

84－3

87－3


85－2

87－4

図版40　遺構外出土土器類（12）

88－1

88－2

88－3

89－3

89－1

89－6

88－4
89－2
89－5
89－4

90－1

90－2

90－4

90－3

図版42　遺構外出土土器類（14）

91－2

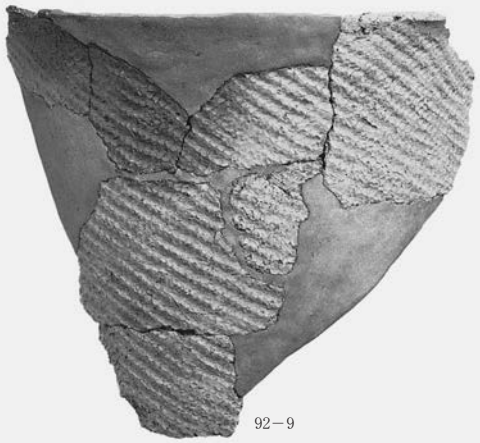
91－3

91－4

92－1

94－1

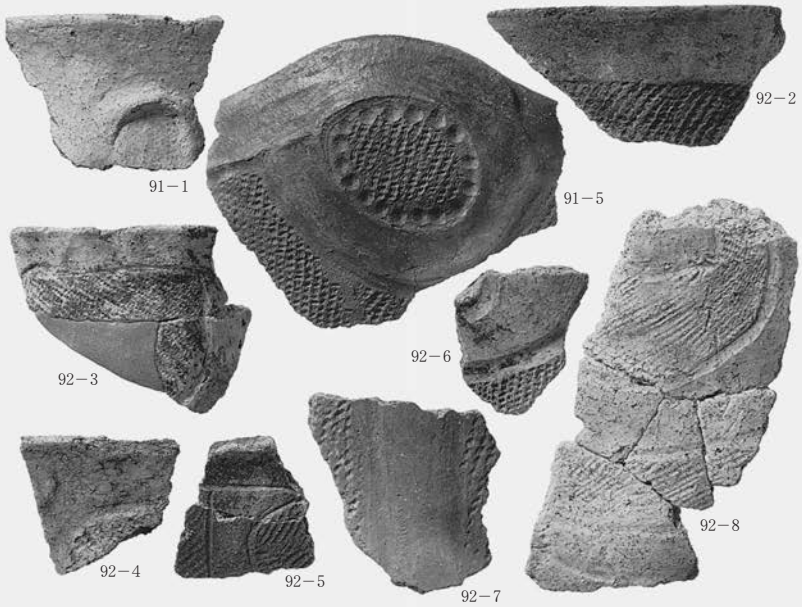
94－2

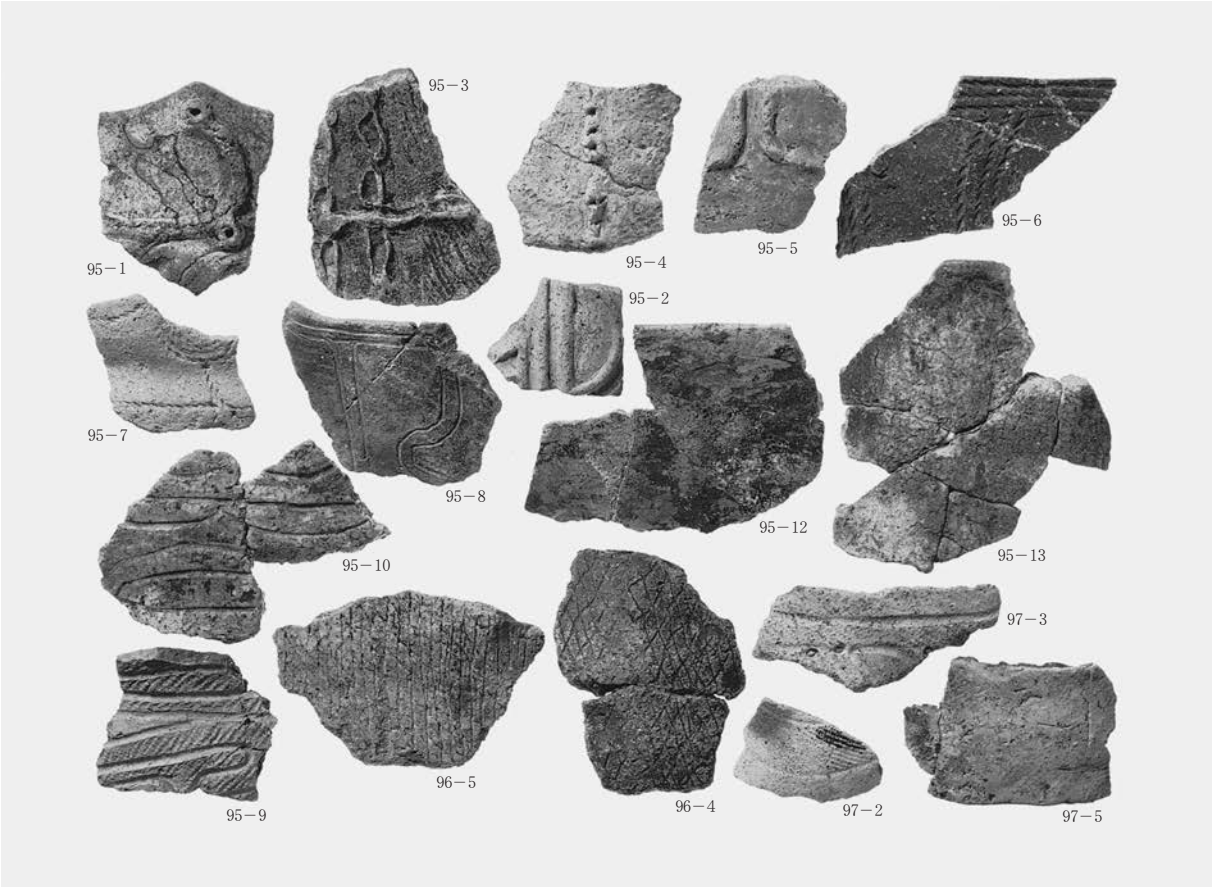

92－9

93－1

93－3

93－2


91－1
91－5
92－2
92－3
92－6
92－8
92－4
92－5
92－7


95－1
95－3
95－4
95－5
95－6
95－2
95－7
95－8
95－12
95－13
95－10
97－3
96－5
96－4
97－2
97－5
95－9

95－11

95－14

96－1

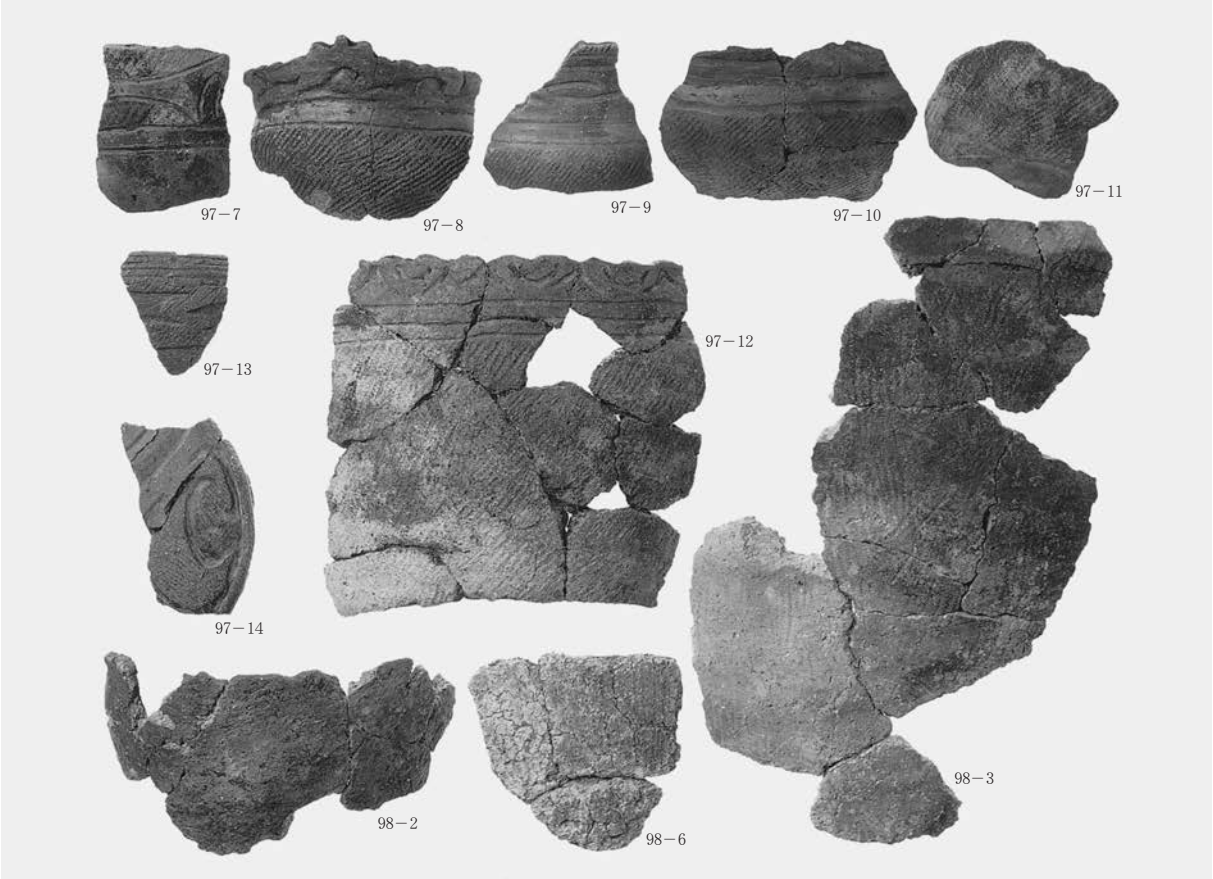
96－2

97－4

97－1

96－7

97－6


97－7
97－8
97－9
97－10
97－11
97－12
97－13
97－14
98－2
98－3
98－6

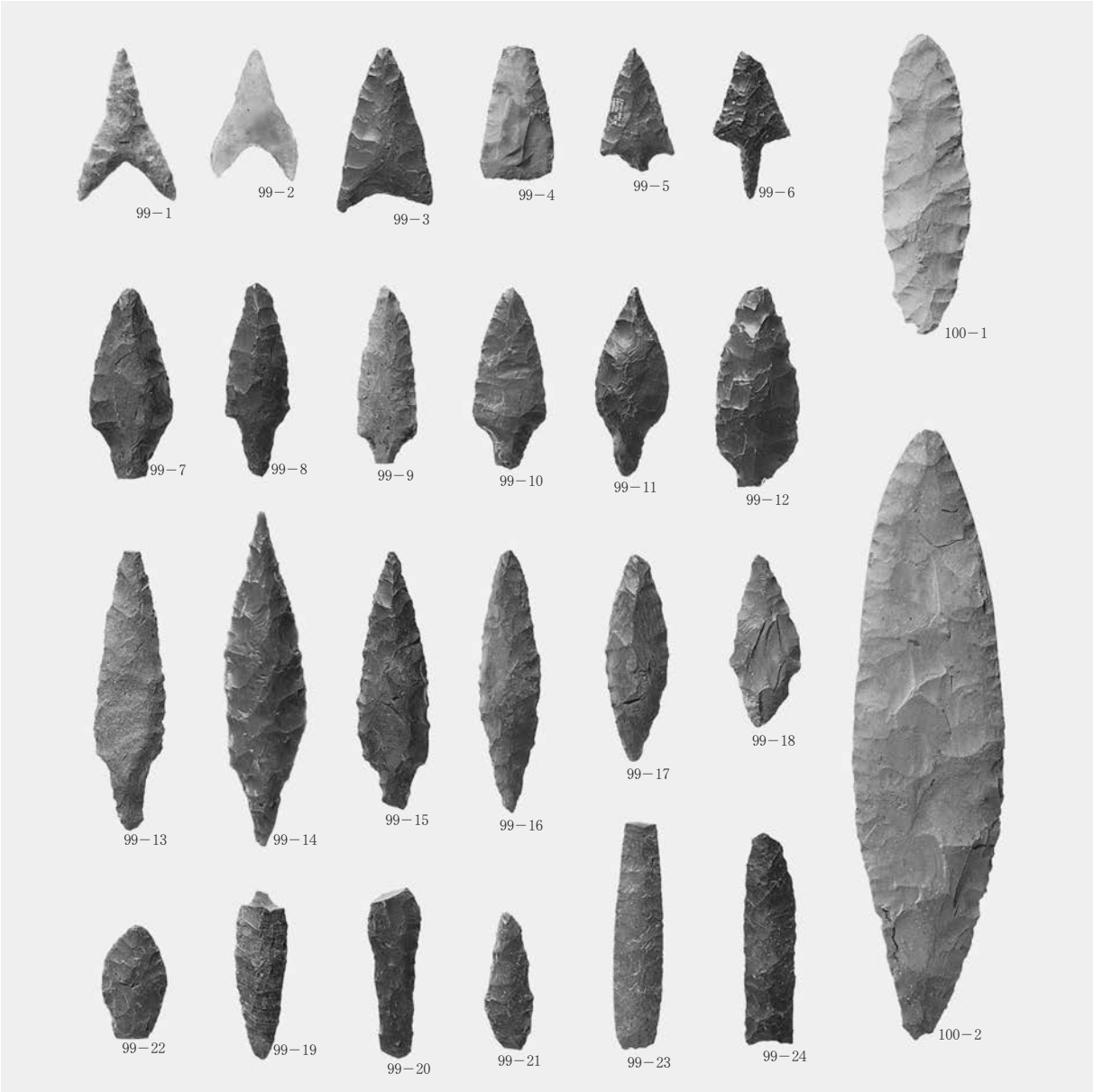
97－15

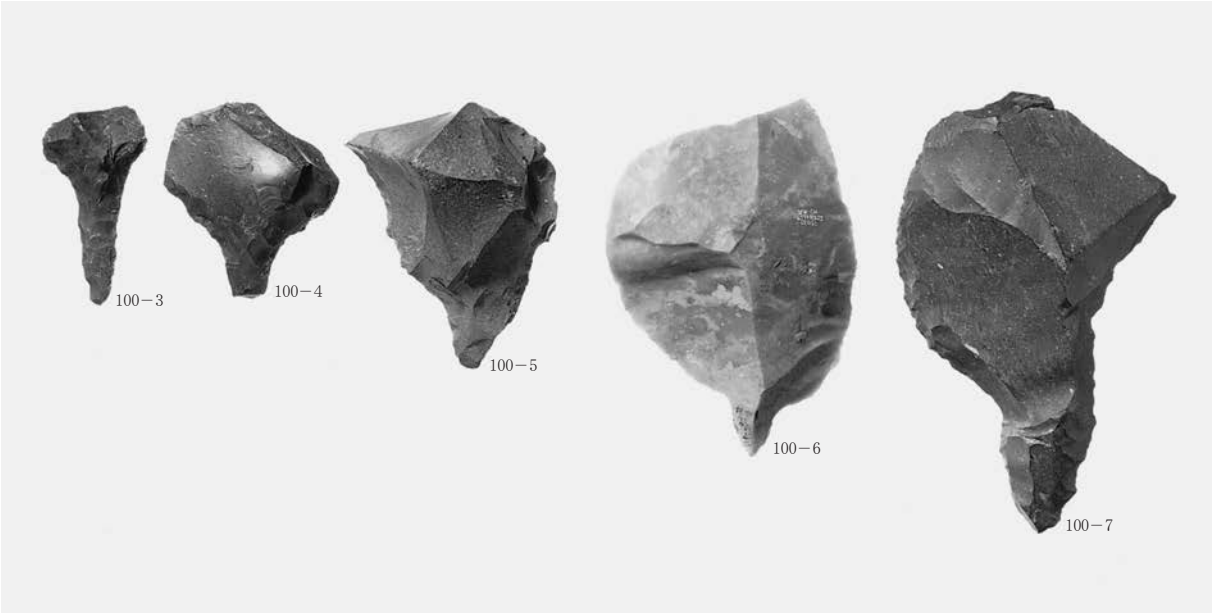
98－1

98－4

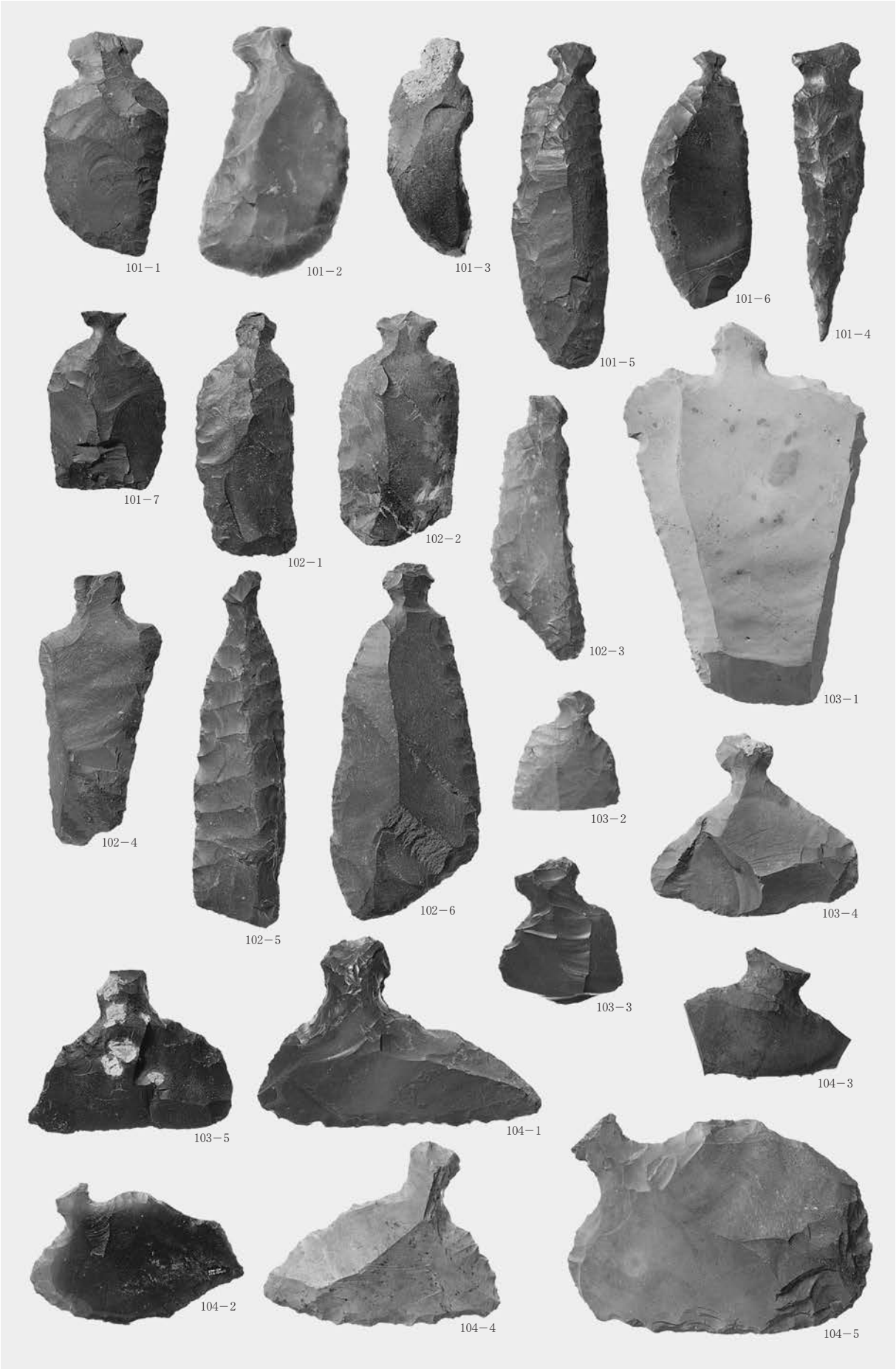
98－5

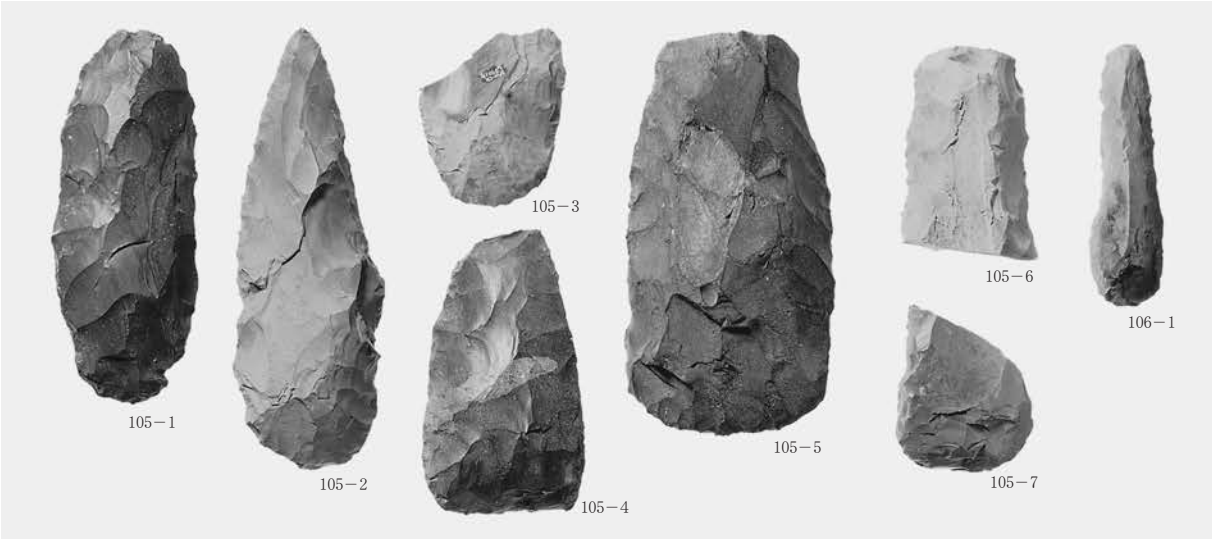
図版47　遺構外出土石器類（1）

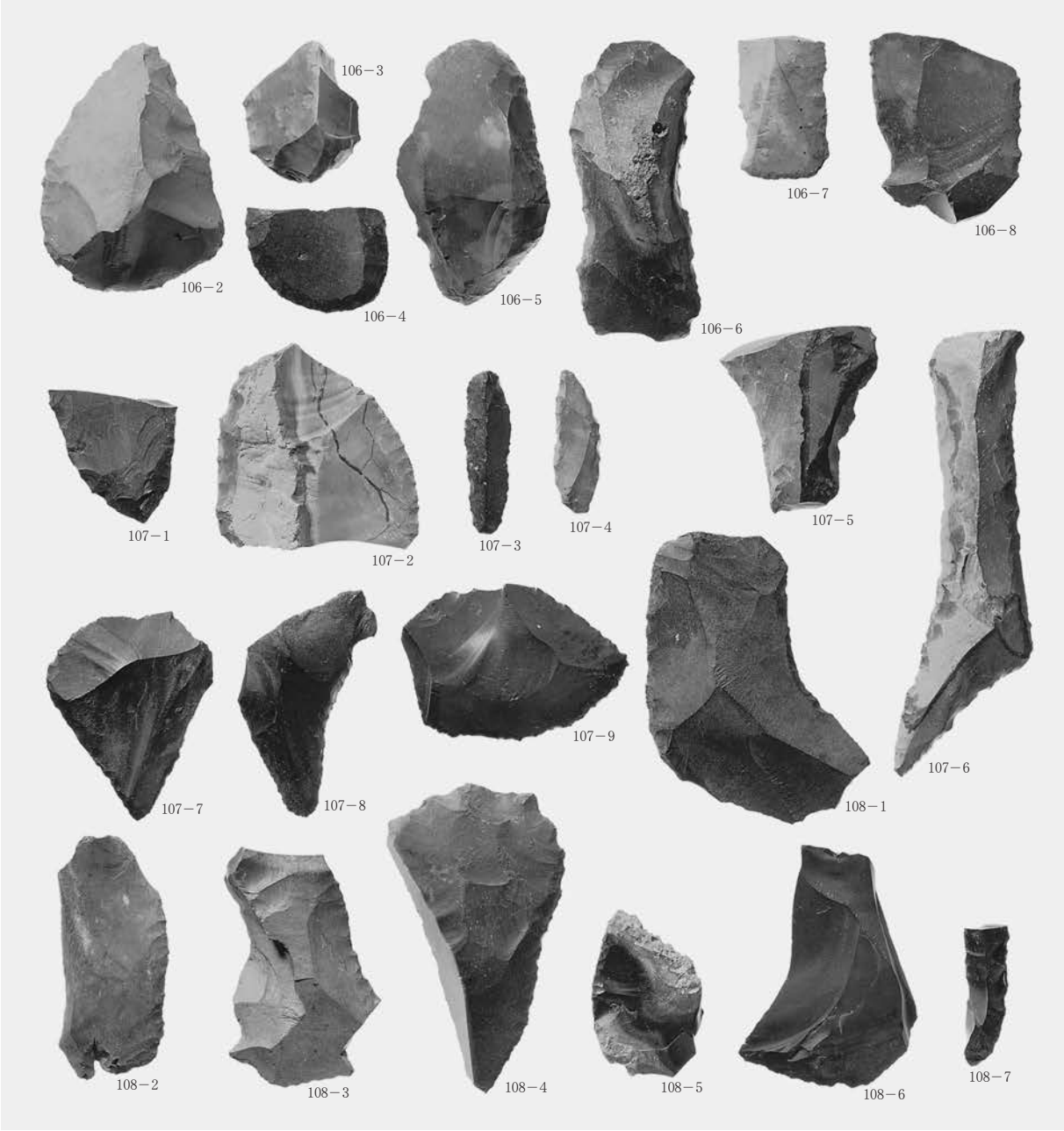




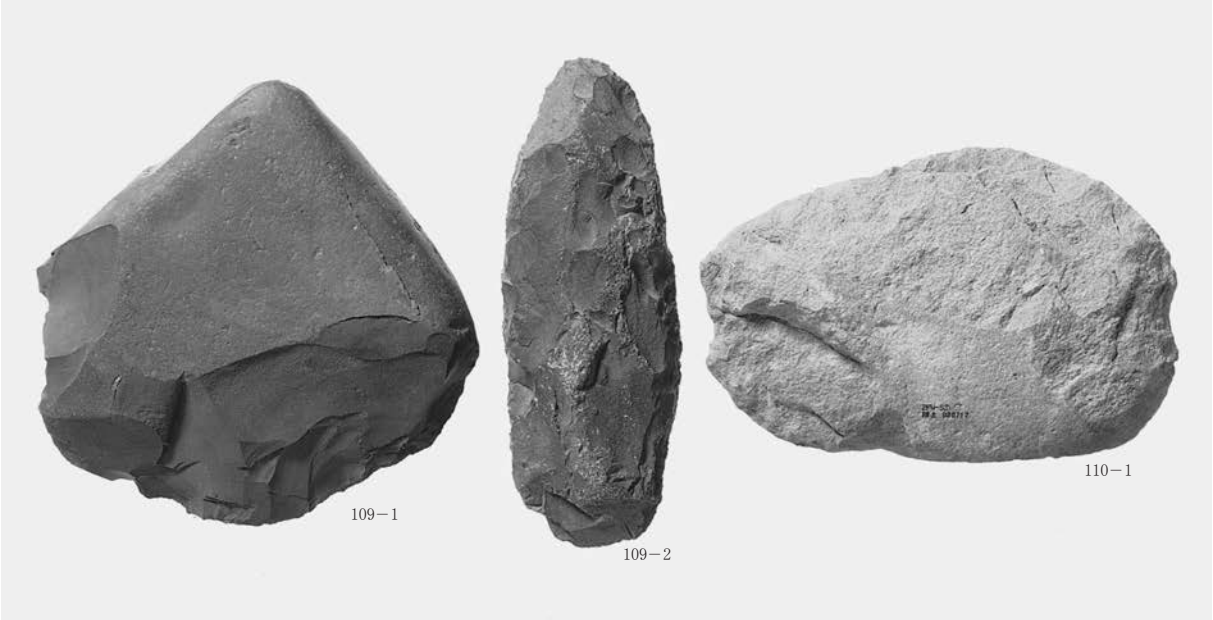
図版48　遺構外出土石器類（2）

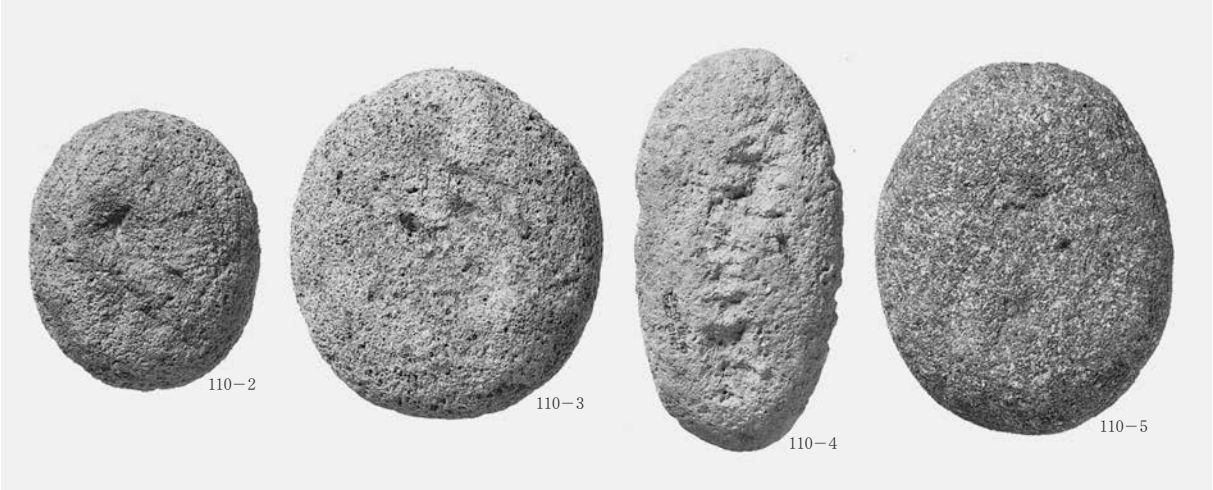



105－1
105－2
105－3
105－4
105－5
105－6
105－7
106－1


106－2
106－3
106－4
106－5
106－6
106－7
106－8
107－1
107－2
107－3
107－4
107－5
107－6
107－7
107－8
107－9
108－1
108－2
108－3
108－4
108－5
108－6
108－7

図版50　遺構外出土石器類（4）



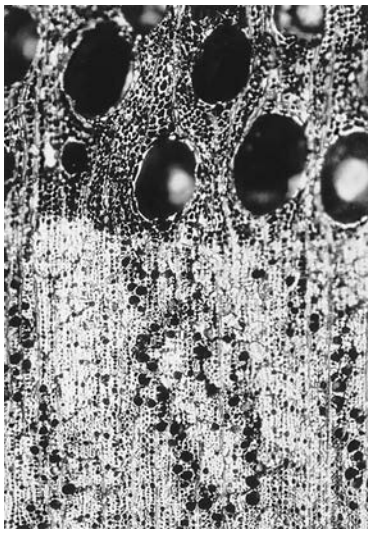


横断面 ：0.4㎜

放射断面 ：0.1㎜

接線断面 ：0.2㎜

1．試料番号10　スギ

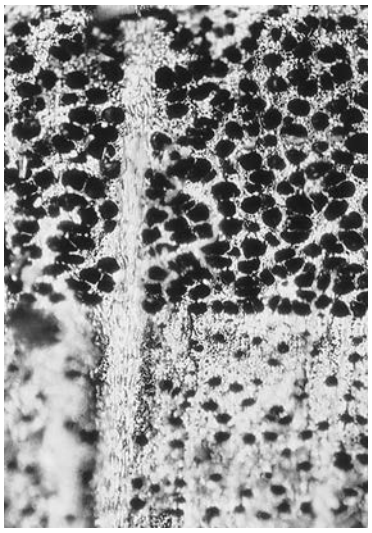


横断面 ：0.4㎜

放射断面 ：0.2㎜

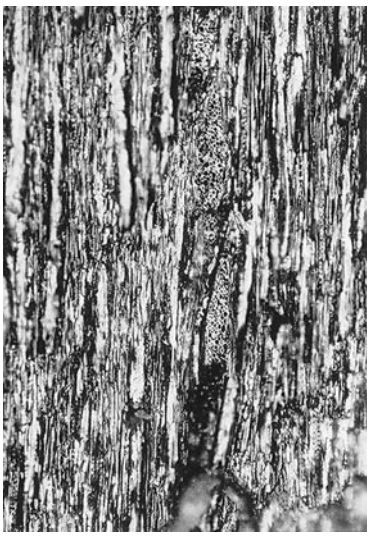
接線断面 ：0.2㎜

2．試料番号17　クリ



横断面 ：0.4㎜

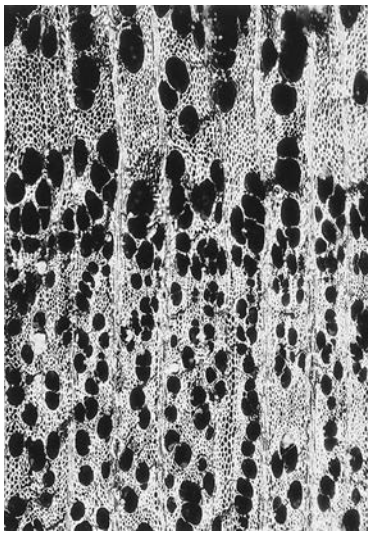
放射断面 ：0.2㎜



接線断面 ：0.4㎜

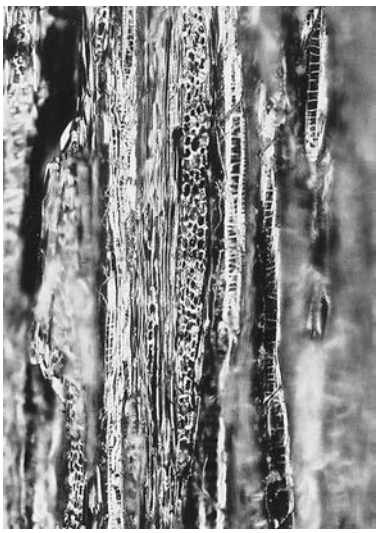
3．試料番号16　ブナ属

図版52　出土樹種(2)・火山ガラス



横断面 ：0.4㎜

放射断面 ：0.4㎜

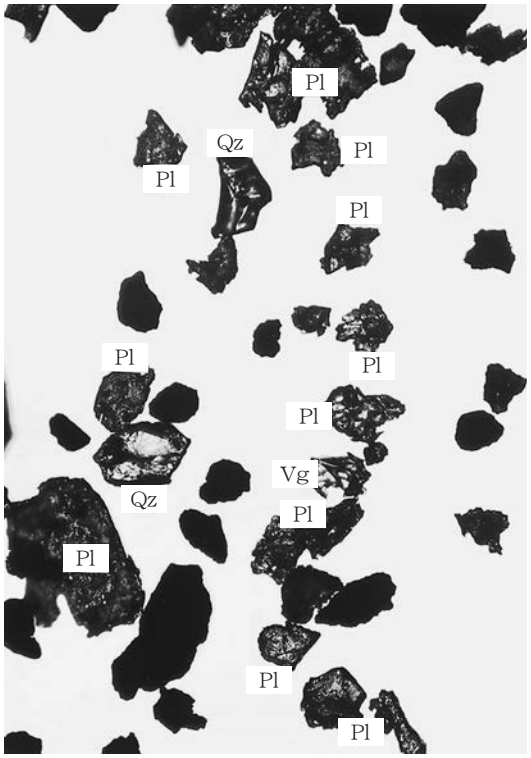


接線断面 ：0.2㎜

4．試料番号13　サクラ属

1．砂分の状況（ＬＢ57区ＥⅢ層）

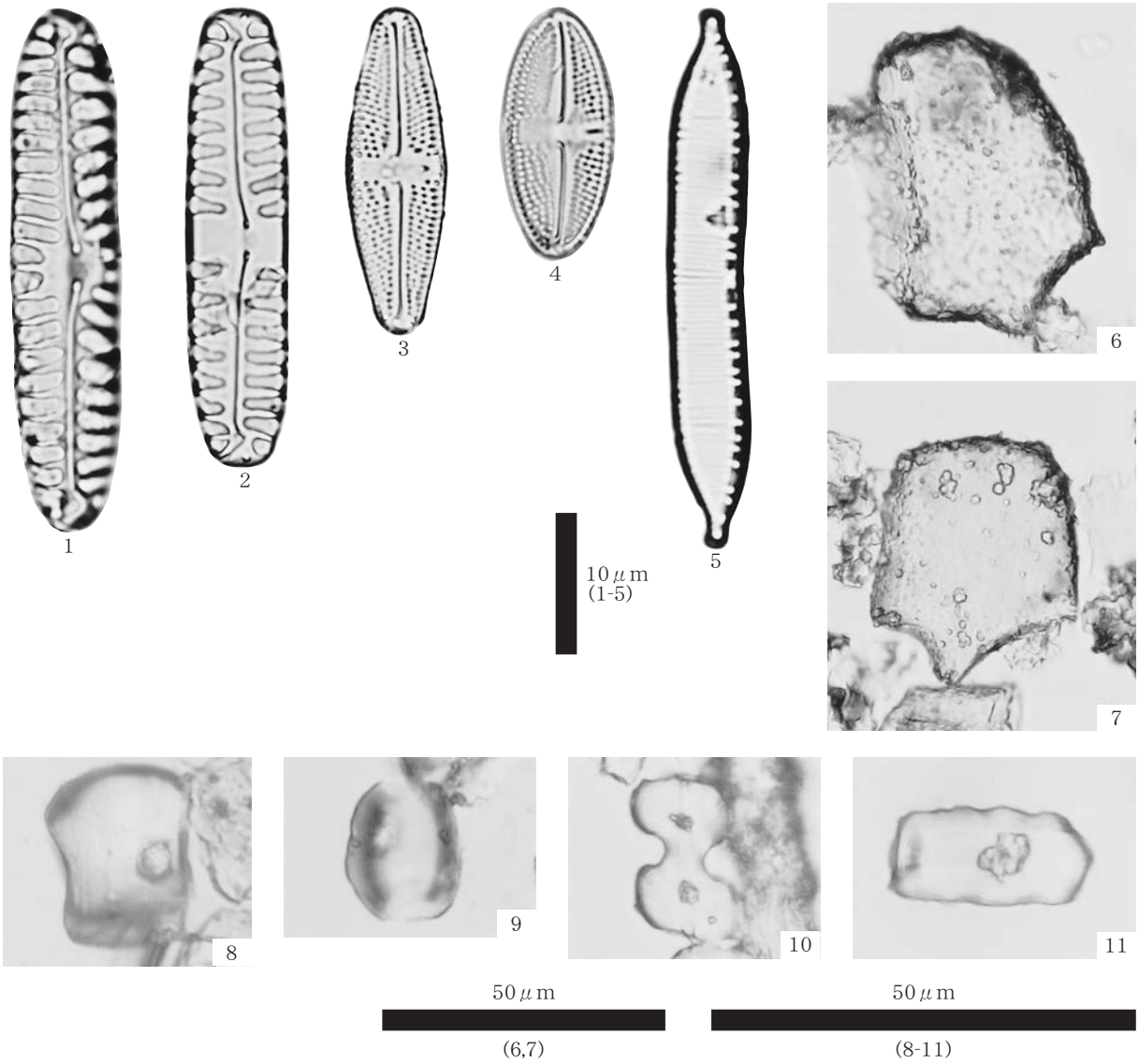
4㎜



2．火山ガラス（ＬＢ57区ＥⅢ層）

0.5㎜

Qz：石英．　Pl：斜長石．　Vg：火山ガラス．



1. *Pinnularia borealis* Ehrenberg（L N73区基本層序F地点；試料１）

2. *Pinnularia borealis* ver. *linearis* M.Per.（L N73区基本層序F地点；試料１）

3. *Navicula mutica* Kuetzing（L N73区基本層序F地点；試料１）

4. *Navicula muticoides* Hustedt（L N73区基本層序F地点；試料１）

5. *Hantzschia amphioxys*（Ehr.）Grunow（L N73区基本層序F地点；試料１）

6. クマザサ属機動細胞珪酸体（L N73区基本層序F地点；試料７）

7. ヨシ属機動細胞珪酸体（L N73区基本層序F地点；試料３）

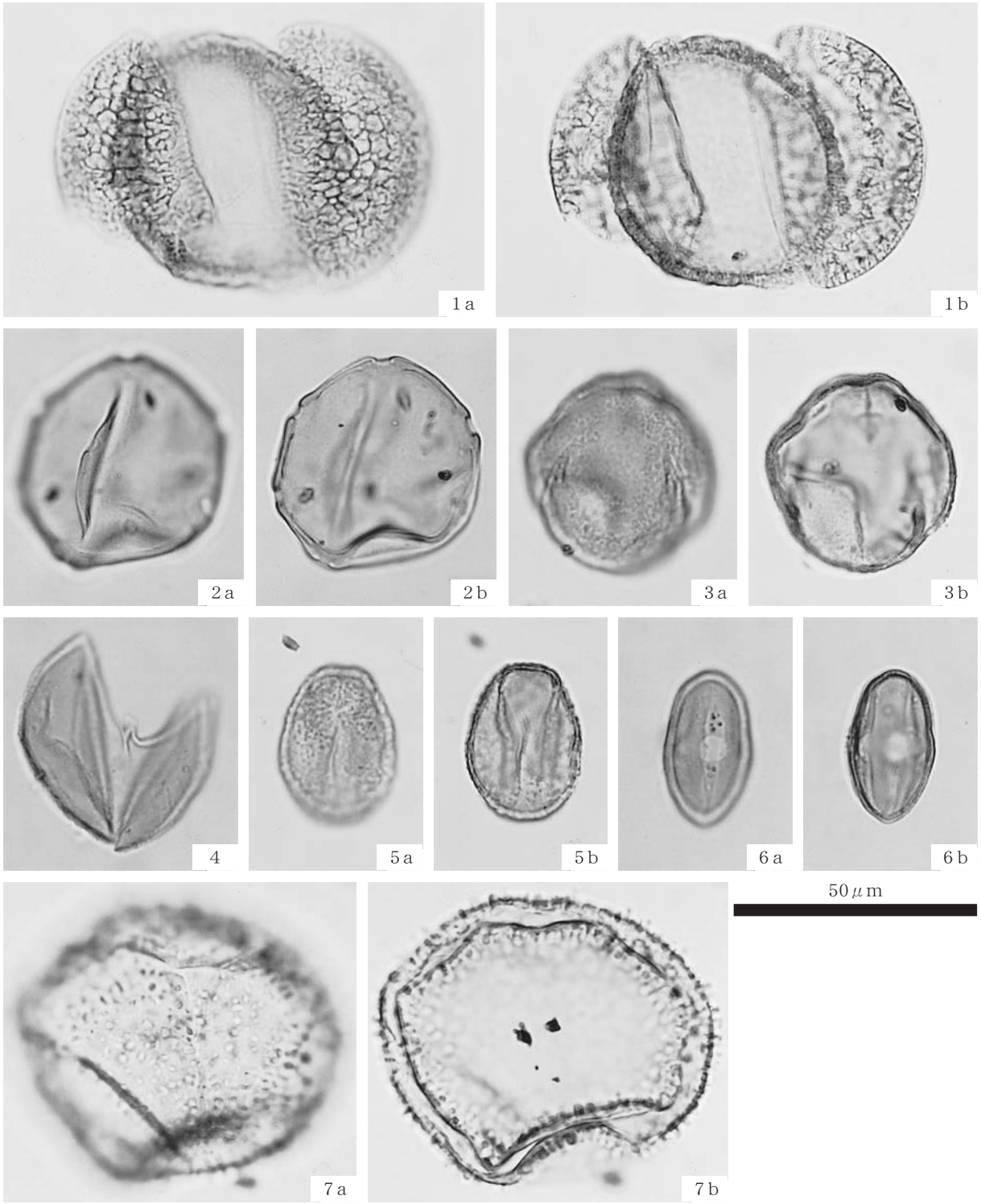
8. クマザサ属短細胞珪酸体（L N73区基本層序F地点；試料１）

9. ヨシ属短細胞珪酸体（L N73区基本層序F地点；試料３）

10. ススキ属短細胞珪酸体（L N73区基本層序F地点；試料３）

11. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（L N73区基本層序F地点；試料３）

図版54　出土花粉化石



1．マツ属（ＬＮ73区基本層序F地点；試料７）

2．クルミ属（ＬＮ73区基本層序F地点；試料１）

3．ブナ属（ＬＮ73区基本層序F地点；試料５）

4．スギ属（ＬＮ73区基本層序F地点；試料１）

5．コナラ属コナラ亜属（ＬＮ73区基本層序F地点；試料５）

6．トチノキ属（ＬＮ73区基本層序F地点；試料１）

7．ゼンマイ属（ＬＮ73区基本層序F地点；試料７）

報告書抄録

ふりがな	ふかわたりいせき
書名	深渡遺跡
副書名	森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	XVI
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第407集
編著者名	菅野美香子・榮 一郎・三浦俊成
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014-0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20番地　TEL 0187-69-3331
発行機関	秋田県教育委員会
所在地	〒010-8580　秋田県秋田市山王三丁目１番１号　TEL 018-860-5193
発行年月日	西暦 2006年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ふかわたりいせき 深渡遺跡	あきたけん 秋田県 きたあきたし 北秋田市 もりよし 森吉 あざふかわたりいえのまえ 字深渡家ノ前 104-1外	05323		40度 2分 42秒	140度 30分 11秒	20030513 ～ 20031107	15,700㎡	森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ふかわたりいせき 深渡遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　12軒 土坑　46基 焼土遺構　4基 配石遺構　1基 溝跡　2条 柱穴様ピット　32基	縄文土器 土製品 石器 石製品	縄文時代前期～晩期の断続的な集落跡。
		古代以降	掘立柱建物跡　2棟 竪穴状遺構　1基 土坑　5基 炉跡　3基 石組炉　1基 柱穴様ピット125基	陶磁器 金属製品	古代以降の小規模な集落跡。

秋田県文化財調査報告書第407集

深　渡　遺　跡

－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XVI－

印刷・発行　平成18年３月

編　　集　秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20番地

電話（0187）69-3331　　FAX（0187）69-3330

発　　行　秋田県教育委員会

〒010-8580　秋田市山王三丁目１番１号

電話（018）860-5193

印　　刷　株式会社　成　文　社